
東方恐騎行

鹿助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方恐騎行

【Nコード】

N43860

【作者名】

鹿助

【あらすじ】

幻想郷に食糧として取り込まれる人間の増大に対し、我慢の限界を迎えた外の世界の神達より一人の妖怪退治屋が送り込まれた。停戦が成った後も彼は監視役として幻想郷に留まる事になるのだが……。

オリ主、条件次第最強でも戦闘は非メイン。
シリアスにコメディをバランス良く……を目指していきます。

監視役（前書き）

【注意】

本SSは東方projectの二次創作です。

独自解釈、キャラクター、歴史、設定の改変及び消失、

そして主人公を含めたオリジナルキャラクターの介入が含まれます。
これらをご承知した上でお読みくださいませ。

小説を書くのは初めてですが、宜しければ感想、ご指摘の方、お願いいたします。

監視役

無縁塚。

魔法の森を抜け、再思の道を進んだ先にある木々に囲まれた小さな行き止まりの空間にある、無縁仏のための墓地。

少し前なら、木々に囲まれた空間にただ塚と『紫の桜』があるだけあったが、今は小さな小屋が建っていた。

幻想郷では妖怪は無暗には人を襲わない、それは幻想郷のバランスを損ねる行為であるからだ。

ルール付けされ、命を落とす事は（ほとんど）ない、形式化された妖怪の『異変』と人間の『妖怪退治』が定着している。

……しかし、妖怪にはそれだけでは収まらないモノが多いのも事実。人を殺すという事、あるいは人を喰らうと言う事をなくしては自らの存在意義を喪失してしまうとして、彼らは生贄を要求した。

そこで用意されたのは『外の世界』の人間である。

偶然迷い込んだ者や無縁塚に誘い込まれた自殺志願者、あるいは幻想郷の管理者たる八雲紫が用意した『都合のいい』人間。

妖怪の数に対して十分量、その食糧は供給されていた筈だった。

しかし、例外こそあるが人間を襲う事こそが妖怪の存在意義であり、そんな妖怪達の手元に苦勞なく人を呼び寄せられる手段があれば、歯止めが利かなくなるのも当然だったろう。

数多の妖怪達が八雲紫に対し更なる『食糧』の供給を要求した、幻想郷の人間達の保全と引き換えにして、である。
八雲紫はこれを受け入れ、近年、人間の消費量は増していたが、そこである事件が起こる。

外の世界の方々の土地神が我慢の限界とばかりに幻想郷側に取りこむ人間を減らすように、警告を行ったのだが、これに対し、八雲紫は徹底無視で応えたのである。

八雲紫は力のある神には事前に『神隠し』の了解を得たり、その神の領域の人間には手を出さない代わりに余所での『神隠し』を黙認させるなどの工作を行っていた為、
名も無く力も弱い土地神の名を連ねた警告など、無視してもなんの問題もない……そう考えてもおかしくは無かった。

実際、八雲紫から話を聞いた妖怪達の殆どはそう考えていた。
……土地神達がある一人の退治屋を幻想郷に送り込むまでは。

『きょうき恐騎来寇』

土地神達が送り込んだ、外の世界に残った少数ながらも強力な妖怪を相手取る妖怪退治屋の一人と幻想郷の一部人喰い妖怪達との戦いの呼び名である。

戦い、と言っても実際に戦闘行為を行ったのは一部の中でも更にこ

く少数の妖怪だった。

『恐怖を駆り立てる程度の能力』を有する退治屋に対し、どの妖怪も——それこそ、三度の飯より戦いが好きな妖怪も余程追いつめられない限りは道を譲って退く事を選んだからである。

結局、戦いに参加した妖怪達の誰も進んで退治屋とは戦いたがらず、退治屋の方も実力自体は幻想郷古参の妖怪達にはとても及ぶものではなかった為、程なく戦いは硬直。

その間に八雲紫が他の妖怪達を納得させて条件付きの停戦を提案し、土地神達がこれを受け入れてこの戦いは終息する事になる。

条件は何項にも及び、その中では幻想郷が外の世界から取りこむ人間の量が定められた（必要最低限と言うには多すぎるが、それでもかなりの削減となった）。

そして、それらの条件が確かに守られる為に監視役として、退治屋

——『恐怖の駆り手』が幻想郷に留まる事になった。

以後、恐怖の駆り手は無縁塚の傍らに住まう事になる。

監視の役目に加え、幻想郷の糧となった外来人の為にその冥福を祈る、塚の守り役として。

「結局、スキマ妖怪の思い通りという事かな」

「ふむ……どういう事でしょうか？」

ここは無縁塚の傍らに立つ小屋。

外の世界から派遣された幻想郷の監視役たる俺の、簡素な住まいだ。

一週間かけて小屋を建てて一式生活道具などを持ち込み、周囲の彼岸花の毒気対策もして、やっと一息ついた所だ。

生活に必要な物は土地神様負担で適時送り込んでくれる事になっているが、しばらくはこのままで大丈夫だろう。

で、今ちやぶ台を挟んだ俺の目の前でコーヒーを煽りながら話しているのが今回の引越しの手伝いをしてくれた外の世界の俺の知人……いや、知妖怪。

黒いネクタイスーツ姿に髭を蓄えた紳士風の中年男性にしか見えな
いが、川男という妖怪である。

『人間を精神的にも肉体的にも殺さない』という条件を呑んで退治
屋達との対立を避けた妖怪だが、正直、俺よりもよほど強い。

その妖怪——綾川 あやかわけはじめ 元さんがさも当然と言うように言葉を続ける。

「アレとて外と事を交えたかった訳ではないだろう。

ただ、人の消費量を減らすにはこういうやり方が好都合だった
だけ」

「つまり、妖怪である自分の口から、人の食べ過ぎは自重しよう、
と言っても角が立つ。

だから外の世界の退治屋なり神なりと一戦交えて丁度いい落とし
所を見つける形を取ったと？

……全く、俺があっさり負けたらどうするつもりだったんだか、
実際そうなくてもおかしくなかったのに。

いや、もっと大物が来るのを期待してたのか？」

「確かに、実力だけで言えば君より強い妖怪などそれなりにいるだろうな。」

しかしだ、実際に戦ってみて外の世界の妖怪と何か違いはなかったかな？」

そう言われて記憶を漁る。

とはいえ、戦いに違いはあつて然るべきなのだ。

今回、俺は最初から妖怪を殺さずに恐怖を刷り込んで譲歩を引き出す事に専念していた。

最初から実力差は分かっていたので、下手に相手を殺そうとして追いつめれば不利になると思っただからだ。

それと、万が一に更に万が一を重ねるくらいの確率で俺がボロ勝ちしてしまうと、幻想郷のバランスを損ね、崩壊させてしまうかもしれないという理由もある。

数多の妖怪が一斉に外の世界に出れば犠牲は数えきれなくなるだろうし、幻想郷内の人間の生活だって壊れてしまう、それは本意じゃない。

俺がしばらく悩んでいると元さんはため息をついてもう一言付け足した。

「今回の君の作戦、相手が外の妖怪共みたいな輩だったら成功しただろうかな？」

「え？……そりゃあ——」

外の……今まで戦って来た妖怪か……。

——人を喰い殺し、退治屋と戦う、だからこそその妖怪だ！——

——我が意思がお前に恐怖し戦いを避けようと、数億の意思に否定されて尚ここにある我が存在そのものが、決してそれを認めぬのだ！——

——人を襲うのは腹を満たす手段でも、目的そのものでもない……物理法則以前の大前提だぜ？さあ、来いよ退治屋——

「……無理、とは言わないまでも難しいですね。

そう簡単には折れないでしょうから。

成程、こちらの妖怪は何が何でも人を襲うんだって意志が無いというか。

外の世界の妖怪と比べると総じてあまり恐くなかったですね、実力はあるのに」

「それはそうさ。

人間の否定の意志の下、夜を侵食する光に晒されながら、積み上げられた常識という殻を打ち砕いて人の恐怖を啜って生きている妖怪と、

実戦に近い決闘ごっこだけで感覚を維持してる妖怪とでは差も出るからな。

私に言わせれば、ここは居心地が良すぎて気持ち悪い……人々が妖怪の存在を受け入れた上で恐怖している。

あの否定の意志の奥深くに隠された恐怖こそが至高の美味だというのに……」

「……妖怪の貴方達が何と言おうと、恐怖の本意は主を護る事にありますよ、統率者の俺が言うんだから間違いありません。

それはそうと……その言い方じゃやっぱり元さんは外に戻るんですね」

「ああ、安心したまえ、君が居なくなっても約束は守るさ。

私は『怪談の牧者』、直接人を襲う必要もないからな。

君が居なくなつて暴れだす妖怪が出るようなら抑えるくらいはしてやろう。

偶には様子を見に来るつもりだが、特にしてやれる事はないだろうからな、友の弟子への最後の氣遣いとしては過ぎたものでもないさ」

「……ありがとうございます。

それから、土地神様達には申し訳ないと伝えておいて貰えませんか？

もつと俺が頑張ればこれからの犠牲者も減らせた筈なのに、と」

両陣営の戦力差を考えればこの戦果は奇跡と言つていい（実際はスキマ妖怪の目論見通りだったようだが）。

でも、あの時もう少し上手くやればもう一人分、あそこでもう少し頑張ればもう一人分、幻想郷の人間消費を減らせたかと思うとどうしてもやりきれない。

自らの守護する土地の人々を持っていかれる神様達とて同じ気持ちだろう。

そう思つて言つた言葉だったが、何故か元さんはキョトンとした表情をして、

その一瞬後にコーヒ―を吹き出し、クハハと笑い出してしまった。俺が不満を隠しもしない表情でちやぶ台を拭き始めると、仕草で謝りながらまだ笑い続けていた。

「あゝ、済まないな、そうだ、君はそういう男だったな。

奴らの面白い表情が見えそうだ、確かに伝えよう」

奴らとは土地神様達の事だろうか？

……… どういう事かと問い詰めようかとも思つたが、その前に元さんが立ちあがつてしまったので、まあ、いいかとスルーした。

あゝあゝ、畳に沁み込んだじやってるよ。

「ちよつと元さん、拭くの手伝つて――」

つて、もういねえし。

襖あける音もドア開ける音もしなかったぞ……。

全く、こんな調子で妖怪相手の抑止力の役割なんて果たせるのかね、俺は。

無縁塚の小屋を去つたその足で、綾川元は八雲邸を訪れていた。

どのような道程を辿ったかも常人には分からないが、兎に角、迷わず辿りついた事は確かだった。

「あら、迎えに行くつもりだったのに自力でここまで来るなんてね」

「なに、今回の茶番の企画者の顔を早く見てみたくなってね。さて……自己紹介は必要かな？」

「要らないわ、『怪談の牧者』殿。

兎に角、中へどうぞ、門前で済ませるにはちよつと長い話題でしょう」

「そうかな？」

まあ折角だ、お言葉に甘えてお邪魔しよう」

お互いに腹を読ませぬイイ笑顔を浮かべたまま、話しの場は室内へと移る。

と言っても、初めは元が差し出した書状を紫が読むだけだったが。

「個人的に……君の計画は失敗すると思うがね」

「あら貴方、知ってるの？」

「察しはつくさ。

彼にお似合いの役回りだからね」

ほうと呟き、手にした書状を折りたたんで脇におきつつ、紫は目の前の妖怪に視線をやる。

「じゃあ、どうしたら上手くいくかしら、教えてくれない？」

「ふむ、言い方が悪かったな。

上手くいくかもしれないが、思い通りにはいかないよ。

彼の物語に、それは似合わない」

そう言つて元は天井に――いや、更にその向こう側を見るような視線を上にする。

「確かにこの地は彼さえも受け入れるだろう、しかし彼はこの地を受け入れないよ。

彼の師がそうであったように……ね」

まるで物語を語るような抑揚のついた喋りに対し、紫は短く息を付くと淡白に返した。

「『恐怖の大王』と彼は違うわ。

アレは外の世界の人間の心が生み出した妖怪モドキ、彼は人間、同じに語れるものでもないでしょう」

「ほう、君が我が友を御存じとはね。

そうさな、あの師弟をよく知らない者からすれば、そうも取れる

かもしれないな。

だが、君には分かるまいよ。

人は恐怖や不安を捨てられない、本質は何も変わっちゃいない、だのにこんな箱庭を作ってしまう君にはね」

元がクククと笑いを漏らしながらそう応える。

その後も少し、彼らは言葉を交したが、それは特に意味を持たない会話だった。

そもそも、元は書状を届けに來ただけなのだから、双方、本気で議論をしている訳でもなかったのだ。

元が携えてきた書状——恐怖の駆り手を送り込んだ土地神達の内の一柱から八雲紫に当てられたそれには、以下のような内容が記載されていた。

恐怖の駆り手は自分自身の恐怖を独特の式を用いて武装や軍馬、兵として具現化したり、他者に感染させる事が出来る。

自己暗示で強い恐怖を抱いた上で、それを利用して戦うのが戦闘での使用方法である。

自分の心自体にこれまた独特の式を仕込み、一個人が抱くには大きな過ぎる恐怖の運用を可能にしている。

他者の恐怖を具現化する事もできるが、それを自由に操る事はできない。

恐怖の駆り手曰く、本来恐怖とは主を守る為に生まれる感情であり、

その為にしか動こうとはしない。

元の主の為、という目的に限定すれば、自らに協力させる事もできるようだが……詳しくは分からない。

大きすぎる軍が国を破たんさせるように、強い恐怖が主を傷つけてしまふ事もあるが、それは決して本意ではないとも言っていた。

そんな恐怖を認め、嘉し、愛すのが1999年と7カ月もの間を戦いに生きた『恐怖の大王』の役目であり、その責務は弟子の自分にも引き継がれてとも、な。

恐怖の本意は守護にあり、と彼は信じている。

故にもし、人に害なす妖怪が人の恐怖の化身を自称するならば、彼はそれを渾身で否定するだろう。

先の条約を守るならば彼を幻想郷に引き込む事自体を邪魔するつもりはないが、かなりの危険を孕む行為であると思われると思われただけはしておく。

駆る者刈るモノ

賽の河原。

一人の幼子の霊が、必死に走っていた。

命を落としてしばらく経つ、本来ならとくに三途の河を渡っているべき存在なのだが、

この世の未練を断ち切れず、ただ河原で石を積んでいた……つい先ほどまで。

そうしていればなんとかなる、そんな希望があった。

こうしていれば取り返しがつかなくなる、そんな不安もあった。

その全てが、彼が積んでいた石の塔ごと、馬蹄に踏み砕かれた。

不意に顕れた漆黒の騎士がその子を追い回し始めたのだ。

黒一色の武装と騎馬、確かに異様だが、それだけでは説明できない直接心に叩きつけられるような恐怖を感じた。

追いつきかけてはわざと振り切られ、また急に接近するという風にまるで子の恐怖を煽るような追いたて方をしている。

もつとも、子の方には馬が子供である自分相手に追いつけない不自然さになど、気づく余裕もなかったが。

恐怖で胸が詰まり、既にしていない筈の息を上げて、幼子の霊は走った。

走りながら、今の自分が向かっている方向に気づいて胸に微かな希望を抱く。

三途の河——あの世とこの世の境の河。

あの騎士もその向こう側までは折ってこれない筈。

ついさっきまで、自己の心の憂鬱の象徴でもあったあの河とその渡し船の存在が、今では恐怖から抜け出す唯一の光明となっていた。

結論を言えば、その子が抱いていた希望も不安も真実であった。

未練を残して霊が長くこの世に留まれば、当人の意思に関係なく周囲に災厄をもたらす存在となってしまう。

そうなれば、退治された末に罪科を背負って地獄に落とされる事もありえた。

そして、そうなる前に彼は未練をかなぐり捨てて三途の川を渡る事になった。

実際に、なんとかなったのだ。

三途の川に最も近い地、無縁塚の傍らの小屋にて恐怖の駆り手は不意に顔を上げた、

窓の外をチラと見やり、ただ静かに一言——

「大義であつた」

とだけ呟いた。

俺の幻想郷での生活が始まり二週間。

主に勉強と修行、そして覚えたての供養の日々だった。

後は偶に降ってくるガラクタを脇にやつたり、これまた降ってくる死体の埋葬をしてやるくらいか。

自殺志願者が迷い来る地と聞いていたが、今のところはそんな人が来る事もない。

今の所、俺のこの小屋には来客が少ない。

昨日、元さんが様子を見に来たが、本当に様子を見にただけだった（窓から覗いて、そのまま帰って行った）。

幻想郷の有力者に挨拶周りをするべきかとも思ったが、俺は幻想郷に親しむべき立場にはないので止めておいた。

……まあそんなのは建前で、本音は一定量の犠牲を払う事に納得しきれない俺がただ単純に人喰い妖怪と顔を合わせるの嫌だからなのだが。

監視役と言っても実際にはそこにいるだけの仕事、外の犠牲者に関しては外の別の退治屋がちゃんと数えてるらしいしな。

「霊も小屋には寄りつかなくなっちゃったしな」

少し前までは幽霊、それも俺を祟ろうとする悪霊が結構な数、小屋の周りにも見受けられたのだが。

修行の時に発動した恐怖感染の所為で恐がらせてしまい、皆この小屋の近くまでは寄りつかなくなってしまったのだ。

……恐怖感染はその時にしか効果がないが、恐怖した記憶は当然（風化するまでは）残る。

「話し相手が居ないと独り言が増えていかんね、全く」

俺がそんな独り言をすると、コツコツ、とドアを叩く音が聞こえた。来客だろうか？特に心当たりはないが……。

そう考えている間にまたコツコツとノックの音が聞こえてくる。

「はい、どちら様？」

急かされるように立ってドアを開ける俺の前に一人の少女が立っていた。

彼岸花を連想させる赤髪のツインテール（でいいのかな、短いけど）。

外の世界から来た俺にはなんとも奇妙に映る幻想郷風（と思われる）の服装。

そして大きな鎌。

……え？鎌？

顎に手を当て、俺の顔をまじまじと見つめる彼女に対し、俺は硬直したまま思考だけを働かせていた。

妖怪の気配はしないが人間でもなさそうだが、ってことは彼女は話に聞く死神か？

これはアレか？お迎えなのか？いくらなんでも早すぎるだろう、そりゃいつ死んでもおかしくない人生渡って来ただけさ。

いや待て待て、死神が直接やってくるのは仙人の下にだけだろう…

…俺は違うぞ、欲塗れの健全な男の子だもの。

「人違いです」

とだけ告げて、手に掴んだままのドアノブを引いてドアを閉めようとする。

——が、死神もドアを片手で抑えてそれをさせない。

流石に力が強い、武装してない俺、つまりただの人間の力じゃとても敵わない。

「あの、ですから人違いです——」

「この所、賽の河原で石を積む子の霊が居なくなつてさ、さつさと河を渡りに来るようになったんだけど、アンタの仕業かい？」

「……はい？」

……む、その事が。
やっぱり勝手にやるのは不味かったか？
だが――

「俺は適切な恐怖に形と力を貸しただけです。
その子らを直接動かしたのはその子ら自身の恐怖です」

「……ふん」

少しだけ考える仕草を見せる少女。
ってかこっちは結構全力でドア引いてんのに、片手で涼しい顔して
抑えやがって……。

――不意に少女が勢いよくドアを更に大きく開いた。
驚き、手からドアノブがすっぱ抜けた間抜けな体勢で硬直している
俺に向かい少女はなんとも眩しい笑顔でこう告げた。

「詳しく聞こうか、さあ上がった上がった。
こんな不審人物がいれば調べなきゃねえ、これも仕事の内だよ、
うんうん」

脇をすり抜けてドカドカと小屋に上がる彼女に、俺はため息交じり
で後に続く事しかできなかった。
別にお迎えに来たわけでは無いようだし、ちょっと言葉を交すくら

いならむしろ嬉しい――

「おい、なんか飲み物ないか？」

……馬鹿みたいに濃いコーヒーでも出してやろうか、ったく。

「へえ、じゃあアンタがああ恐怖の駆り手かい？」

「……こつちでもその呼び方が広まっているとは。」

ええ、そうですよ、名前は外の世界に置いて来たのでとりあえず『監視役』とでもお呼びください」

結局、俺が幻想郷に来た過程を一通り説明してしまった。

死神さんは俺の淹れた甘くしたカフェオレ、俗に言う所のコーヒー牛乳を啜りながら話を聞いていたが、最後にぐっと煽ってカップを空にし、今度は自分から話し出した。

「もう察しはついてるみたいだけど、あたしはその三途の河で渡し船の船頭をやってる死神さ。」

外来人は偶に見かけるけど、アンタみたいなのは珍しいな……名前を置いてきた、ってどういう意味だい？」

「俺はあくまで外の世界に所属してる人間ですからね。」

普通なら幻想郷入りしてあまり時間が経つと幻想に染められてしまいますが……。

ちよつとした魔術みたいなもので名前を外の世界に置いてくる事でそれを免れている訳です。

まあ、幻想に染められた所で実際にすぐにどうこうなる訳ではありませんが、保険は大事と言う事で」

「ふゝん……よく分からんね、あ、おかわり、もう少し甘さ控えめがいいかな」

……寛いで頂けているようで何よりです。

死神の扱いなんて分かんが、別に取って食われる訳じゃないみたいだな。

俺が注文通りのおかわりを淹れて戻ってくると、本棚から漫画（俺が外の世界から持ってきたものだ）を取ってパラパラと流し見ている所だった。

「ウチは漫画喫茶じゃないんですよ……と言っても通じませんか。

はい、御注文の品です……もう一時間になりそうですが、お時間は大丈夫で？」

「え、マジで？」

あゝ……しゃあない、戻るか、これ借りてってもいいかい？」

「嫌ですよ、読むならここで読んでください」

俺は土地神様経由で比較的自由に幻想郷に外の世界のモノを持ち込める立場に居る。

そんな俺がそれを幻想郷に提供するのはよろしくない。

下手をすれば生き残り、幻想郷に定着する外来人の強みを損ねる行為になってしまう。

この世界の知識もない彼らが比較的歓迎されて受け入れられるのは外の世界からの知識、あるいはその持ち物に依る所もあるからだ。

まあ、そんな能書きを垂れるのも面倒なので、嫌の一言で引き下がつてもら——

「んだよ、ケチ、いいじゃないか」

——えなかった。

馬鹿な、俺がケチなら今貴方が一気に飲んだカフェオレはどこから出てきた。

「よし、こういう時は弾幕ごっこで決めようかい。

あたしが勝ったらこれは借りてく。

アンタが勝ったら……まあいいや、その時決めよう」

「弾幕ごっこ？」

ああ、あの一番有名な決闘法という……」

「あ？……そうか、知らないのかい」

「俺が知っているのは、断る事もできる、という事だけです。

そして恐らく、それで十分だろうとも思っていますが」

「弾幕ごっこがなかったら妖怪の相手とか大変——ってそうか、ア
ンタは平気なんだったね。」

正直、俄かにや信じ難いけどさ。

仕方ないなあ……また読みに来るよ」

渋々、と言った様子で漫画を置いて出ていく死神さん。

玄関先（小屋と言ってもそれなりに大きいので）まで見送りに出た
所でふと思い出した事を伝えておく事にした。

「死神さん、来てくれるのは結構ですが午前中は避けた方がよいか
と。」

修行しているので下手したら能力で恐がらせてしまうかも知れま
せんから」

「……だから悪霊も人喰い妖怪も寄りついてなかったのか。
分かった、気をつけとくよ」

「あの、死神さん。」

……あの子たちは、その……間に合ったでしょうか？」

「……ああ。」

それから、あたしは小野塚小町だ、またな、監視役」

外の世界以外からの初めての来客。

彼女は厳密に言えば幻想郷の住人ではないのかもしれないし、俺は

幻想郷に敵対心に似た感情を少し抱いたままだったが。
少しはこの地に親しむのもよいかと、そう、思わせる出会いだった。

夜来風狗

妖怪の山・天狗の里

「むむむ、どうしたものか、どうしたものか」

妖怪の山の烏天狗、射命丸文は悩んでいた。

先の『恐騎来寇』に関する取材について、である。

複数の人喰い妖怪を向こうに回し、ただ一人で戦って見せた人間、恐怖の駆り手。

弾幕ごっこ等の決闘法を用いないガチ戦闘、能力持ちの外来人、人喰い妖怪達は戦いの事を話したがらず、停戦は八雲紫がさつさと纏めてしまった為に彼の存在は未だ謎に包まれている、取材するべき理由は多い。

しかし、なのに何故彼女は取材に行かないのか。
否、むしろ彼女は誰よりも早く取材へ向かった。

人喰い妖怪と恐怖の駆り手が戦いを繰り広げていたその時に戦場である、幻想郷の果てまで向かったのである。
だが、取材はできなかった。

恐すぎた。

その気になれば自らの起こす風でなぎ払える筈の、漆黒の兵達の整然たる空中布陣が。

——人間如き、か……よい、であればその傲慢な心ごと馬蹄にかけ
てくれよう——

決して自分を捉えられる筈もない、宙を駆ける騎士たちの突撃が。

——蹂躪せよ——

それらの先頭に立っていた、フルフェイスヘルムに顔を隠した統率
者の存在が。

結局、隠れながら取った照準のズレた写真の数枚だけのみ携えて、
妖怪の山に帰って来てしまった事は彼女のプライドを甚く傷つけた。
戦いの終息を知った後、手持ちの烏を総動員して恐怖の駆り手を探
せていたが、先ほど、ついに発見報告が入った。

「ええい、弱気になってどうする射命丸文！」

……とはいえ、恐いモノは恐いのである。

いざ向かおうとすれば足が竦んで進めない、いやどうせ飛んで行く
のだが、そこは比喻表現だ。

いつその他の烏天狗を誘って行けば心強いか。
しかし、できればネタは独占したい。

そんな風に思考が堂々巡りを始めた時、目の前を一人の白狼天狗が
歩いて行った。

下っ端哨戒天狗・犬走椋、時刻は既に夕刻であるからこの日の務めを終え、交代して戻って来た所だろう。

射命丸とは知り合いではあるが、大天狗相手にはへつらっても烏天狗には表面上の敬意のしか払わない嫌な奴である（と射命丸は思っている）。

だが今回の道連れには適任ではないか？烏天狗が頭を下げて頼めば決して断りはしないだろうし、取材活動を手伝わせる事だってできる。

「……この際、手段は選んでられない」

決断すれば早かった、迷いがまた生まれる暇もないくらいに。

こうして二人の天狗は無縁塚へと飛ぶ事になる。

夕飯を食べ終えてのコーヒータム。

食事は外から送ってもらった食材を使った自炊だが、どうせ食べるのは俺一人なので、自然と好きなモノを作る事になる。

……今日はオムライスにしたが。

「さて、今日は誰も来ないみたいだな」

幻想郷生活にももう大分慣れてきた、ような気がする。

今のところ、この小屋を訪れる者は三名いる。

外の世界からちよくちよく来る元さんと、

主に漫画とカフェオレを目当てにやってくる小町さん、

それから、やけに外の世界の事を聞きたがり、アレもコレも欲しが
る森近霖之助さん。

元さんは晩御飯を食べに来る事もあり、そういう時は大体準備を始
めるちよつと前にやってくるのだが、今日は来なかった。

風呂は……昨日、沸かしたから、今日は行水で済ませてしまつか。

俺がそんな事を考えていた時、ドアをノックする、いや乱暴に叩く
音が聞こえた。

俺は急いでドアに駆け寄る。

なんせ、こんな時間に訪ねてくる客に心当たりはなく、

であれば無縁塚に誘い込まれてた人がここに逃げ込んで来たのかも
しれない、余裕のあるノックなら兎も角、強い叩き方からしてその
可能性は高い。

この周辺は人喰い妖怪もいれば毒気を撒く花まで咲いている、もし
そうであるならいち早い救助が必要なのだ。

ちなみに俺は自分から進んで妖怪と戦う事は禁じられているが、こ
の小屋、あるいは俺の下まで辿りついた場合に限定して外来人を保
護する権利が与えられている。

しかしそんな俺の焦りを裏切って、ドアを開けた向こう側に立っ
ていたのは一人の……なんだろう、人間でないのは雰囲気で分かるの
だが。

いや二人か、前の白髪の少女の後ろで小さくなってる黒髪の少女が居た。

俺が反応に困っていると言っていると白髪の少女の方が思い出すような間を置いてから、言葉を発した。

「えーっと……清く正しい『文々。新聞』で——」

「間に合ってます」

半ば条件反射で応え、ドアを閉めてしまった。

……ん、デジャヴ？

まあいいや、しかし幻想郷にもいるんだな、ああいう購買勧誘。

俺に払えるモノなどないと言っに……。

ドアの向こう側からまだ声が聞こえてくるが、まあいいか、部屋に戻ろう。

「……だそうですが、文殿」

「だそうですが、じゃないですよ！

ああいつ時はすかさずフットインザドアが基本じゃないですか！」

「いや、知りませんよ……」

「ああもつ、それはいいからさっさと取材の許可を取り付けてください！

今度はお願いしますよ、もつ！」

「……はあ、分かりました。
そうですね、天狗がわざわざ出向いたというのにあんな態度を取る人間も気に入りませんし——」

ん？なんか不穏な予感が……。

——ドタンツ！という短く大きい音が小屋に響き渡った。

振り返ってみれば先の白髪の少女がドアを踏み倒してそこに立っている。

……まあ、妖怪ならそれくらい驚く事でもないか、直すのは面倒だ
がこちらに蹴り飛ばされなかっただけでも良しとしよう。

しかし、どう帰ってもらうかな、恐怖感染はあまり使いたくない
のだが……ってあの服装ってもしかして。

「あややや、椀、あなたなんて事を……」

「見た所、只の人間ではないですか、ここは天狗としての威厳を
すね——」

やっぱりか。

「……これは失礼いたしました。

天狗殿とは気づかず……大したおもてなしもできませんが、どう
ぞお上がり下さい」

妖怪でありながら、山の神ともされる存在。

外の世界でも偶に出会う機会があったが、大抵が名のある神か尊格に仕える立派な方だった

……幻想郷の天狗は少し性質が異なるとは聞いているが、第六天の王、天魔の配下……敬意は払って然るべきだろう。

「ふむ、最初からそうしていれば良いものを」

「お、お邪魔します」

二人が上がっていくのを脇目にドアをとりあえず応急処置でくっ付けておいた。

……しかし、烏天狗さんの方は何をあんなに怯えているのか。

『恐怖』の声に耳を傾けてみれば、恐怖対象が俺だと言う事だけは分かった。

おかしいな、戦った相手に天狗はいなかった筈だが、それに何故わざわざ会いに来る？

得られた情報はそれだけで、結局疑問は尽きなかったが、一先ずは脇に置いておく事にした。

自己紹介、そして一通りの説明を受け、俺は確認をした。

「つまり……新聞のネタとして俺を取材したいと」

「そうだ、恐怖の駆り手については天狗の里でも話題に上っている。人間風情が私達の注目を集め、情報を欲せられているのだ、光栄に思え」

「ちょっと椋、取材の時は口調は丁寧に——」

尊大に応える犬走さんを射命丸さんが宥める、というよりは俺を怒らせないかビクビクしている。

しかし、あの時に写真撮られてるなんて気付かなかったな……気づいた所でどうこうはしなかったが。

出したホットミルクコアのお蔭で少しは恐怖も和らいだのか、射命丸さんも犬走さんの後ろから出てきてちゃぶ台についている。

「いえ、どうぞそのままで……」。

まあ良いでしょう、で、何が聞きたいのでしょうか？」

このくらいで目くじら立てているようでは妖怪相手の仕事などこなせない。

しかし、人の里にも購読している者がいる新聞か……計画が早まったと思えば丁度いい。

俺に話しかけられて射命丸さんがビクリと跳ねる。

……なんだか悪い事してる気分になるな。

「あやや……えーっと、とりあえずお名前と『恐騎来寇』の一部始終を貴方の視点から語って頂けませんか？」

「名前については外の世界に置いてきたために思いだせないのと、とりあえず、監視役とお呼びください。

そうですね……とりあえず、俺が土地神様に呼び出された所から始めましょうか——」

俺がここに乗り込んでくる前からの一部始終を伝えた。

表向き普通の高校生をやっていた俺の、家族や友人との別れ方だとか、そういうしみたれた部分と、俺の能力の詳細についてはカットさせてもらったが。

「ほう、ではあの戦いはアレでかなりの綱渡りだったと」

「ええ、過度の恐怖は怒りよりも攻撃的ですからね……追い詰め過ぎず圧倒する、その状態を維持しなければなりませんでした」

相槌や質問を返している間に射命丸さんも俺にも慣れてきたのか、普通に受け答えできるようになっていた。

ちなみに犬走さんと言えば、空になったカップを弄りながら、疑いの眼差して俺を見つめている。

正直居心地が悪いのだが、射命丸さんはそれに気づかず（あるいは

気にせず）取材を続けているので俺もスルーしている。

不意に射命丸さんがパタンと手帳を閉じてしまいながら、窓へと視線をやった。

「ふむふむ、これくらいで十分ですかね、あやや、もう夜もこんなに更けているとは。」

遅くまで、ご協力ありがとうございました」

「お疲れ様です射命丸さん、犬走さん。

俺も中々楽しかったですよ」

「お疲れ様です。」

そうだ監視役さん、お礼代わりに『文々。新聞』、向こうしばらくお届けしましょうか？」

「え、いや、それは、そうしてくださるのは嬉しいですけど……」

座して幻想郷の情報、それも妖怪の視点のそれが手に入るならこれは俺にとってかなりの有意義な事だ。

……しかしなあ――

「えと、配達はどうだが……？」

「私の使いの鳥にやらせますので、時間は指定して頂けますよ。」

……不定期発行ですけど」

「それはありがたい、是非お願いいたします。
時間は、そうですね、午後三時くらいにでも」

射命丸さんはまだ俺が恐いんじゃないかと思ったが……配達を当人が行つ訳でなければ大丈夫だろう。

「はい、確かに了解しました。
ほら、帰りますよ椀」

「え、あ、はい」

ずっとカップを弄くっていた犬走さんだが、射命丸さんに声をかけられて立ちあがる。
俺の方を何か言いたげにチラとみたが、それだけで何も言わなかった。

「それでは、また縁があれば」

「……ではな」

玄関まで見送つて壊れたドアを閉めるその時、犬走さんはどこか不満げな表情をしていたように見えた。
俺にはその理由が分からなかったが――

「あの視線と仕草……ひょっとしておかわりが欲しかったのか？」

空のカップを片づけている時によつやく思い当たる俺であった。

夜来風狗（後書き）

一話完結もの二つ、次話からは複数話かけてシリアス混ざりの予定。

名もない愚か者

無縁塚は幻想郷、外の世界、死後の世界たる冥界の境界の曖昧な土地である。

それ故に外の世界の物やら、自殺しかけた人やら……自殺してしまった人まで落ちてくる。

彼らの埋葬もまた俺の仕事だ。

「あの〜」

見つけたらすぐにでも埋めてやる事になっている、今日は昼下がりに一人見つけた

墓穴を掘る（比喩的な意味はない）という作業は思いのほか重労働だ。

能力を使えば簡単に済ませる方法もあるが、体を鍛えると、またこの苦勞が供養の一部になればと思って一生懸命スコップを振るう。

「もしもし、その君」

妖怪退治屋として凄惨な現場にはそれなりに立ち会って来たつもりだが、それでもここまで頻繁に死体を見かける事はなかった。

……彼らにも理由はあったのだろう、それでも望まずして喰い殺される人がいるのに、自殺と言う行動はどうにも俺には納得しかねる行動だった。

何も知らない子供の甘い考えだろうとは思うが、理解と納得は等速度では進まない。

そして大抵の場合は理解に納得が付いてこないものだ……ごく稀に妙に納得だけ先行する時もあるが。

「もしも——うわああッ!？」

「うおッ!？」

不意に聞こえた大きな、驚くような声に俺も驚き、身構えてしまった。しかし、俺の目の前に立っていたのは妖怪でも悪霊でもなかった。

「いや、ごめん……死体に驚いちゃって」

いつそこらの妖の類の方が、衝撃は少なかっただろう。俺はすぐに言葉を返す事ができなかった。

「少し、聞きたいんだけどさ……三途の河ってどっち?。」

外の世界の普通の洋服を着た、普通の若い男性の幽霊が少し恥ずかしそうな笑顔で、そう尋ねてきた。

「——それで自殺しようとしたんだけどさ、目の前にいきなり大きな裂け目みたいなのが現れて……。

気が付いたらある洋館の倉庫みたいな場所の中で、まあ、その……処理される前にこの幻想郷の事は一通り教えてもらえたんだけどね」

「……そう、ですか」

突然だったけど、とりあえず話を聞く為に彼を小屋に招待した。

信用を得る為に俺自身が何者か、何故ここにいるのかを説明した後、彼にもそうするよう求めた。

彼は自分が幽霊になるまでの過程を話してくれたけど、俺は聞かせてくれと言った癖、どう応えるべきか分からないでいた。

そもそも俺は何がしたくて彼を連れてきたのか。

分かっている、彼が幻想郷の糧となった——俺が守れたかもしれないなかった犠牲者だと思い、兎に角、何かして報いなければと考えたからだ。

彼が自殺志願者だったと聞いてほっとしている自分が憎らしい、犠牲者の事を常に思っているつもりになって、いざ目の前に現れればうろたえるとは。

俺が（恐らく）暗い顔をしていたからだろうか、彼は明るく言葉を続ける。

「あ、でもね幽霊になってしばらくこの幻想郷を見て回ったけどさ、良い所だな〜って思ったんだ。

こんな素晴らしい場所の為に俺の命が使えたなら、それはきっと十分すぎる程に有意義だろうなって」

……俺は頷く事ができなかった。

確かにこの地は理想郷というべき場所かもしれない。

俺だって人間と妖怪が共存できるなら、それはとても素晴らしい事なんだろうと思うが……。

「三途の河でしたら……そうですね、貴方ならここから行けますよ、明日になったらご案内しましょう。」

そろそろ夕食の時間ですし。

……大したものは用意できませんが、この世で最後に何か食べていかれるのもよいでしょう」

「え、そんな……迷惑じゃないか？」

三途の河はあの世とこの世の境の河だ、普通なら生きている人間は辿りつけないが、幻想郷からなら俺は行ける。

幻想郷の境界たる大結界にはある『抜け方』があるのだ、恐らくスキマ妖怪が人間を取りこむ為にわざと開けておいた抜け道だろう。

この人はこのまますぐに送り出すべきなのかも知れないが、気になる事がある。

未練を残していなければ幽霊として実体を成す事はあまり無いが、彼は自殺をした筈。

自殺をしたからと言って未練が無い訳ではないと思うが……それでも気にはなる、何か俺にしてやれる事があるかもしれない。

彼は最初は遠慮していたが、結局は俺の申し出を受けてくれた。
……よし、今日はすき焼きにでもしようか……。

「いただきます」

ちゃぶ台の上に乗せた卓上カセットコンロの上の鍋のを前に、俺たちは手を合わせる。
だが、そんな俺のすき焼きを見た彼は受け皿にたまごと微量の醤油を加えながら怪訝そうな顔をした。

「何これ？」

「何？、と言われましても、すき焼きですが」

「や、俺もそう聞いたけどさ……鍋じゃん」

「ええ、鍋ですよ？」

会話をしながら、俺も彼も箸を鍋に伸ばす。

「すき焼きってさ、すき『焼き』じゃん。

もっと底の浅い鍋でさ、半ば焼くように作るもんじゃないっけ？

……うん、美味い」

「へ？すき焼きは鍋でしょ——アチッ！——鍋でしょう？
そんな事言ったら鍋焼きうどんはどうなるんですか？」

「いや、鍋焼きうどんだっておふあひ——ハフハフ——同じだろう。
煮込みうどんと鍋焼きうどんは違うんだからさ」

「それはただ呼び方が違うだけでは？
大体、それじゃあ汁が少なくて締めうどんがあまりできないじゃないですか？

——あひひひ、ハフハフ——んぐッ！？——！？！」

「あ、はい！水飲んで、水！

……そりゃあ締めなんだから多くはできないだろう。
大体、そういう人の為にうどんすきって食べ物が生まれたんじゃないか？」

「——プハッ、どうもありがとうございます。」

……そんな！締めのうどんが大好きの俺にそれは許容できません！
そして、うどんすきはすき焼きのうどん好きのためのうどんすき
で……。

うん？……すき焼きのうどんすきのうどん好き為の、アレ？
と、兎に角、締めのうどんみたいなのが大好きな俺みたいなの奴の
為のメニューでは？」

「いや、だからそう言ってるんだってば、
いいかい——」

結局、俺達のこの下らない会話は夕食の最後まで途切れる事はなかった。

「そろそろ締めうどん入れますよ。」

……まあ、こういうのって地方によって違うみたいですしね。」

「お、待ってましたッ。」

あゝそれ聞いたことあるな……君は関西の方の出身かな？」

「いいえ、首都圏ですが」

「何？関東はちゃんとしたすき『焼き』だと思ってたのに……御両親が地方出身とか？」

……お、底の方にまだ肉の塊が」

「いえ、どちらも関東です」

あ、すみません、気を付けてたつもりなんですけどくっ付きちゃってますね、食べちゃっていいですよ、丸ごと」

「そんなッ！？じゃあそのまた御両親は——」

ただ一緒に暖かい夕食を取って会話を交わすだけ、それなのに彼は。

「「ごちそうさま」でした」

もし、俺のうぬぼれか何かでなければ。

「えーっと、監視役君……って呼べばいいんだっけ？」

「はい、なんでしょう？」

きつと、少しは救われていたんだと思う。

「美味しかったよ、どうもありがとう」

片づけ（彼も手伝ってくれた）の後、俺達はそれぞれブラックコーヒーとココアを啜りながら、また別の他愛の会話をしていた。やがてその話も終わり、ふと会話が途絶えた時、彼は静かに、ために混じりに語り始めた。

「俺さ、さつきはさ、こんな素晴らしい場所の為に俺の命が使えたならなんてカッコ付けた事言っただけさ」

「……はい」

「本当はそんな立派な事なんて思い浮かびやしなかったんだ。死んで、幽霊になつて……そこらを、人里も見て回つてさ。外来人、つていうんだっけ？……外の世界から来た人の事。その人たちも里の人たちもとても楽しそうに暮らしてて……」

彼の声に嗚咽のような色が混じる。

それでも、彼には伝えたい事があるのだろう。鼻をすすって言葉を続ける。

「……なんで、なんで俺はそうしちゃいけないんだろうって。

成仏しないでしばらく幽霊でいると周囲によくない事が起きるから、早く、出て行ってくれって言われて……」。

俺はただ、ショックで、目の前にあるあの営みの中にもどうしても入れないんだって……」。

分かつてるんだ、それは自業自得なんだって……それなのに、そんな事を考える俺が惨めで、恥ずかしくて。

俺は、ここまで逃げてきただけなんだ、あの眩しく精いっぱい生きてる人たちの姿から」

彼は泣いていた。

カップの中に涙が落ち、小さな波紋が起こる。

俺には彼にかけるべき気の利いた言葉が思い当たらなかった、なのでただ素直に思っている事を口にした。

「俺は、貴方に会えて良かったと思っていますよ。
それからこれがもし貴方の救いになるなら、どうか覚えていて欲しい。」

ここには心から貴方の命を惜しんでいる者がいることを」

彼は声を上げて泣き出した。

俺は静かにその泣き声を聞いていた。

その泣き声はまるで、こんなに悲しんでいるんだ、こんなに苦しんでいるんだ、そう訴えかけてくるように聞こえたから。

それはきつと彼の甘えなのだろう。

それでも俺は彼を、出来る限り救いたいと思った……きつとこれも甘さなのだろう。

やがて泣き声が止んだ時、俺は彼に問いかけた。

「教えてもらえますか、貴方が一体何を未練に思っているのか」

「……ああ、分かった」

彼は語りだす。

その未練は外の世界に残してきたものではなかった。

そちらにも未練が無いわけではないが、一番心に残っているのはここ、幻想郷での事。

彼が——消費されたその場所にあるのだと。

「……でも、いいんだ、こんなのどうしようもないだろう？
明日には三途の河に――」

「いえ、そちらは延期しましょう。

大丈夫、きつとなんとかできます。

その為には貴方にも頑張ってもらう必要がありますが」

彼は束の間だけ迷い、そして確固たる意志を覗かせる顔で頷く。
キリツと固めた、でも涙と鼻水まみれのその顔に俺は吹き出してしまったが。

「なッ！わ、笑わなくなっただけじゃないか、俺だって決意して――」

「すみません……では、明日の、そうですね、夕方になったら向かいましょうか」

言いながら、俺は具体的な計画を頭で練り始める。

向かうは紅魔館。

彼が奉げられた吸血鬼の根城である。

名もない愚か者（後書き）

ちなみに自分の家のすき焼きは鍋です。

……割りした？知らないな。

閉じ込められたモノ

紅魔館・正門

紅美鈴は紅魔館の門番である。

勤務態度はともかくとして……能力は優秀であると言って問題ない。今まで何度も侵入者を撃退し、時には倒されてきた彼女だが、今回は対処に困っていた。

「え、いや……多すぎ」

眼前からゆっくりと迫ってくるのは数百騎にも及ぶ漆黒の馬と人の隊列である。

幻想郷にも馬がない事はないが、少数、しかも小さな種である。それと比べると、向こうに見える立派な体躯を持つ軍馬はそれなりに迫力がある。

しかし、別にそれらは武装している訳ではないし、警戒させぬようにだろうが、ゆっくりと近寄って来ている。

やがてその先頭にいた一騎が速度を上げ、傍まで駆け寄ってくる。戸惑いながらも一応、構えを取る美鈴に対し、騎乗の少年は馬を降りて一礼をした。

「失礼、俺は監視役……恐怖の駆り手と言えば伝わるでしょうか？
外の世界より派遣された、駐在武官のような者です。」

この役目に就くにあたり、ご当主殿初め、紅魔館の皆様にも御挨拶をと思ひまして。

いささかの手土産と共に参上した次第でございます」

スーツ（のような高等学校の制服）に身を包んだ彼はそう言つて後方の隊を指し示す。

成程、馬の上には人以外にも何かしら載せてあるように見える……。美鈴は半ば警戒を解いた、ただ確認しなければならない事はあったが。

「チュウザイブカンって……なんですか？」

紅魔館はざわついていた。

屋敷の妖精メイドたちは仕事もせず（これはいつもの事だが）に外の様子を見に行っている。

優雅なティータイムを過ごしていた筈の紅魔館の当主、レミリア・スカーレットは少し不機嫌そうな顔でメイド長たる十六夜 咲夜に様子を見に行くように命じていた。

「で、一体、なんの騒ぎかしら？」

「はい、件の監視役……恐怖の駆り手がお嬢様に御挨拶申し上げた
いと。

能力で形作つた人馬の隊列に手土産を積んでおりましたが……外

の世界の高級茶葉、当たり年の有名ワイン、果ては未だ幻想入りしていない魔導書まで含まれていました。

……いかが致しますか？今更の挨拶、少しばかり不自然ではありますが」

「咲夜、恐怖の駆り手が何処かに挨拶に行ったという話は聞かないわよね」

「？……はい、人里では話題にすら上っていませんでした。妖怪達の間でも耳に入る範囲では特に新しく行動を起こしたという噂は立っていませんが」

それを聞いたレミリアは一転して上機嫌な様子で頷く。

「まずこの紅魔館に挨拶に来る、という点は評価できるわ。それに……その気の利きすぎた手土産の内容を聞くに彼は私達との戦いも想定し、情報を集めていた。

いいわ、彼の敬意と畏怖に応えましょう。

咲夜、彼を応接間に通しなさい」

「分かりました」

こうして恐怖の駆り手は応接間へ案内される。

手土産の品々は彼が作り上げた兵達が順次運び込んでいたが、その中に一人の幽霊が紛れ込んでいる事には誰も気がつかなかった。

時に疑問である。

吸血鬼の住まいを訪ねて紅い飲み物を出された時、素直にそれを飲める人物はどれ程いるだろうのだろうか？

「あら、飲まないの？」

「あ、いや、その——」

ただ色が濃いだけならば良い。

俺は詳しくないが、きつと恐らくそんな紅茶もあるのだろう。

……だが、鉄の様な匂いがするとどうだ。

いやそれだけならばまだ、あるいは多分淹れる過程でどこかに使った金属器から匂いが移る事くらいあるかもしれない。

……しかし、その鉄の匂いが当たり前のように違和感なく紅茶の香りに混ざっている場合、

つまり明らかに『それ』を余計なモノとせず、加えた上で完成と言える香りをしている場合、これはもう確定だ。

目の前の当主殿は戸惑う俺を見て明らかに楽しんでいたが、やがて満足そうな笑みを浮かべ——

「本当は飲んでからネタ晴らししようと思っていたのだけれど、残念ね。

まあ、中々面白いものが見れたからよしとするわ……咲夜、人間の用を出してあげて」

そう言ってくれた。

そして、メイドさんが新しく紅茶を淹れてくれて——ん？

さっきのカップがない……知らぬ間に替えのティーセットがそこにある。

成程、これが彼女の能力か……こりゃ恐ろしい。

「ありがとうございます。」

それでご当主殿、今回はこれだけ持参しましたが、いかがでしょう？

「ご当主殿の血脈の祖を教えていただければ、由来した品を取り寄せる事でもできますが」

吸血鬼というものはいわゆる名門意識というか、その手の誇りを持つ者が多い。

自分のその、先祖から受け継いだ血に誇り持っている者ばかりなのだ。

……あくまで外の世界では、だが。

少しでも彼女の意識を此方に向けられれば、彼が行動しやすくなる。可能性のある手はなんでも使わねば。

「気遣いだけ受け取っておきましょう。」

私はツェペシュの末裔、この誇りはモノなどで確かめずともしかと在るものよ」

「……」

俺はすぐには返事できなかった。

驚いたからではない、確かに答えの内容は衝撃的だったが、それ以上にあまりに違和感を覚えさせる物言いだったからだ。

「それよりも、パチエ——この館の魔法使いが貴方の能力に興味を示していたから——」

「お待ちを……ツエペシュとは串刺し公の意。

もしそれがヴラド3世……ヴラディスラウス・ドラクリヤ、その人の事を言っているならば、その呼び方は蔑称ではありませんか？」

そう言った瞬間、失敗したと思った。

彼女の顔から笑顔が消えた。

そして、沈黙が流れる。

時間にすれば2、3秒程度、しかしその何十倍にも感じられる静寂の後、彼女は再び笑みを浮かべて応えた。

「人間からすれば、そうかもしれないわね。
余計なお世話と言いたい所だけど。」

本当の所、貴方のその指摘は好ましいものよ……忘れずに留めている証明だもの」

その言葉を受けて、場の緊張が緩み、元に戻る。

主の笑顔が消えた瞬間から静かに殺気だっていたメイドさんも元に戻っている。

元通りになっていないのは俺と、この耳に届く『声』だけだった。

紅魔館に品物を運び込む兵に混ざり、幽霊は館へと潜入した。

幸い、屋敷の妖精は珍しい品々に注意を取られており気づかれずに忍びこむ事は難しい事ではなかった。

目的の場所は分かっている。

何度も聞いた、この館の当主の、妹に宛がわれた部屋である。

数日前。

自殺を試み、屋上から飛び降りた筈だった。

訳の分からない裂け目に取りこまれ、訳の分からない、倉庫らしい場所に閉じ込められても、彼はその事について考えようとしなかった。

もうどうでもいい、すっかりくたびれ切った彼の心は既にそんな気力も持っていなかったのである。

「アレ？……ここってなんの部屋だったわけ？
ん？……あなたはだあれ？」

一人の少女がやって来た。

金の髪に鮮やかな背の羽、彼の目には彼女はとても眩しく映った。

それでも初めは受け答えも何もしなかった。

少女にしつこく質問を重ねられ、ようやく彼はとうに無くなった筈の気力を起こし、反応を示すようになる。

色々な事を聞かれた。

何処から来たのか——県名を言ったら首を傾げられた。

名前は何か——覚えにくいとの理由で一度も呼ばれなかった。

弾幕はだせるか——質問に質問で返す事になった。

色々な事を聞いた。

ここは何処なのか——コウマカンという建物の、下の方にある部屋とだけ分かった。

名前は何か——長いのでフランちゃんと呼ぶ事にした。

自分はなんの為に連れてこられたのか——彼女は辺りを見渡した後、多分紅茶とかケーキにする為と答えた。

彼女が人間でない事はなんとなく感じ取れた。

彼女にとって自分が本当にたまたま声をかけただけの、料理の材料だと言う事も分かって来た。

気まぐれ一つで殺されかねない、そう分かってても恐怖はなかった。

彼にとって、彼女は救いだった。

いささかのシチュエーションの異常さなど問題ではない。
あまりにも懐かしい、誰かとの他愛のない会話が乾いた心に沁み入
るような心地がした。

「ねえ、材料。」

もし、料理されずに助かったら、あなたなら何をしたい？」

ともすればなんとも残酷な問いであつたろうか。

彼は苦笑して、答えた。

「そうだね、とりあえずフランちゃんのお姉様に頼んで……。
フランちゃんと一緒にこの幻想郷を探検してみたいな」

「もう、この前話したでしょ。」

わたしはこの館から勝手に出られないから外の事、あんまり知ら
ないって。

案内なんてできないよ」

「だから探検なんだよ。」

それはそれで楽しそうだろう？」

「うーん？」

そうかなあ……そもそもお姉様が許してくれる訳ないし。
なんでなのかも話してくれないし」

「じゃあ、もしその時が来たら、俺と一緒に頼んであげるよ」

「え〜。

あなた一人で頼んでよ、怒られるの嫌だもん」

「はは、分かった分かった。

もし、その時が来たら、な」

そんな事起こるわけがないとなんとなく分かっていた。

だからこそ、彼らは気軽に約束を交した。

そしてそれは正解だった。

彼は彼女に別れの言葉を言えなかった。

幽霊になってから会いに行ったが、追い返された。

話を聞いて取りついでくれた門番は、申し訳なさそうには通せないという返答を持ち帰って来た。

その顔に自分の方が申し訳ない気持ちになるくらいな彼だったが、それでもどこか諦めきれなかった。

彼女はもう自分の事など覚えていないかもしれないが、それでもいいから一言。

そう思って開けた扉の先には確かに、彼女が居た。

「あ、材料！……でも確かケーキに……アレ？」

パツと輝くような笑顔の後、不思議そうに首を傾げる。
その可愛い仕草に思わず笑みがこぼれ、彼はその表情のまま応えた。

「成程、俺はケーキにされちゃったのか……ここにいるのは幽霊だよ。」

一応、別れの挨拶くらいはしておこうと思ってね」

部屋の中で少しの間、倉庫でそうしていたように他愛のない会話をしていた。

やがて、彼は新しく話題を振った。

「どうだい、お姉様は。」

外に出してくれるように頼んでみた？」

「ううん、どうせ駄目だもん。」

あんまりしつこく頼んでも不機嫌になるし」

「そうか。」

で、理由は聞いてみた？」

「聞いてないけど……なんで？」

「きっとお姉様にも事情があるんだと思うんだ。」

この紅魔館の当主だし、ね。

もしかしたら、フランちゃんはそれを解決する力になれるかも知れないだろ？」

「それができたら外に出してもらえるかもしれないって事？」

「それもあるけど……ただ単にお姉様の助けになれば、いいと思わないか？」

「……でも、お姉様の事だから『これは当主たる私の問題』とか言っ
て何も話してくれないと思う」

「何度でも優しく、聞いてみたらどうだい？」

教えてもらえなくても、何か苦しんだり、悩んだりしてる事が分
かれれば何かできる事があるかもしれない。

……俺も最近出会った人に教えてもらったんだけどね。

他者には譲れない、そのヒトだけしか背負えない重荷という物は
確かにある。

だって、でなければ支え合うなんてこっばかしい台詞、誰も使
わなかったろう……ってね」

彼の言葉を受け、当主の妹は少し考えるように間をおいた。
やがて迷いながらも頷く彼女に、幽霊は勇気づけるように言葉をか
ける。

「大丈夫、きっとなんとかなるさ」

いや、駄目だこれじゃどうにもならない。

ご当主殿の話に適当な相槌を打ちながらも、俺は彼女の恐怖の『声』に耳を傾けていた。

くっそ、そういう事かよ……これじゃ彼や妹君がどうしようと駄目だ、何も進展しない。

こんな大きな恐怖をよく隠していたものだ。

事前の調査じゃ妹の方が病んでるみたいな事ばかり聞こえてきたが、姉の方だって、十分重症じゃないか。

当主として姉として

悪魔の妹、フランドール・スカーレット。

情緒不安定とも、気が触れているなどと言われてはおり、確かに少し前まではそう取られてもおかしくない言動を取っていた。

しかし現在、幻想郷の妖怪達を基準とすると特に突出して異常な性格とは言い難いのも事実である。

それでも、当主のレミリア・スカーレットは妹である彼女に自由な外出を許可しようとはしなかった。

確かに彼女は世間を知らぬ箱入り娘だが、だれでも初めて外に出る時はあるもの、誰か、あるいは自ら付き添ってやればそれで良い筈。そうレミリアに言う者もいたが、彼女は耳を貸さなかった。

そして、誰もがその理由は妹の方にあると思い、それ以上の説得を試みる者はいなかったのだ。

「そう、じゃああの戦いには九尾の狐の式も出てきていたのね」

「はい、俺の恐怖感染に対する為にか、予め感情を抱かぬように改訂されていたようではありました、

……まあ、なんとかりましたがね」

当主殿と適当に話を会わせつつ、俺は悩む。

彼女の心の奥深くに隠されていた恐怖、これは異常に大きく、明らかに本意を外れて暴走しているものだ。

これがある限り、彼女は妹君を常に目の届く手元から放そうとはしないだろう

……なんとかする手段が無いわけではない。

ただそれには一騒動起こす事とそれに伴う危険を覚悟する必要がある。

……俺にそんな事をする義理があるのか？

彼は別れの挨拶の際に妹君の背中を押し——その時点で恐らく未練を果たし、『成仏』する事だろう。

その果てに結局なんの進展がなかったとしても彼は知らずに満足して逝ける筈。

——彼女は俺にとって、本当の救いだっただ——

外から派遣された妖怪退治屋の俺が、人を喰らう妖怪の為にわざわざ危険を冒してまでそんな事をする必要は……。

——俺にも兄貴がいたんだけどさ、結局喧嘩したまま二度と会う事もなくて……彼女らには仲良くやって欲しいなあ、なんてね——

必要、は……。

——だって折角、俺みたいなの犠牲の上に築くんだったら、どうせなら良い家庭にして欲しいじゃないか——

……いいさ、恐怖の駆り手としての役目だ。
本意を外れた恐怖は……肅清せねばなるまい。

当主の妹に宛がわれた部屋の中では、なんでもない、他愛のない会話が続けていた。

幽霊はそれに満足していた、満足してしまった。

……故にその時間は終わりを迎える。

「それじゃあ、フランちゃん。

そろそろお別れしなきゃいけない。

『無事』には会えなかったから約束は果たせないけど、大丈夫だよね？」

「え？」

折角ここまで来たんだから一緒に聞きに行つてよ。
わたしちよつと恐いんだから」

「ごめんね。

でも大丈夫、恐くても大丈夫。

もしかしたら、お姉様だってフランちゃんを外に出すのが恐いのかも知れない。

だから、見せてあげなきゃ、恐くても大丈夫なんだって」

そんな馬鹿な、吸血鬼はそう返そうとした。

でも、幽霊の真面目で優しそうな表情を見ると、なんとなくそんな気もしてくる。

少し迷った末、吸血鬼は頷く。

「そうか……安心した。」

それじゃあね、フランちゃん」

彼の体が物言わぬ霊体、人魂に近づいていく。

吸血鬼はやはりなんとなく、それが別れの合図なのだと理解する。そして、すんなりと受け入れた。

「うん、じゃあね、アカシ」

彼女がそう言うのと、霊体の輪郭が崩れたのは殆ど同時だったろうか。

吸血鬼は彼の人魂が飛び去っていくのを微笑を浮かべて見送る。

彼の姿が完全に人魂になる直前に「タカシなんだけどな」という、すっかり聞きなれた苦笑交じりの声が聞こえた気がした。

レミリア・スカーレットは今と比較的上機嫌であった。

先ほど、不意を突かれるように嫌な質問をされたが、それだけ。最新の外の世界の妖怪、吸血鬼についての知識もある彼の話はずまらなくはない。

気を良くした彼女は少し意地悪な質問を試みる事にした。

「じゃあ、聞いてみようかしら？」

もし私がああ戦いに出ていたら、貴方に勝ち目はあった？」

レミリアとしては彼の口から「難しい」あるいは「無理だった」という答えが返ってくるのを期待していた。

——だが。

「ええ、問題なく。

停戦の時期にも条件の内容にも影響はでなかったでしょう」

即答だった。

監視役は紅茶を飲みながら、なんでもないようにそう応えた。レミリアの笑顔がヒクツと強張りかける。

だが、ここで機嫌を損ねるようではまるで小物である。

レミリアは（出来る限り）余裕を装い、問いを重ねた。

「へえ、大した自信ね。

それだけ自分の能力は優れていると？」

「いえ、理由はご当主殿にあります——」

カップとソーサーを静かに置き、彼はボソリと呟いた。

「——ヴラド3世とラドウ美男公」

「ッ!？」

息を詰め、ビクリと体を撥ねさせる——レミリアは明らかに動揺した。

監視役は醒めた目でそれを見ながら、言葉をつづける。

「二人は大変仲の良い兄弟だったようです。

二人纏めて大国に人質に出され、その後、父と長兄に見捨てられた……互いに互いにしか信じられる者は居なかったかもしれない。しかし、やがてヴラド3世は国主となった時『当主』である事を選び——」

「……止めなさい」

「かつての父と兄と同じように、弟のラドウ美男公を見捨てた。

……政治家でない俺には断言はできませんが、

それは恐らく、その国の自立と彼が当主である事の為にきつと避けられぬ事だったのでしょう。

幸いと言うべきか否か、大国はヴラド3世の裏切りを受けても、ラドウ美男公を殺そうとはしなかった。

それも当然——」

「……止めると言った筈よ」

常人ならば気圧されるどころでは済まない、
紅魔館当主の怒りの視線を涼しい視線で見返しながら、彼は言葉を
止めようとはしない。

「大国はラドウ美男公をヴラド3世の国の正当な後継者として押し
立て、兄弟間での争いを起させたのですから。

貴方がこの物語を誰かから聞いたのか、あるいは間近で見ていた
のかは知りませんが……知っていたのは間違いなさそうですね。

……成程、貴方は確かに当主としてのヴラド3世は尊敬している
のかもしれない、だが、兄弟の兄としてはそうではないのでしょうか。
そして同時に恐れている……自分が『当主』である事を選んだ限
り、同じ様な物語を辿る事も有り得るのではないかと。

……神は賽を振らず、ならばそれを司るのは悪魔^{ドラクル}か……しかし賽
の目は既に刻まれている。

運命を操っている筈でも、恐れずにはいられない……その外側に
何か別の、因果があるのではないかと。

……結論を言いましょう、その程度の恐怖に捉えられている貴方
は、俺とは戦えない」

「咲夜ッ！この無礼者の口を閉じさせなさい！」

メイド長、十六夜 咲夜は戸惑っていた。
仕えてきた彼女だから分かる。

主は今、怒っている以上に怯えている。

それに彼、監視役の話。

あるいはそれこそが主が妹を手の届く場所……決して自分と違える

事のない場所に閉じ込めている理由では？

そんな考えが彼女が能力を発動するのに、少しの間をかせせた。そして、その少しの間に押し寄せた恐怖の波により、能力を使おうと言ふ意志は押し流れてしまう事になる。

この時、レミリア・スカーレットは初めて、『運命』の怯える声を聞いた。

押し寄せる、否、叩きつけられる恐怖の奔流。

目の前の男が使う、その能力を頭では知っていた。

だが、ここまでとは思わなかった。

実力差も、あるいは意志の有無さえ関係ないのかもしれない。

感情を持たないモノをぶつけても、そのモノが初めて知る感情が恐怖になるだけの話なのではないか。

気づけば、メイド長が傍に居る。

恐怖で思考が一杯になっても、まず真つ先に主の傍に寄つたのだ。

それにレミリアは勇気づけられ、何か言葉を発しようと監視役を見る目に力を込める。

だが、既に彼は彼女たちを見ていなかった。

「ようやく出て来たか。

また随分と奥深くに隠されていたようだからな。

さて、貴様も本意を外れて在るは苦しかろう……喜べ、肅清の時間だ」

その視線はレミリア達の背後に向けられていた。

レミリアが振り返るよりも早く、いつの間にかそこに在った黒い霧が動いた。

霧が高速で蠢き、監視役に襲い掛かる。

霧が彼を捉える直前に、彼の体からまた別の、黒い霧が生じ、そのまま体を包み込んだ。

そんな事は関係ないとばかりに監視役に襲い掛かった霧は彼を押し流し、

——そのまま背後の壁を押し破り、彼を外へと連れて行ってしまった。

レミリアはすぐに動く事ができなかった。

しかし、少し間を空けて尋常ならざるプライドが持ち上がる。

何が起こっているかは分からない。

だが、あそこまでコケにされてどうして黙ってられるものか。

それは決して恐怖に対して勝ってはいなかったが、彼女を立ち上げらせ、壊れた壁の際まで連れて行くには十分だった。

既に日は暮れていた。

レミリアが外を覗いた時、

恐怖の駆り手はそのまま霧に押し潰されるように地面に叩きつけられる所だった。

だが、その寸前で彼は霧を振り払い、ガシャンと言う金属音と共に地面に着地した。

漆黒のフルフェイスヘルムと騎士鎧——噂に聞いた通りの『恐怖の駆り手』の姿がそこにあった。

「竜か……成程、ドラクルの末裔の恐怖には相応しい姿であろうな」

そう言つて見上げる彼の視線の先では彼に攻撃を仕掛けた霧が漆黒の、全長30メートルはあるつかという大きな翼竜を形作っていた。その竜は翼をはためかせ、その顎で恐怖の駆り手を噛み砕かんと襲い掛かる。

恐怖の駆り手の体からまた黒い霧が吹き出る。

今度はそれが恐怖の駆り手を中心とした丸盾と槍を構えた十数名の重装兵からなる半球状の針山隊形を形成する。

自らも槍と盾を持ち、待ち構える恐怖の駆り手めがけ、竜は躊躇う素振りすらみせずに突っ込んでいく。

音から判断すれば相当なモノと思われる激突の衝撃にも兵達は持ちこたえた。

半球の針山を、ごと、噛み砕かんと広げた顎を上下とも槍に貫かれた竜であったが、まだ止まっていなかった。

ミシリ、ミシリと槍と盾の軋む音がする。

不意に針山を形作る兵達が元の黒い霧に戻る、同時に顎の間から恐怖の駆り手が飛び出した。

ガチンツ、と音を立てて顎が閉じるのとはほぼ同時に、竜の首元めがけ瞬時に形作つた両手剣を差し込む。

が、竜はそれすら気にせず、また飛翔する。
槍や剣に貫かれた場所からは血は流れない、傷面もただの黒い面
しか見えない。

竜の飛翔と同時に剣から手を離していた恐怖の駆り手は今度は軍馬
を作り出し、それに飛び乗ると竜の背後を取るように宙を駆けて行
く。

竜はそちらに向き直ろうとするが、その動きは途中で止められる事
になる。

先ほどの槍兵達を形作っていた霧が、今度は軽装備の弓兵を形作り、
振り向きかけた竜の翼を目掛け、一斉に矢を放ったからだ。

竜が体勢を立て直そうとしている間に彼はまた武装と兵を具現化し
ていく。

「終いだ……大人しく我が下に帰せよ、その時が来るまでは」

やがて、突撃槍を構えた重騎士達の円錐状の陣が、竜の更に上に、
その背に頂点を向けるように顕れた。

竜が初めて回避行動を取ろうとする、だが――。

「蹂躪せよ」

その背めがけ、騎士たちの激流の滝を思わせる突撃が浴びせられた。
まるで天から放たれた巨大な槍のように、竜の体に地面に撃ちつけ、
その衝撃に先頭を駆けていた騎士たちが霧散しようとも、

後続の騎士たちが次々とその全力を乗せた突撃を重ねていく。

やがて、それが止んだ時、そこに残っていたのは、抉れた地面とただの黒い霧のみだった。

その霧も——騎士や兵を構成していたものも、竜を構成していたものも、宙に残ったただ一騎、恐怖の駆り手の体へと吸収されていた。

「ご当主殿、貴殿のその恐怖は俺が回収致しました。

訳は……そうですね、妹君の話聞けば察しはつくでしょう。

恐怖の大部分は俺が連れて行きますが、全てを取り除いた訳でも、悩みそのモノを取り除いた訳でもありません。

よく考え、乗り越えられる事です。

……少なくとも、彼はそうしたでしょうから」

そのままその場を去ろうと馬首を返す彼に向い、レミリアは勇気を振り絞って声を飛ばす。

「待ちなさい」

その声を受けて恐怖の駆り手が振り返る。

しかし、レミリアは次の言葉を発せられなかった。

只でさえ一体何がどうなっているのかも分からず、未だ心には恐怖が強く叩きつけられている。

そんなレミリアの様子を見て、恐怖の駆り手はヘルムの内側でため息を付き、言葉を返した。

「もし、貴殿がこの恐怖を御しきれると自信を持てた時は俺の所まで取りに来てください。

そうですね、その時は無縁塚に手を合わせてくださると嬉しいのですが、まずは自分達の事を解決してください。

壁と地面の修繕費については追って届けますので、ご安心を」

それだけ言って、恐怖の駆り手は今度こそ、馬を駆って去って行った。

——恐怖の嵐が止んだ。

しばらく、レミリアは放心状態でいた。

「お嬢様、一先ず片づけを致しますので……」

「え？……あ、ああ、咲夜、頼んだわ。

一体……何だったのかしら」

未だ、彼に対する恐怖は残っているが、

それ以上に長年の重荷が取れたような、すっきりした心地がしていた。

それが何故なのか、分かるのは数秒後、妹が彼女の所にやってきた時だったが。

当主として姉として（後書き）

戦闘描写って難しい……。

ヴラドとラドウの物語は悲しいですね、ああいつ時代にはよくある事と分かっていても。

次ぎでこの続きものは終わる予定です。

救いに救うは必要なく

『彼』の未練を果たしに紅魔館に赴いた翌日。

午後三時のおやつ時少し前、俺は上機嫌でちゃぶ台の前に座っていた。

その上には自家用燃料発電機に繋がれたホットプレートが乗せられている。

「さて……今日は黒坊も来るかな」

今日は元さんが手土産を持って昼ごはんを食べに来たのだが、その手土産の中にいわゆるホットケーキの素とメープルシロップ、そしてバターが含まれていたのだ。

ちなみに、ホットケーキは俺の好物の一つである。

黒坊というのは『文々。新聞』を届けに来てくれる鳥の事で、俺が勝手に付けた呼び名だ……うむ、安直だな。

射命丸さんの繰る鳥の中では一番の長生きらしく、人の言葉もある程度分かり、人と同じものを食べても問題ない、それどころか好むくらいである。

いわゆる妖怪、あるいは妖獣に成りかけている存在であろう。

何度か余った昼飯やおやつを食べさせてやっていた所、『文々。新聞』が発行されない日でも定期的にやって来るようになった。

鳥の餌付け……外の世界でやったらとんでもない迷惑行為だな。

その周期から考えれば今日は来る筈なのだが……。

そう考えながら、ホットケーキを焼き始める。

少し甘い良い匂いがした頃、案の定、黒坊は小窓をすり抜けるようにして小屋に入ってきて来た。

「お、やっぱり来たか黒坊。

ちよつと待て、今ホットケーキを焼いててな、メープルシロップは幻想郷には――

……ん、なんだ？」

ちやぶ台の上に飛来した黒坊は何か伝えようとするように翼をはためかせて暴れている。

……訳が分からんが、この慌てぶりからすると悪霊か妖怪でも俺の首を取りに来ているのだろうか。

停戦の条件の中で妖怪が俺を襲う事は禁じられたが、まあ、妖怪なんて統制の効く連中ばかりではないしな。

「やれやれ……襲撃なら外へ出て離れている黒坊、恐怖感染で追い払って――」

俺がそこまで言いかけた所だった。

突然に扉が勢いよく開け放たれ（鍵はかけてあった筈だが）その豪快な音と共になんとも可愛らしい声が聞こえてきたのだ。

「なんか、良い匂いがする！ねえ、ケーキ作ってるの？」

そのままドタドタと上がり込んでこんで来たのは声の主は、
驚いたのと毒気を抜かれたのとで硬直する俺にそんな質問をした。

「……ええ、まあ、ホットケーキですが」

金髪で、背によく分からないカラフルな翼(?)を持った少女……
いや待て、この特徴は――

「ちょっと妹様、待って下さい！
もう、傘もこんな所に放り出しちゃって……っと、お邪魔しま
す」

そして、その後ろから少し遠慮がちに見た事のある顔が続いてきた。
何が何だか、状況を把握するのも面倒になった俺は彼女に説明を求
める事にした。

「はて、これは一体どういう事ですか、門番殿？」

前日の夜

恐怖の駆り手が去った直後、
ぶち抜かれた壁際で未だ、当主レミリア・スカーレットは無縁塚の
ある方向を睨むように見つめていた。
……アレは一体、何をしていったのか。

「あ、あのお姉様、お願いが——ってうわ、『ここ』の壁が壊れる
って珍しいね」

妹であるフランドール・スカーレットがそう言いながら姿を現した
時、
彼女はそれに気づいた。

——貴殿のその恐怖は俺が回収致しました——

「……まさかそんな事ができるなんてね」

「お姉様？」

「フラン、まずは先ほどまでに何があったか話さない。
お願いはその後よ」

妹が語る幽霊の話に、レミリアは一言も挟まず聞きいていた。
その様子に初めは恐る恐るだったフランドールの話しぶりも段々と
身が入って来ていた。

やがて話が終わるとレミリアは憎々しげに呟く。

「恐くても大丈夫……当てつけたような言い方ね。

貢物に紛れて入ったのね、最初からそのつもりで……屈辱だわ」

「……それをお願いなんだけど」

また一度勢いを失い、おずおずと言いだそうするフランドールをレミリアはその不機嫌な表情のまま見つめていた。

以前までにも何度か、彼女が外出の許可を求めた事はあった。

その度に却下し、時に厳しい口調で強く言い聞かせる時もあったが……。

「やっぱりわたし、外に出てみたい。

もし駄目なら、なんで駄目なのか、本当の理由が知りたいの」

それでも目の前の妹は、また叱られるという恐怖を乗り越えてそう告げる。

——少なくとも、彼はそうしたでしょうから——

「本当に、屈辱だわ」

二人がそうしたと言うのなら、自分は一体……。

「お姉様？」

「……本当の理由は教えられないわ、これは当主たる私が取り組むべき問題だから」

目に見えて、フランドールは落ち込んだ。

「そう」とだけ呟いて出ていこうとする妹にレミリアは声をかける。

「外出の事だけど、必ずだれか連れて行く事……」。

行く先も事前に伝えに来なさい、滅多な場所じゃなければ許可してあげるから」

「「え？」」

フランドールだけでなく、少し離れた所で壁を修復する妖精メイドを指揮していた咲夜まで驚いた声を上げる。

レミリアがキツと睨むと慌てたように作業に戻ったが。

「聞こえなかったの？」

だから——」

「あのね！じゃあ明日さっそく行きたい所があるの！」

驚いたような表情を浮かべていたのも束の間か、
すぐさま明るい笑顔を浮かべて迫る妹に、姉は驚きながらも尋ねる。

「……霧雨魔法店かしら？それなら別に——」

「うっん、それよりも先にね、報告しに行かなきゃいけないから」

怪訝そうな顔をする姉に向かい、フランドールはその場所を告げた。

「で、それがここ無縁塚だったと」

「ええ、私も咲夜さんから話聞いた時はびっくりしましたよ。

私が寝て——持ち場に残っている間にそんな事があったなんて」

「……まあ、何も聞こえなかったという事にしておこう。

結局、三人と一羽分のホットケーキを焼いて、それを食べながら説明を受けていた。

ちなみに件の妹君はさっさと食べ終わって外に出ている。

「血を入れたら美味しいかも」という参考にしたくもない感想を残して行ってくれた。

「……彼も報われたでしょうな」

そう言いながら、俺は複雑な気持ちを抱いていた。
外の世界で傷つき、追いつめられた彼を救ったのはここ、幻想郷の
人喰い妖怪。
例えばそれが、ほんの一例だとしても――

「監視役さん、紅魔館当主からの伝言を預かっています」

「え？あ、ああ、はい」

改まった様子で告げる門番殿の様子に俺も佇まいを直して聞く姿勢
に入る。

……入る、つもりだったのだが。

「門番殿、ここ、シロップついてます」

「え、あ、本当だ」

……どうにも締まらないな、この方。

「こほん……えー、修繕費は不要、いつかこの屈辱と合わせて貴方
の体に払わせる、だそうです」

「そりゃまた恐ろしい」

覚悟はしていたが、えらいのに目を付けられてしまったなあ。

まあ、条件もあるから流石に殺されはしないだろうが、だからこそ恐ろしいモノもあるしな。

俺が眉を寄せてそんな事を考えていると、門番殿はクスリと笑って言葉を続ける。

「それから、レミリア・スカーレットからの伝言もあります」

ふむ？レミリア・スカーレットというと紅魔館の当主、その当人だった筈だが。

「は？……一体どういう——」

事ですか、と続けようとした俺を制して、彼女は明るい笑みを浮かべたまま告げる。

「一応、礼は言っておくわ、だそうです」

「……なんともはや、不器用な事で」

人喰い妖怪の礼なんざ要らねえよ、と答えようかとも思ったが、本気で敵視されても困るのでそれはやめておいた。

……複雑な心境だ、本当に。

その後、傍で話を聞いていた黒坊にくれぐれも射命丸さんには今回の事を漏らさないように口止めして送り出した後、俺は片づけに入り、門番殿は妹君について無縁塚の傍らに出た。

「アレ？……中々うまくいかない」

「これはですね、ここをこうやって――」

何やら楽しそうな声が聞こえてきていたが、俺には関係のない事だ。

やがて、片付けも終えてコーヒーを飲んでいた俺の下に、律儀にも二人が帰りの挨拶に来た。

「それでは、御馳走様でした」

「じゃあね、また来るから」

「お気を付けて」とだけ返して俺も一応、小屋の外に出て見送った。

また来る、か。

……正直、俺は複雑な心境だが、それはどうでもいい事だ。きっと向こう側の彼は喜ぶだろうだから。

無縁塚の上に乗せられた彼岸花の無細工な花の輪に、俺は苦笑させられながらも、そんな事を思っていた。

救いに救うは必要なく（後書き）

スカーレット姉妹の続き物は今回で終了。

いかがだったでしょうか、正直色々と無茶だったかなと不安もあり。
ご意見・ご感想下さると嬉しいです。

次ぎは一話完結を挟むか、すぐに次ぎの続き物をやるか……。
まだ未定ですが、次話もお付き合い頂ければ幸いです。

所屬と居場所

魔法の森の上空を飛んでいく、大小二つの影。

妖怪の山の犬神と命蓮寺の妖怪ネズミ、なんとも珍しい組み合わせに見えるが、実際はそうでもない。

「でも、本当にあの泣き虫坊やが？」

「だからそう言っているだろう。」

士別れて三日なれば刮目して相待すべし。

かつては遮那王の小坊主——遮那王尊殿の成長の速さにも目を見張ったものだ。

ましてあれから8年も経つのだぞ」

妖怪ネズミは毘沙門天の手下でもある存在であり、

この犬神は天魔の下に出向に出ているだけの護法魔王尊の部下である。

毘沙門天と護法魔王尊、一説では毘沙門天の夜の姿が護法魔王尊であるとも言われる程に関連があるのだが、実際の所は、只の仲良しである。

そして、それぞれの直近として仕えていた事のあるこの二人の妖怪もまた知り合いであるのだ。

今話題に上っているのもまた、共通の顔見知りの事についてなのだが。

「私達が鞍馬寺に留つてた時の……。
あの時に『恐怖の大王』に付いて挨拶と出稽古に来たあの子だよ
ね？
すぐに泣いて……そんな大物になるような子には見えなかったけど」

「……同じ事を言わせるな。

それにな、何にでも恐怖する臆病者ではあったが、その上で尚示す行動力には見るべきモノがあつたぞ？

ああ、お前は直接指導はしなかつたから分かるまいな」

「指導つて……あんたと遮那王尊様のアレは虐めにしか見えなかつたけどね」

彼らが一時、主の都合で幻想郷を離れ、外の世界に居た時、二柱の武神（尊格も神のようなものだ）の下に『恐怖の大王』が弟子を連れて来たのだ。

曰く、自分は人間の武器の才は無いからその稽古を付けてやってくれと。

『恐怖の大王』とは旧知の間柄であつた二柱は快諾し、護法魔王尊の部下であり、元は人間の英雄である遮那王尊とその指導をした事もある大天狗が直接指導に当たる事になり、その弟子の地獄の——もとい、実りある一年間の修行が行われたのだ。

「……まあ『恐怖を駆り立てる程度の能力』なんて、恐怖の大王の弟子くらいしか……でも——」

「もういいだろう、どうせもうすぐ確かめられる」

そう言って大天狗は笑みを浮かべる。

そして、小さく呟いた。

「さて、術の方は流石に師に恥じぬモノを得たようだが……。武器の扱いはどうか？……久方に稽古でも付けてやるか」

「うおおー!？」

「ん、なんだい急に？」

「……いえ、別になんでもない……かと」

なんだ今の寒気？

……気の所為、だよな。

「ふん……ならおかわり頼むよ」

寝ころんで漫画を読みながら小野塚さんが空のカップをポンと投げ
てくる。

……全く、このヒトは……。

カップを受け止めながら、俺はため息をついて苦言を呈す。

「……またそんな風に怠けて、仕事はいいんですか？

俺だつて誰かとの会話が恋しくなる時くらいありますから、来て
くれるのはいいですけどね——」

「なら、いいじゃないかさあ。

『恐騎来寇』以来、それなりに仕事も減ってるし、

こんな近くに自分で茶を淹れんでもいい休憩所ができれば来たく
もなるよ。

な、後で再思の道の屋台でなんか奢つてやるから」

「いえ、いいですよ、あんな掬うより救うべきな金魚すくいは気分
が乗らないし、

……何より、あそこ綿あめないですし。

兎に角、俺は注意しましたからね、はい、おかわりです」

しばらくして気付いたのだが、どうにも小野塚さんはサボり癖がつ
いているらしい。

毎度これくらいは言っておかないとちゃんと仕事しに戻ってくれな
いのである。

……俺まで閻魔様に怒られたりしないよな？会った事はないがきつ
と恐ろしい方なんだろう。

と、俺が少し不安に思っていた所にノックの音が聞こえてきた。

「はいはい、どちら様ですか？」

そう言つて、ドアノブに手をかけて――

不意に感じた嫌な予感に、俺は振り返つて小野塚さんにこう言つた。

「すみません、ちょっとそこから動かないでもらえますか？」

ドアが静かに開く、漆黒の騎士鎧に身を包みフルフェイスヘルムを被った姿が用心深く、左右を見渡しながら外に出て――

突如、上空から降下した、面を付けた大天狗に踏み砕かれた。

重く鈍いズンという音が周囲の地が揺れして伝わると共に――

「――カラか」

踏み砕かれた騎士が黒い霧となつて霧散する。

その霧越しに、小屋のドアから二つの槍の穂先が大天狗の足もとめかけて付きだされた。

後ろに飛びのいてかわす大天狗に対し、逃さんばかりに先の騎士と同じ格好をした騎士が二人、それぞれ槍で突きかかりながらドアから飛び出る。

大天狗は手に持った大きな錫杖を一振りし、二人の騎士を丸ごとなぎ払おうとするが、騎士達は体を前に折り、大きく前のめりになる事で回避する。

大天狗は騎士に追撃を加える事ができなかった。

先に砕かれた騎士が再生し、槍を投擲していたのだ。

先ほどまで騎士たちの上半身があった場所を通り、真っ直ぐに飛来するそれを、大天狗は返す錫杖で打ち落とす。

その瞬間、大天狗の心に強烈な恐怖が叩きつけられた。

たとい修行を積んだ大天狗と言えど、突然の恐怖には隙を作らざるを得ず――

同時に二つの穂先が大天狗の喉元寸前に突き付けられた。

「さて、御説明頂けますかな、大天狗殿」

片方の騎士がそう言うと、大天狗は笑いながら答えた。

「成程、恐怖感染を最初からでなく、ここぞと言う所で……。

大軍を展開する暇を与えずともここまではできるか」

「……な、その声、まさか僧正坊様!？」

騎士が驚いた声を上げた瞬間。
上空から更に三人の大天狗が降下し、それぞれの錫杖で騎士たちを
打ち据えた。

「……八身、駆け、か……」

鎧を碎かれ、薄れていく意識の中で、
『恐怖の駆り手』は鞍馬の天狗の使う、分身の術の名を苦笑しながら
呟いた。

鞍馬寺の出稽古の事は覚えている。

何せ俺は誰からかと思いだされないようにされた上で、一年間も家に
帰る事が許されなかったのだから。

とはいえ、具体的な思い出と言うと……。

牛若ま——じゃなかった遮那王尊様と僧正坊様に泣かされていた事
くらいしか……。

いや、そういえば毎度誰かに傷の当てとかしてもらってたような
一人でいると何かと気にかけてくれた、確か、妖怪ネズミの——

「何が『ちょっと挨拶がしたい』だよ、思いつきり叩き潰してるじ
ゃないか！」

「いや、ワシとコイツにとってはこれが挨拶のようなものだ……。それに、どうせコイツの事だ、謝れば済ませてくれるだろう」

「……ちよつと、あたしにも分かるように会話してくれないかい？」

話し声に起こされるように目を覚ますと、俺は布団の上で横にされていた。

視界には小野塚さんと、人間の老人の姿になった僧正坊様がいる、まあ、大天狗サイズじゃドア通らんしな。

「くっそ、夢じゃなかったのか……」

「あ、起きたんだ、大丈夫？」

二人とは俺を挟んだ反対側、俺のすぐ傍に彼女はいた。懐かしさと体の痛みに中途半端な苦笑を浮かべて、俺は挨拶を述べる。

「どうも、お久しぶりです、ナズ様」

「久しぶり……様付けで呼ばれるのも久しぶりだな」

当時、師匠に引き合わされる方々は皆々偉い方ばかりだったので、俺は誰にも彼にも様を付けて読んでいた。なので、さして偉くもない（失礼な言い方だが）ナズ様にも様付け

で神や尊各、大妖怪と同じような敬意を払っていたのだ。

「おい、ワシには挨拶もなしか？」

「さっきやったじゃないですか、それも強烈なヤツを」

「なんだ、皮肉が言えるようになったのか、つまらんな」

うむ、僧正坊様は相変わらずだな。

しかし、お二人が幻想郷にいるとは知らなんだなあ。

と、小野塚さんがパンパンと手を鳴らして肩をすくめながら言った。

「感動の再会つばいとこ悪いんだけどさあ、そろそろ説明してくれないかな。

これ以上おいてけぼりは流石に寂しいからね」

「あ、すいません、そうですね。

じゃあ一通り説明しましょうか。

俺もお二方がどうして幻想郷にいるのか知りたいですし」

「うむ、まあよろう。

ワシらとて新聞に書いてある事だけで満足した訳ではないしな」

「そうだな、じゃあ昔の事については私が話す——」

「いえ、それについては俺が話しますから」

そう言つて、俺はつさと鞍馬寺の出稽古の事を小野塚さんに説明した。

勿論、当時の俺については詳しくは描写しない……あんな恥ずかしい思い出、晒してたまるか。

やがて、昔の話も終わり、俺もお二方も今幻想郷にいる理由を語った。

最も、俺含め三人とも微妙にぼかしている所があつたが、そこはそれぞれの立場、暗黙の了解でスルーだ。

「……名前は置いてきたか、賢明だな。

しかし、よくまあここまで成長したものよな。

振るう武器よりも涙と鼻水の方がよく飛ぶような泣き虫が」

「な、ちよつとその話は——」

「へえ、ちよつとそこら辺、詳しく聞かせてもらえるかい？」

「小野塚さん!？」

「うむ、そもそも最初に連れてこられた時からして師の裾を掴んでその後ろに隠れているようなヤツでな——」

遠慮なし語りだそうとする僧正坊様を止めようと身を起しかけるが、「まあまあ」と言う小野塚さんに抑え込まれてしまう。

「ちょ、お願いですから、お願いだからやめて〜!」

そんな馬鹿騒ぎの中、ナス様がずっと難しい顔をして黙っていたのに、俺は見ても見ないふりをしていた。

やがて、抵抗を諦めた俺の横で死神と大天狗は人の恥ずかしい話を肴に酒盛りを始めてしまった。

……というか酒なんてどっからとりだしたんだよ。

「あっはっは、可愛らしくていいじゃないか、夜に廁へ行く途中で迷って泣き出すなんてさ」

「漏らす前に導いてやれたのが幸いだっ たがな」

「……」

「あ、どこに行くの?」

「……トイレへ」

「おう、ついていってやらなくても平気か?」

「結構です!」

ど畜生、だから酔っ払いは嫌なんだ。

逃げるように俺は小屋の外に出た。

寝かされていて強張った四肢を動かしながらため息をつく。
と、俺がさっき出てきたドアが開く気配がした。

「騒がしちゃってごめんね。

僧正坊も久しぶりにアンタに会えて嬉しいんだ」

「分かっていますよ、まあ、だから余計に性質が悪いとも言えます
が」

声をかけてきたナズ様に苦笑しながらそう答える。

ナズ様は俺のとなりまで歩いてきた。

……昔は俺の方が背が低かったのにな、

違和感と年月に対するほんの少しの寂しさを感ずる俺にナズ様は神
妙な様子で問いかけてきた。

「監視役、か。

その仕事は辛いと思うけど、分かってる？」

「……今はまだ。

ただ、これから少しばかり切ない仕事を予定してまして。

きっと辛くなるだろうな、と頭では分かっています」

「……そう。

ねえ、いつそ役目も何も考えず目の前の輪の中で楽しめたら、そう思ったりする事はない？」

「楽しめていないように見えました？」

「いや、楽しめてるからこそ、切ないって顔してた。
分かるから、私も……」

そう言つて、ナズ様は少し俯く。

彼女は今、命蓮寺で毘沙門天様の弟子の部下をしていると聞いたが

いや、詮索なんて止めておこう。

「答えはいいえです。

そうなら多分、もっと切ないような気がしますから。
こう、上手くは説明できないんですけど」

「そう……いや、分かる……らしいから、変わってないね。
もう戻ろうか、酔っ払いどもを宥めなくちゃ」

「そうですね、お手伝いしますよ」

そうして俺たちは小屋の中へと戻っていく。

「おう、なんだ結局付き添ってもらったのか？

さあさあ、出した分入れたらどうだ？お前も飲め」

「すいませんね、外に属する俺はまだ飲む訳にやいかないんで」

「なら、つまみ作ってくれよ、つまみ」

俺とナズ様は目を見合わせて肩をすくめた。

結局、この酒盛りは朝まで続き、

最後は俺が小野塚さんを三途の河まで、ナズ様が僧正坊様を妖怪の山まで引きずっていく事になってしまった。

なんとも残念な事に、後日の小野塚さんは会話内容をキツチリカッチリ覚えていたようだったが。

襲う、守る、その舞台に敷かれるは、

人里・寺子屋の一室

「いや、生きてるって素晴らしい。
すいませんね、ご飯まで頂いちゃって」

心底からの笑顔を浮かべて白米を頬張る青年。
外の世界風の服装をしており、一目で外人だと分かる。

「ん？……それならば君の持ち物だぞ？
一緒に置いてあったこの袋に食糧が一揃い入っていた。
急いでいたからそれを使わせてもらったが……」

そう応えるのは上白沢 慧音、人里に住み、教師を務める獣人である。

その彼女の言葉に対し、青年は首を傾げた後、思い出したように、
あゝと声を上げる。

「あの黒い騎士さんかなあゝ今度会ったらお礼言わないと」

「黒い騎士？」

……そう言えば何故村の外れで倒れていたのか、過程を聞いてい

なかったな。

外人であるのは分かったんだが」

「外人って外の世界から来た人の事でしただけ。

……えーっと、俺もよくパニックってよく覚えてるわけじゃないんですけど」

彼は故あって自ら命を絶とうと、死に場所を定めさまよっていた所、

気が付いたら辺り一面が彼岸花の地に迷い込んでいた。

何やら息苦しくなり、辺りの陰から自分を狙う何者かの視線も感じられた。

恐怖と苦しさのあまり、自分が死のうとしていた事も忘れて必至で逃げ回っていると、不意に開けた場所に出た。

そこには墓標のような物と小屋が建っていた。

既に恐慌状態に陥っていた彼は必至でドアを叩く。

それにすぐに応えるようにドアが開き、漆黒の騎士が姿が表わした。なんと奇妙な事だが、その時の彼にそれを訝しむ余裕などなかった。

「急いでこの小屋の中に入ってください。
人喰い妖怪がもうそこにいます」

「え？ひ、人喰い？！
だ、だず、だずけて！」

「ちょ、掴まないで、後ろに下がってください。
お願いだから……——ああ、くっそ、御免！」

「たがッ！？——」

彼の説明を聞いて、慧音は合点がいったとばかりに頷く。

「……そこで意識が途絶えたと」

「ええ、まあ、今思い出すと何やってんだろっ俺って感じですけど」

「君は運が良かったな。」

恐らく、彼は『恐怖の駆り手』……外来人の妖怪退治屋とでも言うべきかな」

そう言いながら、『文々。新聞』を投げてよこす。

彼は食事を中断し、そこにある『恐怖の駆り手』に関する記事を見ながら、驚いたような声を上げた。

「外の世界の妖怪退治屋……へえっそんなのがいたんだ」

そんな彼の言葉を聞き流しながら、慧音はある考え事をしていた。

幻想郷に食糧として取りこまれる外の世界の人間、それをなんとかする為に派遣された妖怪退治屋。

一先ず、停戦は成ったようだが……。

もし以後も彼がなんらかの行動を起こし、外の世界の犠牲者を減らしていった場合、

まず、危険に晒されるのはこの人里だろう。

今だって腹が減れば、幻想郷の住人だろうと襲う妖怪は居る。

だが、それは単純に腹を満たすための手段として、である。

それとは別に『妖怪である為に』人間を喰らう妖怪が、幻想郷には大勢いる。

外の世界からの人間の供給が滞れば、そいつらが狙うのは……。

「もし、そうなりそうだったら……どうすればよいのだろうか？」

「へ、なんの話ですか？」

「ああ、いや、なんでもない。

とりあえずこれからどうするか、ゆっくり決めると良い。

明日は君の世話は他の者に頼んでおくから、この里を案内でもしてもらおうと良い」

「え、あ、ありがとうございます。

えと、慧音さんは……？」

「何、その恐怖の駆り手に会いに行こうと思ってな。

礼は代わりに伝えておこうか？」

何故、『監視役』はこの外来人を置いていくだけで去ってしまったのか……。

一先ず、その『監視役』の人となりと目的を直接確認しなければなるまい。

人里の守り役は浮かべた笑みの内で密かに気を引き締めた。

その日の朝、俺は修行を行おうと小屋から出た所で彼女に気づいた。俺は驚く、俺以外の誰かが無縁塚の前で手を合わせているのは、（少なくとも俺がここに来てからは）今までなかった事だからだ。

俺が驚いて動きを止めている間に彼女は俺に気づいた。

「君が『恐怖の駆り手』か、わかっていたとは言え、やはりまだ若いな」

「……貴方は？」

「ああ、済まない、私は上白沢 慧音、人里で寺子屋を開いて教師をしている者だ。

……少し、話でもしないか？」

上白沢 慧音……『恐騎来寇』前の情報収集で、その名は知ってい

た。

人の里の守り役とも言える獣人……。

意外と美人、そしてやっぱり良い人そうだというのが直接会った第一印象だった。

「人里に遊びに来ないかと？」

「ああ、君もずっとこんな所に居ては気が滅入ってしまわないか？
勿論、都合もあるだろうから無理にとは言わないが……」

ふむ、これは渡りに船というヤツだろう。

そろそろあの計画を実行に移す時だと思っていたしな。

「そう、ですね……一回ぐらいは行っておいた方がよいかもしれませんし。

実を言えば幻想郷の人の暮らしと言うモノにも興味はありましたし」

理由は適当にでっち上げておく。

ただ……上白沢さんが嬉しそうに「そうか」と言っているのを見るとどうにも罪悪感が湧きあがってきた。

人里への道中（空中でも道中と言うのかは知らないが）、俺は先日保護した外来人の事を聞いていた。

「では、無事保護されたという事ですか？」

「ああ、君のお蔭でな……しかし、君は何故彼を置いてけぼりにしてあの場を去ったんだ？」

「……まあ、色々ありまして」

……少なくともまだ、理由を明かす訳にはいくまい。
神妙な顔で答えた俺に対して上白沢さんも少し難しい顔で、ただ頷く。

「それはそうと……監視役君」

「はい？」

「君は……その、飛べないのか？」

「はい、俺は飛べはしませんね。」

自身でも宙を駆ける事はできますが、それだと遅いので」

俺は今、能力で具現化した軍馬に跨り、宙を駆けている。
どうにもそれが上白沢さんには不思議に思えるらしい。

ん、もしかして遅かったか？

「……遅いようなら四馬曳きのチャリオットにしますが？」

「いや、そういう訳ではないんだ……ただ、飛べないんだな」と不思議に思っただけでな」

……何を言ってるんだこのヒトは？

別にある程度の力を持っていれば漏れなく飛べる訳でもあるまいに。それとも、空中歩行ってここじゃ珍しいんだろつか。

その後も適当に会話をしている内に人里についた。

俺達が到着、着地すると共に通りすがりの町人が寄って来た。

おおすげえなんか時代劇の中みてえ、と辺りをキョロキョロしていた俺は声を掛けられるまで気付けなかったが、

「うお、デケえ！？」

これって馬なのか？」

……あ、しまった。

つい、騎乗のまま来てしまった。

「落ちつけ、これは彼が能力で作った馬だ、本物ではないよ」

「あ、能力で……？」

「ええ、これは本物ではありませんが……まあ、見た目はまんまだと思って結構ですよ。」

「そうですね……外の世界にはこの倍の体格はある馬だっていますし」

「「え、本当か!？」」

「……そこで上白沢さんも驚くんだな。」

「まあ、そりゃそうか、考えてみれば小型種の馬を見慣れた人間からすればかなり巨大だもんな。」

「俺がライオンサイズの犬を見つけるようなもん……いや、それだと、なんだ妖怪か、で終わってしまいそうな気がする。」

「そうか、外の人間は馬の妖怪まで手懷けて……」

「違いますよ……気持ちに分かりますけど」

「どうやら上白沢さんも同じような考えに至ったようだ。」

「……そろそろ戻しとくか。」

「軍馬が黒い霧になって散り、同時に地面に着地した俺の体に吸収されていく様子を町人の男性は驚いた様子で見つめる。」

「えーっと、先生、この人は……」

「彼はあの『恐怖の駆り手』さ、前に少しだけ噂になっただろう？」

「な、ちょっと上白沢さん——」

「へえー、あの外の世界から来たっていう退治屋さんの。
そりゃ頼もしいな、まあ、ゆっくりして行きなよ」

「え、あ……ありがとうございます」

笑顔で迎え入れてくれた町人に俺は困惑した。

俺は外の世界に所属する退治屋。

それも、外の世界の犠牲者を減らす為に送り込まれた者だ。

……それは『文々。新聞』にも記載されている。

それなら、察しがつく筈だ。

俺の存在はこの幻想郷の人間にとって脅威だと言う事を。

そうなれば、外の世界の人間を保護する事にだって消極的になるかもしれない、

その分の犠牲を自分たちで払わなければならないかもと恐れてもおかしくないからだ。

……だから、俺はその、外来人を保護する事に対する恐怖を回収するつもりでここに来た。

早めにそれを済ませておく為に『文々。新聞』の取材に応じて情報を流したのに……。

先日の外来人をそつと置いてきたのだって、俺の存在を意識させれば要らぬ恐怖を煽り彼の立場が危うくなるかも……。

「じゃあ監視役君、付いて来てくれ。

先日の外来人の彼が君に直接礼を言いたいと——……どうした？」

「い、いえ、なんでも……ありません。

今行きます」

呼びかける声に、思考を中断して慌てて付いていく。

……少し、様子を見る必要がありそうだな。

人里の中を歩きながら辺りを見渡す。

この辺りは商店も並んでいるな。

「ふむ、話には聞いていましたが……。

妖怪も買物にくるんですね、それも堂々と」

「ああ、人里では妖怪は暴れない、それが取り決めになっているからな。

それでも考えなしの有象無象はいるし、皆とて妖怪への恐れが全くない訳ではないのだから」

……それは分かる。

先ほど、そんな恐怖の『声』が聞こえてきた。

「ん？」

ふと、違和感を感じて立ち止まる。

違和感……いや、この感じは以前に――

「監視役君、物珍しいのも分かるが立ち止まる時は一言言ってもらわないとはぐれてしまうぞ？」

「あ、すみません、気を付けます」

やれやれ、と優しそうな苦笑でため息をつき、上白沢さんはまた歩き出す。

……今は考えるにも材料が少なすぎる、か。
俺も素直にその後ろについていく事にした。
そして、やがて上白沢さんが足を止めたその場所は――

「……定食屋？……そう言えばもうお昼時ですか」

「ああ、二人ともうつっている筈だからな。
入るぞ、今日は私のおごりだ」

「ちょ、そんな悪いで――」

遠慮しかけた俺の手首を掴んで引つ張り、上白沢さんはそのまま店の中へ入って行ってしまった。

「親父さん、妹紅達はもう来ているか？」

「おう、先生、それならあっちに——」

「け〜ね〜！こっちこっち」

上白沢さんに問われた店主らしき人物が指した方には白髪の少女と

「え、慧音さん？ってことは……あの子が『恐怖の駆り手』？」

先日の外来人が居た。

……やはりこの目で無事だと確認すると安心するな。

その外来人は席を立つと俺の所まで寄って来て手を取り、ぶんぶん振りながら礼を言って来た。

「いや〜、あの時はありがとう、おかげで命拾いしたよ」

「いえ、御無事で何よりです……もう、また捨てようなんて思いま

せんよね？」

「う……それは勿論、反省してるよ」

「ほらほら、店の入り口で突っ立っていては迷惑だぞ、とりあえず席につこう」

苦笑して、そう言いながら歩き出す上白沢さん。

俺達も後に続こうとした所で店主さんが後ろから俺たちに間に立ってそれぞれの肩に腕を回してきた。

そのまま、俺達二人を引き寄せてニヤリと笑いながら小声で言う。

「格好からするとお客さん達、外来人だな。

お客さん達は運がいいぞ、先生はこの里を守ってくださいってる方だし、

妹紅さんだつて急病人が出たら永遠亭——つと、お医者様がいる所に運ぶ時に妖怪から護衛してくれるし、

お二人のお蔭で人里は平穩にやっていけてるんだ。

オマケに二人とも美人ときてる。

そんな二人に里を案内してもらえるんだ、幸運思わなくちゃ駄目だぞ。

くー、俺も外来人だったらそうしてもらえたかもしれねえのに！」

「……」

「え、い、いやあ、そうですね、ありがたく思わなくちゃ」

「他には——」

「ん？」

「他に、この人里の営みを守っている方は？」

「あ、ああ、そうだなあ。」

博麗の巫女さんとか、守矢の神社の風祝さんとか、かなあ？

他にもいざってなれば助けてくれそうな人は幾らかいるけど……。

ああ、勿論、この里の営みは里の皆で守って来たものだ。

里に住み着いてくれた外来人さん達だって例外じゃあないぞ、色々
と便利な事教えてくれたりするしな」

「……」

「……えっと『恐怖の駆り手』君、どうかした？」

——こんな素晴らしい場所の為に俺の命が使えたなら、それはきつ
と十分すぎる程に有意義だろうなって——

「……いえ、別に」

俺は誤魔化すように笑顔を浮かべて、そう応える。

「そ、そう、じゃあ席に付こうか、もう妹紅さんが幾らか注文しち
やったからさあ。」

メニニューは強制的にお任せだけど、すぐに来ると思うよ」

「おうよ、すぐに持っていくからな、手を洗って待って居やがれ！」

威勢良くそう言っで厨房に入っで行く店主さんと、席に戻ろうとする外来人の青年が背を向けた瞬間、俺は笑顔を引っ込めた。

上白沢さんが難しい顔でこちらを見ている事に、この時の俺は気づいていなかったんだ。

襲う、守る、その舞台に敷かれるは、（後書き）

次ぎの続きものは人里編です。

しよっぱなから中々に暗いです、うまくコメディを入れていけるか……。

では、次話もお付き合い頂けたら幸いです。

ならばせめて

四人組が人里に行く。

力を持つ獣人に蓬萊人、そして外来人が二人、あちこちで注目を集めるのは必然だった。

方々の人や店から声をかけられ、試食や勧められたり、土産を持たされたり。

外来人の内の一人は上手くやんわり断り、もう一人は素直なのか、手を荷物でいっぱいになっている。

「やゝ、良い人たちだけど……流石にこれだけ多いと困っちゃうなあ」

「よければ俺が幾らか持ちましょうか？」

「お、ありがとキヨウ君」

「キヨウ君？……まさかとは思いますが『恐怖の駆り手』だからキヨウ君、と？」

「……アレ？気に入らなかった？」

「そりゃ貴方——」

「私と良いと思うけどね。」

少なくとも監視役とか恐怖の駆り手よりは親しみが湧くわよ？」

「いや、別に親しみは——」

「いいじゃないかキョウ君。」

君達二人は先に寺子屋の方に行っておいてくれないか、子供たちにも紹介したいが。

ちよつと家まで取りに戻りたい物があつてな。

場所なら愁斗君しゅうと、分かるだろう？」

「はい、じゃあ行こうかキョウ君。」

あ、こつち持つて」

「いや、だからキョウ君で——つと……あ、ちよつと待つて下さ
いって」

少年は抗議らしい言葉を発せられなかった。

急に手渡された荷物に慌てつつも、歩き出してしまった青年を追いかけていく。

二人の外来人が去つた後、

上白沢 慧音と藤原 妹紅の二人はわき道に入り、小声で会話を交していた。

「——で、どうだった？」

「やっぱり魔術や式みたいな妙な気配がするのは里中のあちこちにあるのは確か……。」

でも、それが何なのか、正確に何処にあるのかは分からない。

……こんなのは初めてよ。

一番考えられるのは、犯人が新しく幻想入りした、私達の知らない能力の持ち主だったこと」

「しかし、彼がそうだとは思えない。

確かに、色々と挙動不審ではあったが――」

――……まあ、色々ありまして――

「いや、それはない、無い筈だ」

頭を振りながら自分に言い聞かせるように言う慧音に対し、その肩に手を置き、優しく諭すように妹紅は言い聞かせる。

「落ちついて慧音、慧音の人を信じたい気持は分かる。
私だってあの子が悪い子には見えない、むしろ、善良な人間ですよ。」

……でもね、あくまで彼は外に所属してる人間なのよ？
慧音がこの里の人たちを守りたいと思うように、外の人を守りたいと思っていても、
その為になんらかの行動を起こしても、ううん、起こしていてもおかしくはないのよ？」

「……しかし……」

「分かったわ。

これからは私が見張るから、慧音は妙な気配の方を調査して」

「……すまない」

俯き、本当に申し訳なさ誘うにその姿に、妹紅は笑いかける。

「こういう時はありがとう、よ。」

それに、実際まだ彼が原因と決まった訳ではないわ。
さ、行きましょ」

そうして二人も歩き出す。

その心の内で妹紅は先ほど密かに考えを巡らしていた。

先の定食屋から様子はおかしかった。

また道中、会話を交した人に「人里を守っているのは、支えているのは誰だ」と聞いていた事が何度かあった。

そして里の中には謎の術式の気配、先日に来外人だけを届けて消えた彼……正直な話、疑うなど言う方が無理がある。

あるいは、なんらかの手段で以ってこの人里にも犠牲を供出させ、外の被害を減らすつもりか……。

あなたが何を企んでいるのかは分からない、でも悪いけど思い通りにさせる訳にはいかないのよ。

親友の大事に思うこの里を護る為ならば例え相手が同じ妖怪退治屋でも……。

そんな決意を心の奥底に隠して妹紅は隣の慧音に笑いかけていた。

「……いやあ、キヨウ君、本当に此処は良い所だねえ」

「え、ええ……」

彼の言葉に、俺は生返事をするだけだった。

ちなみに、あまりにも喰い下がるのでキヨウ君呼ばわりは黙認した。

里の人々の話を聞いて気づいた……どうやら俺は誤解をしていたらしい。

ここの人々はそも、外の世界の人たちの犠牲の上に立っているという意識がまるでない人間しかいない。

はじめは知らなかったのかと思った、でもそうじゃない、意識していないんだ。

……それが悪い訳じゃないんだ。

妖怪達が何処で誰を食べてるかなんて、それが自分達に影響ない限り気にしてなくてもおかしくないんだ。

目の届かない所で腹を満たした肉食獣が、自分の目の前を素通りしたとしても、大抵、ただほっとするだけだろう。

大体、そんな事を気にしてたら里の人々の妖怪への恐怖が増して、共存への障害になりかねない。

もし今の共存関係が崩れれば、幻想郷自体のバランスだって危ない、そうなれば外の世界にだって大きな被害が出かねない。

そうだ、悪くもない、おかしくもない。
むしろ結果オーライ、最高じゃないか。

俺が何もわざわざ騒ぎを起こして嫌われる覚悟までしなくたって良かったんだ。

この里は外来人を　そしてその犠牲も　すんなり受け入れてくれる。

——その人たちも里の人たちもとても楽しそうに暮らしてて……—

なのに、なんで彼らに　犠牲から目を逸らす奴らに　俺は。

——……なんで、なんで俺はそうしちゃいけないんだろって——

俺は、こんなにイラつきを　怒りを　抱いているんだ?!

「きよ、キヨウ……君?」

彼の声と、同時に届いたその恐怖の『声』にハッとして、赤黒く染まりかけた思考から我に帰る。

随分と恐ろしい顔をしてしまっていたようだ。

俺の人相は元々大人しそうに見えるから……相当だな、こりゃ。

「すみません、少し考え事をして……そろそろ着くでしょうか?」

まだ遠いようなら、能力で荷駄馬でも用意しますが」

そう言って笑顔を浮かべてごまかす。

……少しばかり自嘲の色が出てしまったかもしれないが。

「そ、そう……いや、もう近いよ、さあ急ごうか」

彼はそう言っただけ抱えた荷物をひたたくて歩くペースを上げた。
……どうやら自嘲の笑いが疲れた笑みに見えたらしい。
やれやれ、気を遣わせてしまったな。

ため息をついて俺は彼を追いかける。

角を曲がって行ってしまった彼に追いつくために俺は走りだす。

しかし、角を曲がろうとした所で、誰かとぶつかって弾かれてしま
う。

いつそ食パンでも加えていれば……と益も無い事を考えながら、謝
罪の言葉を発する。

「すいません、急いでたもので」

しかし、目の前の屈強体つきな青年は何も言わずに驚いた顔で――
いや、これは。

「あ、あ――」

恐怖の『声』が聞こえる、おまけに、彼はどうやら妖怪の様だ。
この怯えようは『恐騎来寇』で戦った相手とみて間違いないだろう。
……見覚えがないのは恐らく印象にも残らない低級の妖怪だったからか。

「うわあああああ！」

尻もちをついた体勢の俺をそのままに、悲鳴を上げて逃げ出してしまった。

やれやれ、『恐騎来寇』じゃ妖怪を殺さない事にどこかほっとして
る俺がいるのも事実だったが、

徹底的に恐がらせた拳句にああいう反応が来るのもそれはそれで少し嫌だな。

外でも偶にあつた事とはいえ……立場が逆だろ、とツツコミたくもなるものだ。

「きよ、キヨウ君、今のは？」

「すみません、ちょっとした……不幸な出会いって奴です」

悲鳴が聞こえたのだろう、周りの人の視線が集まり、あの外来人の青年も戻って来た。

誤魔化すような笑みを浮かべて適当に答えながら、俺は立ちあがる。

「あ、あのさキヨウ君」

「はい？」

並んで歩き出した所で、彼が改まった様子で話しかけてくる。

「さっきのヒト……妖怪だよ、ね。」

キヨウ君は外の世界の妖怪退治屋だつて言つてたけどさ。

折角、人間と妖怪が共存できるっていう幻想郷にいるんだし、仲良くしようとしてみてもいいんじゃないかな？

そりゃ妖怪は食べる為に人間を襲うかもしれないけどさ、人間だつて食べる為に他の動物を襲うじゃん。

停戦はなつたのに敵対しててもしょうがないと思つし、分かりあえたらきつと素晴らしい事だと思うよ」

彼は少し恥ずかしそうにそんな事を言う。

冷静に考えれば間違つた事は言っていないのだが、その時の俺は決して落ちついているとは言ひ辛い状態だった。

俺はしばらく、彼が何を言っているのか理解できなかった。

つい先日、彼が妖怪に襲われていたのはつい先日だ。

俺は彼の恐怖の『声』を聞いた、とても大きく、強い恐怖だった。

なのに、彼はもうそれを忘れてしまったのか？

俺は覚えている、彼の恐怖も、今までの……。

目の前で妖怪に襲われている人たちの恐怖も、助けられず食われるその瞬間の恐怖も。

あんな恐い思いをした外来人さえ自分が助かったら、もうそれで終わってしまうのか？

貴方は何処かで誰かが死んでいっても、それが自然の営みだからで済ませてしまえるのか？

……自分が、その恐怖を一度は知ったというのに。

もう、他の人々の犠牲へ、思いのひとかけらも向けてはくれないのか？

例えば今の自分が、その上に立っているとしても？！

「……『文々。新聞』の俺の記事、読みました？」

「ああ、うん、読んだけど……それが？」

今度こそ、俺の思考は真っ赤に染まった。

藤原 妹紅は里中を駆けまわっていた。

慧音と共に寺子屋に遅れて到着した彼女ら待っていた外来人は一人だけだったのだ。

——ああ、キヨウ君ならちょっと用ができたって言って何処か行っちゃったよ——

青年の言葉を聞いてすぐに彼女は走りだした。

「まさか、私達が目を離した隙に——」

杞憂であってくれと思う。

もし、彼と敵対する事になれば人間好きの親友は悲しむだろう。しかし、同時にああ、やはりか、とも思う。

「その為に慧音を利用したんだとしたら、ちょっと許せないわよ」

彼女の親友は『恐怖の駆り手』とも友好的関係を築きたいと思っていた。

今回、彼を人里に招いたのは真意や妙な行動を取らないか探るだけでなく、

純粹に彼を歓迎し、いつもは一人でいるらしい彼に人里の暖かさに触れて欲しいという思いもあったのだ。

そんな親友を思いを利用してこの里に危害を及ぼす工作を行うのだとしたら、それは許せる事ではない。

そう思つて妹紅は走る。

随分長い間探し回っている、初めは飛んで上から探していたが、暗

くなつてからは足を使っている。

あのまま帰つたならばそれでいい、だが、そうは思えない。

彼女は親友の事を思うあまり少し冷静さを欠いていた。

常の彼女なら察せられた筈だ。

外の世界の人間を守るべき彼に、

その行動によつて危険に晒されるかもしれない人の平和な営みを見せつける事が、どれだけ残酷な事かを。

既に日も落ちた。

かなり手間取つたが、里中を巡つてやるべき事——いや、やりたい事の準備も終えた。

里の外れ、俺の目の前の宙には禍々しい気配を発する魔法陣のようなものが、まるで見えない壁に描かれたように浮きたっている。

ふと、気配を感じて苦笑しながら振り返る。

「……貴方には言つておいた方がいいかもしれませんね、ちゃんと彼らへの意識を持つていてくれた貴方には」

「……監視役君、やはり君は」

上白沢さんは悲しそうな、苦しそうな顔をしていた。

なんだか罪悪感が湧いてくるな、まあ当然か、俺がこれからすることとは善行ではないだろうから。

「正直、迷ったんですよ、色々とね……でも彼らの犠牲の上に立つなら、せめて——」

言いながら、俺は目の前の魔法陣へと手を伸ばしていく。

上白沢さんは、止めようと手を伸ばしかけ、諦めたように俯いてしまった。

……正直な所、ちょっとだけ、それが残念だった。

理想郷で在るべき地

遅れて寺子屋に着いた藤原 妹紅と上白沢 慧音を待っていたのは、戯れている子供たちと、一人の外来人だけだった。

「ああ、キヨウ君ならちよつと用ができたって言って何処が行っちゃったよ」

「なんですって!?! ああ、もう」

「え、ちょ、妹紅さんまで？」

外来人の青年の話を聞くや走り出してしまふ妹紅。
それを見送りながら、青年、そして周りの子供たちは首を傾げる。

「あゝ、まだ伝言あつたのに……」

「何?……聞かせてもらえるか？」

「あ、はい………すまない、そして心配はいらない、と。
なんか調子悪そうだったですからね、でもここで休んでいった方がいいんじゃないかなあ」

「………すまない、皆、今日は休みだ」

一瞬の沈黙の後、子供達の大多数の歓声と少数の不満の聲が上がる。ちよつとだけショックを受けた慧音だったが、それどころではないと氣を取り直す。

「愁斗君はそこに居てくれ、私は彼を探してくる」

そして空に舞いあがりかけた慧音に、慌てたように青年が声をかける。

「あ、ちよつと待つて下さい、まだあるんです。

……慧音さんにはありがとう、とも伝えてくれるようにと」

「……そうか、ありがとう、遅くなるようだったら、勝手に夕飯は済ませてくれていい」

今度こそ空を飛ぶ、慧音は心の内でやりきれない思いを抱えていた。

結局、彼を見つけたのは慧音の方だった。

それは望ましい展開の筈だったが、慧音は次にどうするべきか、考えが付かないでいた。

「正直、迷ったんですよ、色々とね……でも彼らの犠牲の上に立つなら、せめて——」

そう言いながら、恐怖の駆り手は宙に浮いた魔法陣に手を伸ばす。

慧音は目の前の少年を止めようとして、断念して俯いた。
少年は微笑を浮かべたまま、言葉を続ける。

「せめて、ここには理想郷であって欲しいですから」

……ああ、やはり。

俯いたまま、慧音は心の内で呟いた。

この日の朝

「さ、どうぞ、上がってください……甘い飲み物は平気ですか？
あ、お酒じゃないですよ」

「どうだろう、興味はあるな……任せるよ」

小屋の中に招かれた慧音は、自分を持て成す為に忙しく動き回る少年を見て苦笑を浮かべていた。

悪霊、人喰い妖怪、毒の花に曖昧な境界が引き起こす怪奇現象、危険極まりない無縁塚に住む妖怪退治屋とはどれほどの豪の者かと来てみれば居たのは大人しそうな少年である。

やがて、飲み物と菓子をちゃぶ台に並べた彼と向かい合い、言葉を交す。

「君は一日中ここににいるのか？」

「そうですね……大体は。」

今までに、え〜っと……何度かは出かけましたけど」

予想していたとはいえ、やはり可哀そうに思える……が、目の前の

彼はなんとも上機嫌、嬉しそうに見える。

来客がそんなに嬉しいのならば、やはり寂しい思いをしているのではないかと予想したが――

慧音の疑問の表情に気づいたのだらう、彼は苦笑して頭を掻きながらニヤけていた理由を告げる。

「いや、誰かがこの無縁塚の前で手を合わせてくれたのは初めてなので。

場所が場所ですから仕方ないですし、妖怪で来てくれてる方もいるんですけど……。

やはり人里の方に来てもらえると、彼らも報われるような気がしましたね」

この言葉に慧音はショックを受けた。

自分がここに来た最大の理由は彼、監視役の真意を探る為である。それを純粹に喜んでくれる彼に、罪悪感も抱いた。

彼と他愛ない会話をしながらも、やはりその気持ちは大きくなっていく。

故に、事前の計画としてでなく、純粹に彼の事を思い、彼女は最後にこう切り出した。

「……こちらに遊びにこないか？」

何かを思い返していたのだろうか、不意に上白沢さんは意を決したように顔を上げる。

「監視役君、あれは、あの時私は——」

「分かってますよ、貴方の里を思う恐怖の『声』は聞こえていました。」

……きつと俺の事を探る為に来たのでしょうか。

でも、その上で貴方は無縁塚の前で手を合わせてくれた、切っ掛けはついでも、あの時の貴方は確かに心からそうしてくれた。

それは、あの時の貴方の顔を見ていれば分かります。

……すいません、分かって黙ってるって性質悪いですよね」

苦笑して、俺は先を取って応える。

また黙り込んでしまった上白沢さんをそのままに、

目の前の魔法陣に手を触れ、肌を伝う気持ち悪い感触に耐えながらその術式に干渉して行く。

「……これは、ある『事^{こと}の神』が作り上げた通^とり道の入り口——いや、出口となる門です。」

事の神はその真の名さえ差し障りのあるものとされる、災厄を齎

す神です。

オマケにその事の神はそこを通るだけで災厄を撒き散らす存在です。

こんな所に出られても困ります、俺が行って……帰ってもらってきます」

里中で感じられた違和感はこの通り道が構成される際に伴って生まれる、余計な部分の切れ端のようなものだ。

俺は、それからこの出口の場所と干渉法を知る事が出来た。

軽い調子で肩を竦めながら言う俺に、上白沢さんはまた声をかけてきた。

「一つだけ……正直に答えてくれないか」

「……善処します」

「その事の神は、なんの為にこの人里に、いや、幻想郷に来る？」

「……何故、そんな事を？」

質問に対して質問に返すマナー違反な俺に上白沢さんは優しく、悲しそうな笑みを浮かべて、こう答えた。

「口調が少しおかしくなっているぞ？」

オマケにその事の神を酷く言う様は随分と辛そうだ。

……その神は、きっと救う為に来るのだろう？」

……伊達に教師をやってはいないか。

停戦がなったとはいえ、俺を送り込んだのはあくまである土地神の一派に過ぎない。

犠牲を出す事に納得しきれない神や退治屋だっているし、それらが幻想郷に敵愾心を抱いて来襲してもおかしくはないんだ。

俺はしばらく黙りこんだ後、ため息をついて仕方なしに応える。

「正直な所、その神が此方に来た所で中途半端に災厄を撒き散らした所で殺されるか、

さもなくば、こちらに来る前にスキマ妖怪に殺されるかの結末しかありません。

外来人の被害の軽減なんて出来っこない……ならせめて、俺の手で追い返したいんです」

「それでも、外の世界に属する君が行く必要なんてないんじゃないか？

……この里を守るのは私達の役目だ」

「殺さずに追い返したいんです……それには俺の方が適任です。

もし失敗したらその時は……いや、きっとスキマ妖怪がなんとかしてしまうでしょう。

この里には、なんの心配も要りませんよ」

反論する言葉を探すように黙りながら視線を落として行く上白沢さんを横目に、俺は魔法陣、いや、『門』への干渉を強める。

そう、この里には、理想郷で在るべき地には心配も、強すぎる恐怖^{オレ}も、必要ないんだ。

あの時、思考が真っ赤に染まった俺はこの里に恐怖を撒き散らしてやろうと思っていた。

思い知らせてやろう、自分達がどんな思いの上に立っているのか、そこにどれだけの恐怖があるのか、と。

真っ赤に染まった頭の中に無縁塚が浮かび上がる。

なあに、殺しはしない、ただ、それと——彼らと同じくらいの恐怖を、ここの全員に味あわせてやるだけだ！

しかし自己暗示で恐怖を抱いた所で、それを撒き散らすことはできなくなった。

——だって折角、俺みたいなの犠牲の上に築くんだったら、どうせなら良い家庭にして欲しいじゃないか——

頭の中の無縁塚、真っ赤な彼岸花の花の輪が乗せられたそれから、

そんな声が響いて来たような気がした。

真つ赤に染まった筈の思考が恐怖に塗りつぶされていく。

我と共に忘れていた……俺には怒りのままに力を振るう事などできない。

自身でそうしたいと確かに思っていなければ、如何に『恐怖の大王』の弟子と言えど、一時の衝動程度では容易く、扱うべき恐怖に押し流されるのだから。

思考が急激に冷えていく、

先ほど俺が自分に言い聞かせた通りなんだ。

幻想郷にせよ外の世界にせよ、彼らは意識もされない方が被害は少ないんだ。

納得なんてできっこない、でもそれだけで誰かの命を危険に晒す行動を取れる程、俺は馬鹿ではないし、そして勇敢でもなかった。

自己暗示を解き、落ちついて周りを見渡す。

人々が行きかい、偶にそこに妖怪も混ざっている。

恐怖しながらも受け入れ、敬意を払い、その関係は維持されている。茶店からは笑い声も聞こえてくる。

その店の前を数人の子供が荷物を持って駆けていく……ああ、あれが寺子屋の……。

そして、目の前を仲の良さそうな男女が幸せそうに話し合いながら通り過ぎていく、女性の方は赤ん坊を抱いていた。

……畜生、本当に、良い所だ。

「ハント、見せつけてんじゃねえよ」

「キヨウ君？」

苦笑して毒づく俺に、外来人の青年が心配そうに声を掛けてくる。全く、怯えながら心配とは、この人はお人よしだな、ホント。

「いえ……そうですね、それはとても素晴らしく、でも少し切ない。きつと皆は前者を取るべきで、それなら俺くらいは後者を拾っていききたいので」

「え、えと、それはどういう——」

「すみません、急用ができました。

お二人にはすまない、そして心配はいらないと……後、上白沢さんにはありがとうと伝えておいてください」

「ちょ、ちよつとキヨウ君？」

彼の声の背に受けながら、俺は走りだしていた。

もう、上白沢さんは何も言っていない。

そしてそれも既に目の前の『門』に集中している。

俺はこの力を知っている、俺なら、これを開けられる。

心の内でこの『門』の向こう側の彼に向けて言葉を贈る。

勿論、届きなんてしない、只の自己満足だ。

でも、そうしなければ俺が折れてしまうような気がしたから、ただ、念じる。

怒りも憎しみも理不尽も正当な義憤も、蹂躪してでも人を守るのが恐怖の本意。

でも貴方はきつと守る事より救う事を選ぶのでしょうか。

見向きもされない誰かの為に幻想郷中を敵に回して戦うでしょう。

俺が正しいかは分かりませんが、でも貴方がこの人々を不幸にしたなら、それを悲しんでる姿しか想像できないんです。

そして、できる事なら貴方にその『道』をこっちは使って欲しくない。そこを通るだけで人を不幸にしてしまう貴方が、それを避ける為に作り上げたこの『道』を。

師匠と、俺も協力して作り上げたこの『道』を。

かつて、共に肩を並べて、人の為に戦った貴方には。

やがて門が音を立てて二つに割れる、その隙間の向こう側には見渡

す限りの赤褐色の空と砂礫の舞う荒野が広がっている。
驚いた表情を浮かべる慧音に少年は再び声をかける。

「それでは上白沢さん、外来人だった人たちの事は、宜しく願います。」

それと、藤原さんは良い方ですね、ずっと貴方を傷つける事を恐れていました……重ねて、謝っていたとお伝えください」

その少年の表情はとても寂しそうに見えた。

「監視役君——」

慧音はいつそ彼を引きとめてしまいたい衝動に駆られる。

もういいじゃないかと、停戦はなっただから、幻想郷の住人になつて人里に住めばいい。

強力な妖怪退治屋で、物腰から察するに外来人の例にもれず、ちゃんとした教育も受けてきているのだろう。

何より、彼はきつと、とても人が好きだ。

里の皆に頼りにされ、尊敬され、愛される、そんな存在になれる筈だ。

……でも、そう言ってもきつと彼を困らせるだけだろう。

彼女が何も言えずにいる内に、『門』と監視役は消えていた。

理想郷で在るべき地（後書き）

葛藤の表現は難しい。

この続き物は次話で終わる……かは微妙です。

崇り神は救えず

事の神は一般に一つ目だったり、片足だったり、そんな姿をしている事が多い、

鍛冶の神もまた隻眼である事がよくあるが、これは灼熱の金属を裸眼で捉えざるを得ない昔の鍛冶屋は常に失明、視力の低下に悩まされてきたという事を背景としている。

恐らく事の神の姿は……。いわゆる奇形児や疫病によって失明した者の姿を災厄の象徴として生まれたものであろう。

ある集落に生まれたその男は、恐らく、恵まれていた。

生まれつき体に不自由を抱え、顔も片目は塞がり醜く歪んでいた。それでも、その男の両親は人格者であった。

彼らは子に愛情を注ぐのは勿論、彼らを敬愛する周囲の人間達もその男には優しく接していた。

……その瞳に恐怖を垣間見せながらも、他の人間に対する以上にその男はそれが幸せな事だと理解していたが、同時に何故か無性に我慢ができなかった。

ある日を境に、彼は周囲の人々に脅しをかけ始めた、自分のこの『病』は移るぞと。

元々、心の奥に彼に対する恐怖を抱えて周囲の人々はすぐに彼の周
りから離れ始めた。

男は笑っていた、それ見た事か、口では綺麗事を並べても実際は自
分が恐くて仕方ないのではないかと。

両親の諫めの言葉も聞かず、男の行動はエスカレートしていった。
寄って来て欲しくなければ、アレを超越せコレを超越せと要求し、
わざと人の集まる場所に赴いては脅して追い払うなどしていた。

彼はついに両親からも愛想を尽かされ、その集落から追放された。
そうなってもやる事は変わらず、
周辺の他の集落や村を訪れ、自分に近寄れば人をこும்醜くしてし
まう『病』や『災厄』が移るぞと脅して回った。

彼が来ると聞けば、人々は時に火を焚いて追い払い、時に物を差し
出して帰ってもらえるようにした。
これは、それだけ彼の姿は恐怖を煽るモノだったという証明でもあ
った。

やがて彼が人知れず野で死んでも、人々は彼をいつ来るかいつ来る
かと恐れ続けていた。

そんな彼への恐れが月日を経るにつれ、数ある『事の神』の伝承と
結びつき、

彼もまた畏怖を集める、一柱の『事の神』と化す事になる。

厳密に言えばその事の神は『彼』ではなかった。
彼を基にして複数の『事の神』が混同され、同一の畏怖と言う信仰
の対象として顕れたモノであった。

最も強い畏怖を集めていた彼が人格の基盤となったものの、疫病や災厄への恐れ、そして偏見の強い時代の多くの忌み嫌われた者達の思いもまた、そこに加わっていた。

彼にはそれなりの信仰が集った。

災厄を齎す神として、様々な集落や村で追い返された……火等で追いつかれるか、神輿や供物と共に担ぎ出されていくかの違いはあったが。

彼はそれに以前の様な痛快さを感じなくなっていた。

ただ淡々と、神として信仰によって持たされた習性のまま、人の下に赴いては出ていくを繰り返していた。

彼が出没する周辺地域には彼の齎す災厄を恐れて、妖怪もあまり寄りつかなくなっていた。

その事から、彼は守り神としての信仰も集め、人々は彼を敬い、機嫌を取った……彼が自分達から離れないように、そして自分達に近づかないように。

彼はそれでも淡々と、神として信仰によって持たされた習性のまま、人の下に赴いては出ていくを繰り返していた。

長い年月が経ち、多くの神や妖怪が忘れ去られる中でも、

事の神を追い返す数多くの『コトガミ送り』の儀式が風習や一種のレクリエーションとして残り、共に事の神への信仰も根強く残った。

それでも人々の前へ直接姿を現す事はなくなった彼は何もせず、ただ静かに風化していくだけの日々を過ごしていた。

そんな彼の下に一人の少年が訪れるまで。

一人でやって来た、まだ幼いその少年は見るからに怯えていた。事の神はかつての人間だった頃の周囲の人々を思い出した、同じような目をしている。

ただ違う点を上げるならば、幾ら脅した所で決して離れようとはしなかった事だろうか。

「だ、大丈夫です……『厄』や『疫病』は俺を恐がりますから影響はありません……多分」

「た、確かに貴方は恐いですけど……あ、いや、そのごめんなさい顔が、その、アレとかそういうのじゃなくて、

いや、無いつて言ったら嘘になるけど……でも、その、なんというか、神様だからというか、その、あの……」

「でも……俺よりも貴方の方が恐がってるのが分かりますから……誰かに恐がられる事を恐がってるのを。

あの、貴方の事を恐がらないでくれる人に、あ、人じゃないけど……心当たりがありますから、会ってみませんか？

あ、お、俺もきつと、そのうち大丈夫になりますから……そしたら、貴方も恐がらないで、俺とお友達になってくれますか？」

涙目になりながらも『恐怖を共有する程度の能力』を持つ少年は必死に事の神に関わろうとした。

その少年の姿に事の神、いや『彼』は初めて知った。

自分が人に我慢できなかったのは人に恐がられる事だったと言う事と、

かつての自己の周囲の人々の、恐怖を抱いて尚、気にかけてくれるその思いがどれだけ有難いモノだったのかを。

そして、今一度、それを向けてくれるこの少年はきっと自分にとって救いになると思った。

そして事の神は答えた。

良ければ、恐がりながらも、友達にならないかと。

そして、その出来事がやがて、その事の神に人々を救う道を歩ませる事になる。

『道』の中、一柱と一軍は対峙した。

身長は2メートルを超えるか、異常に盛り上がった筋肉に長い腰蓑一枚の服装、醜く歪んだ顔を隠すように包帯を巻き付けた隻眼の事の神は、包帯の上からでも分かるように顔を怒りに歪ませ、
地上と空中、合わせて三千余騎と五千強もの軍勢を従えた恐怖の駆

り手は一騎、一際精巧なヘルムの内に表情を隠して。

「恐怖の駆り手よ、お前は分かっているのか？」

……私には聞こえていたぞ、『門』の向こう側の声が、自分達の平和の礎に一瞥すらくれようとする者どもの声が」

「誰かの犠牲なしに得ることのできぬ平和……ならばせめて、そこは恐怖も不安もない理想郷であってくれと思いはしませんか？」

「……本気で言っているのか？」

お前が、誰よりも妖怪に襲われる恐怖を知っているお前が、それが報われすらないのを認めるのか？」

報われぬ恐怖からの救済とてお前の役目だろう」

「そも何が報いかなど、俺には分からぬ事です。

そして……恐怖の役割は救い以上に守護にあります」

事の神が姿勢を低くし、一万近い軍勢に対し臆する気配すら見せず、その四肢に力を込める。

「……これ以上、話していても無駄だな。

ならば、致し方なし……か」

赤褐色の空に暗雲が顕れ、砂礫が舞っていた筈の周囲には軍勢を呑みめる程の『厄』が立ち込める。

「よく見ておけ！一柱の神が本気で祟るとはこういう事だッ！」

叫びと共に事の神は軍勢に向かって地を駆け、突っ込んでいった。

例えるならば、それは『恐怖』と『災厄』の戦争であった。

戦場に振り続ける『厄』の籠った雨は強力な酸の様に軍勢の武装を溶かし、

立ち込めていた『厄』は集まって紫色の激流となり、軍勢を押し流して行く。

そして何より、走る足を止めず、腕だけで軍勢を蹴散らして行く事の神自身こそが『災厄』と呼ぶに相応しい脅威であった。

数名の兵が槍衾を組んで迎え撃とうとすれば、その内の一本の槍を引っ掴み、逆に振りまわして崩し、

突撃槍を構えた騎士が目前に迫れば、それを交して足を薙いで転ばせ、後続ごと動きを止める、

そうして恐怖の駆り手へとその足を進めていく。

『恐怖』の軍勢とてただでやられている訳ではなかった。

雨に溶かされようと、激流に四散しようと、事の神に打ち砕かれようと、元の黒い霧に戻り、少しずつ再生していく。

大盾を構えた兵が天蓋を作って雨を防ぎ、時にチャリオットに乗る兵達が密集し、激流をも引き裂く突撃をかける。

そしてそれら兵の武器は少しずつではあるが、事の神を捉えていた。物理的な威力では事の神の皮膚に傷を付ける事さえできないが、それでも着実に、文字通りその『恐怖』で心を突き刺していた。

僅かな兵と共に戦場の最奥で仁王立ちしている『恐怖の駆り手』から発せられる恐怖により、雨も激流も、彼の周りだけは避けて通っていた。

また、その恐怖も事の神の心を確実に蝕んでいく。

我慢ならない、何かが我慢ならない、その激しい憤りが事の神の戦意を支えていた。

事の神と恐怖の駆り手の距離が縮まっていく。

不意に戦場で荒れ狂っていた『厄』の激流が恐怖の駆り手の頭上高くに集結し、巨大な滝となって降下して行った。

しかし、それでも『厄』は『恐怖』を超えられない。

恐怖の駆り手を中心に、見えない半球状の壁にぶつかったかのように滝は裂けた。

滝の中からでは、周りは紫の『厄』以外何も見えない。

球の中にいて流されずに済んだ数名の兵達が恐怖を駆り手を中心に円状の隊形を取った所で、

恐怖の駆り手の正面の滝を突っ切って、事の神が姿を現した。

そのまま、いきなり兵達を飛び越え、恐怖の駆り手に殴りかかる。恐怖の駆り手は手にしていた長剣でそれをなんとか防ぐが、剣はその一撃だけでひび割れ壊れて霧散した。

しかし、事の神も追撃を加える事は叶わない、周囲の兵達が手に持った槍を一齐に投擲する。

腕の一振りですれらを弾く事の神だったが、兵達も弾かれた槍をそれぞれ宙を駆けて受け止め、そのまま事の神に突きかかる。

それに対して事の神が迎撃しようと構えを取りなおした所で、その視界の全てが紫に染まる。

滝が正常に落ちている、これの意味する事は恐怖の駆り手がこの場から退いた事で――

「蹂躪せよ」

事の神が状況を把握する前に、恐怖の駆り手の静かな、されど重い号令が響く。

空中に円錐状の陣形を組んだ騎士達が、その数と勢いを頼りに滝の中の事の神目掛け、突撃を仕掛けていく。

――そして、事の神の心は折られた。

軍勢と『厄』はその主たる一人と一柱を残して姿を消した。

既に戦意を喪失し膝について呆然としている事の神の下へ、武装を解いた恐怖の駆り手が歩みを進める。

事の神はそれを視界に捉える、

——他の誰かじゃなかったから、ですか……そうですね、毎度そう前向きに考えられたら良いんですけど——

事の神は彼の言葉に救われて、同じように人を救う道を選んだ。

だが、心の内で彼に妖怪退治屋としての道を歩んで欲しくなかった。自分を救ってくれたあの子が何か別の存在になってしまふような気がして。

だが、その心配は間違いだった。

——え？前向きでしょう？他の誰かじゃなくて、自分が不幸を受けた場合ですよ……俺はどうしてもまず後者から捉えちゃいそうで

彼の本質は臆病者から変わらない。

ストレスからの肉体への影響、恐怖による思考の切迫等、悪影響を心に仕込んだ術式で封じ込めつつ、

恐怖を用いて戦う彼には、それを捨てることなど、できなかったのだから。

だからこそ、『恐怖』を良く知る彼は無意識に怯えていた自分を救ってくれたのだろう。

……最も、彼自身に救いの自覚などなかったらうが。

彼と目が合う。

決して不動の意志などではない、覗く者を巻き込まんばかりの恐怖

の激流を宿す——どこまでも怯えた瞳と。

あるいはあの時の自分も同じような目をしていたのだろうか。
まるであの時と逆ではないか、怯え竦む事の神と、より怯えている
くせに強がる少年と。

ふと恐怖の駆り手の目に悲しみの色を見て、事の神は気づいた。
自分が何に我慢できなかったかに。

恐怖の駆り手は幻想郷の監視役だ。
ただ救って行くだけではどうにもならない事があったのだらう。
事の神が我慢できなかったのは、彼が自分の行く手に立ちふさが
る事ではなく、
彼が自分の行く手に立ちふさがらなければならない事だった。

救っていくだけではないけない立場。
何故そんな所に彼が立たねばなんのか、それがどうしても我慢で
きなかった。

片膝を立てたまま、片足を地に就く。

彼にとって、外の世界の妖怪退治よりもそれはきつと辛い事だらう。
ならば、その立場を奪い取って救ってやればよい。
彼にとって代わり、幻想郷の人喰い妖怪達の恐怖の対象として留ま
ってやるう。

嫌われ者の神となるであらうが、自分はそれに慣れている。
人を救えない事についても、彼よりはずっと――

咆哮を上げながら、立ちあがる。

そうすれば、彼を家族や友人の下に戻してやれる。

外の世界に戻っても平和な日々を送ってくれる訳ではなからうが、彼にとっては今よりマシな筈だ。

拳を握り、彼へと襲いかかろうとする。

そうすれば……そうすれば、かつて彼がそうしてくれたように、自分も彼が救えるのだ。

『誰か』を救う力が自分にはない事など分かっていた、ならば自分はきつとこの為に――

しかし、既に事の神の心は折られていた。

正直、驚いた。

まさか彼があゝの状態から立ちあがってくるとは思えなかったからで

ある。

だが、それだけだ。

振りあげられた拳は俺に下ろされる事はなかった。

目の前で震えるだけの拳を、そして恐怖をこらえる彼を俺は無言で見つめる。

やがて彼はまた膝をつき、今度こそ立ちあげる事はなかった。

「■■……お前は……」

「——あ」

随分と久しぶりに聞いた自分の名前。

目の前の彼から発せられている筈のそれは、何故だか、随分と遠くから響いてくるように感じられた。

崇り神は救えず（後書き）

終わりませんでした。

……ガチ戦闘の描写、ちょっとダイジェスト風味すぎたでしょうか。

選択肢

事の神と恐怖の駆り手の戦いの一部始終を『道』の中で離れた場所から、二人の妖怪が見物していた。

やがて、決着がつくと、スーツ姿の中年男性の妖怪、綾川元が口髭を撫でながら呟く。

「……ふむ、予想通り、彼はどこまで行っても祟り神だったか。もっと楽しみを持たせる物語を期待していたのだがね」

「随分と冷たい言い様ね……それより、貴方どこから入って来たのよ？」

全く非難する風はなく、むしろ納得したように応えた女性の妖怪、八雲紫は少し怪しむような様子で後半の質問を付け足した。

「そこに物語が在れば、私はどこにでもいるよ。」

……忘却の園だろうが、祟り神の通り道だろうが、0と1だけで表現される世界だろうがな。

しかし、君がその台詞をいうかね」

さも当然、と言った様子の元に対し、紫もまともな回答を期待していなかったのか、ふうん、と息を漏らしただけだった。

「もうひとつ質問……なんで私に協力してくれたのかしら？」

あの事の神に色々と情報を流して煽り立てたのは私だけど、陰で色々とやりやすいようにしてくれてたでしょう？」

「そうだな……君の計画が上手くいけば死ぬ人間も減る事になるだろうからな。」

それに、あの神がどという物語を作るか……私の予想などよく外れるからな、確認しようと思ったのだ」

「あら、いつから『怪談の牧者』は人間の守り手になったのかしら？」

「人間が多ければそれだけ恐怖や不安の絶対値だって増えるじゃないか。」

私はより多くの人間に恐れ、迷い、苦しんで欲しいだけだよ。

……我々妖怪がわざわざ何かせずとも、彼らは勝手にそれを見出し、抱く。

つまり、量を増やしたければ、数を増やしてやればいいだけだからな」

元の応えを聞き、紫はため息をつく。

彼女に言わせれば、外の世界の妖怪はどいつもこいつもどこかがぶっ飛んでいる。

実力は兎も角、『恐ろしさ』という点では幻想郷の妖怪達より平均値はグンと高い。

彼、『怪談の牧者』とて例外ではない……彼は人を苦しめたいので

はなく、ただ純粹により多くの人に苦しんで欲しいだけなのである。退治屋との対立を避けているのも、時に他の妖怪と対立するのも、全てはその為の手段……少なくとも幻想郷にはないタイプの妖怪だ。そんな彼は幻想郷にとっての危険因子でもあるのだ。能力を使えば彼の考えを探る事も出来るだろうが……下手に突いての藪蛇も避けたい。

これだから得体の知れない相手は……。

幻想郷の住人が聞けば、口を揃えて「お前が言うな」と言うであろう事を考える紫に対し、今度は元が質問をした。

「で、どうする？一応、お誘いをかけるのかね？」

「ええ、一応ね……流石にまだ応じてはくれないでしょうけど」

「やれやれ、さっさと計画の全容を話してしまえば協力してくれるだろうに。」

私としては現状の彼の苦しみは中々好みだからどちらでも良いが」

「アレで人の犠牲が減るのはあくまで副次的結果、目的は幻想郷の外への依存度の低下……その所を納得してもらわずに協力されても困るのよ。」

彼には、予め、この幻想郷を受け入れてもらわないと」

「彼を新たな『恐怖の大王』にしてしまうなら一緒だと思うがな。アレを御しきろうと言うのが無理という話だ」

「忌々しいけど……力に関しては鬼に取って代わる、現代最強の種族と言っても良いのは認めましょう。」

でも、あの人間の傲慢の象徴を御しきる必要は無いわ。

必要なのはその能力だけ……『恐怖の大王』にすると同時に彼を機能として加工してしまえば何の問題もないでしょう」

ぞつとするような恐ろしく、そして美しい笑みを浮かべた紫はそのまま、不意に顕れたスキマの中へと歩み、消えていった。

残された元はやれやれ、と言うように頭を掻く。

恐らく、彼女は傷ついた彼の心につける様な甘い誘いをかける事だろう。

幻想郷の存在となってしまうえば、その営みの一部として人を救う事も出来る、

土地神達と幻想郷の停戦はもうなっているのだ、彼一人、幻想郷側に移った所で何も変わらない。

人の里を護って戦った今、彼はこの理想郷の住人なっても居場所に困る事は無い。

大方、そんな誘い文句か。

彼が応じる訳は無い、だが、心の遅効性の毒を仕込むように様に、後からじわじわと効いてくれば、とでも思っているのだろうか。

「恐怖は彼の味方であり、揺らぎは彼の力なのだ。」

恐怖に生かされている妖怪がその力の源に乗りようなどと、傲慢はどちらであろうな。

……ククッ、まあもつとも、私がそれを言うかね、という話だが」

そう彼が呟くと同時に一陣の風が砂礫を巻き起こす。それが収まった時、既に彼の姿はそこにはなかった。

突然だった。

膝をついた事の神の姿は、その足もとに顕れた黒い切れ目へと落ちていき、反射的に近寄って手を伸ばそうとした俺の目の前にはまた他の切れ目が顕れ、

「お疲れ様……移送くらいはやっておいてあげるわ、悪いようにはしないから、安心しなさい」

妖怪の賢者、八雲紫がそこから姿を現した。

……こうして会うのは停戦条約締結の時以来か。

俺はゆっくりと姿勢を正し、その間に思考を巡らせる。

……やはり見ていたか。

彼の事は心配だが、大妖怪は滅多に嘘を付かない……信用して問題ない筈だ。
それに――

「それはどうも。

……彼の対処を俺に任せてくれた事に関しても、礼を言います」

『道』は幻想郷では無い、よって条約も何も適用されない。

幻想郷に攻撃を仕掛けようとした彼に対し、俺が追い払おうとするのに割り込んで殺害する事だって彼女にはできたし、そうする方が利は大きかったろう。

その上でそうしなかった事については、ただ面倒だったのか何か意図があったのか、どちらにせよ、ありがたい事だ。

……人喰い妖怪相手でも礼は言わねばな……捻くれた言い方になるのは俺の未熟さだ。

「……どういたしまして、という程の事でもないわ。

ふふ、貴方相手じゃ藍を遣いにする訳にもいかないし、直接見にくるしかなかったのよ。

嫌みの一つでも言っただろうと思っただけだ……随分と疲れた顔してるわね」

俺の礼の言葉を受けて、何故だか少し考えるように間を空けたが、それでも浮かべた笑みを崩すことなく、応えてくる。

「まあ、気持のいい仕事じゃなかったですからね……」

先ほどの戦いを思い出す。

意志を恐怖で蹂躪する……例え人喰い妖怪相手だったとしてもあまり楽しい行為ではないが――

「ねえ――」

「それでも、俺は嬉しくもあるんですよ。

『恐騎来寇』は始めからある程度の犠牲を容認したモノでした。

誰もが諦めた誰か、その為に一人、一柱でもこうしてやって来てくれた事が。

……俺が言っても戯言ですがね。

それに幻想郷の皆さんには悪いと思わなくてもないですが……それでも。

——ん？……何か言いかけてました？」

「……いいえ、ただ笑顔はもう少し嬉しそうに浮かべるものよ？」

やはり少しの間を空けた後、何やら大げさなため息をついた彼女は苦笑を浮かべてそう指摘した。

「これは不覚……俺もまだまだ未熟ですな。

さて、彼が居ない以上、ここもすぐに崩壊します。

八雲殿もすぐに戻られるよう、それでは」

俺は口早にそう言つと騎馬を作り出し、それに跨つてその場を逃げるように後にする。

……いや、実際逃げたと言つべきか。

……いかな。

相手が人喰い妖怪でなければ弱みの一つでも見せてしまつていたかもしれない。

少し疲れているようだ……さつさと戻ろう。

俺が『門』辿りついた時には『道』の崩壊に伴い、その出る場所が変わっていた。

これは正直有難かつた、今はあまり、誰にも会いたくない。

そんな俺の気持ちに応えるように『門』を抜けたその場所は無縁塚のすぐ近く。

ただ単に不安定な境界に呼びこまれたただけだろうが、俺にはそれが彼からの救いのように感じられた。

小屋の前で騎馬に跨つたまま、ふと空を見上げる。

……外の世界じゃお目にかかれない、綺麗な星空。
まさしく理想郷のそれとして相応しい。

「師匠ならどうしたかな？」

彼のように誰かを救おうとしたらうか、
俺の様に妥協を選んだらうか、
それとも、全てをひれ伏せさせて本当の理想でも成し遂げただらうか。

「いや……ホント、どうだろうな」

少し昔の話だ。

俺がある程度の力を付けて来ていた頃、
俺は海外の紛争地帯に飛び込んで行こうとしてた。
俺のこの『恐怖を駆り立てる程度の能力』で戦いを止めてやろうと。
馬鹿な話だ……隠れた戦い以外でこんな能力を使えば人々に幻想の
存在が認められ、妖怪の勢力が盛り返しかねないし――

――駄目だ、力と恐怖で押さえつけるだけでは戦いは終わらないんだ――

そうだな、師匠もそう言ってたっけ。

——恐怖で何かを押しつけければ、例えそれが平和でも、その者は暴君として歩むしかなくなる——

師匠がそれを言うな、と反発したが、今思えば師匠だからこそその台詞だったかもな。

——私は、お前にはそんな道を歩ませたくない——

それこそ師匠の生き様そのものであった様にも思えるが、
だったら、師匠は俺には何をさせたかった？どんな道を歩ませたかった？

「はあ、馬鹿だな俺は」

あの時の師匠はただ俺に間違った事をさせただけ、
道なんて俺自身で選ばせるに決まってるじゃないか。

…… 本当に疲れてしまっている。
早く寝よう。

明日には上白沢さんや藤原さん、それにあの外来人、（シュウトさんだったか）にも元気な顔を見せに行かなきゃいけない。

その夜、俺の落ち込んだ気持ちを感じ取ったのか、人喰い妖怪の気配が幾つか小屋の外に感じられた。

結局、何もせずに去って行ったが……正当防衛と言つ名の八つ当たり
の為、襲つてきてくれるのを期待している自分に、更にもう少し
だけ、落ち込んだ。

選択肢（後書き）

少し短いですが、これにて人里編、とりあえずの終了です。

更新遅れて申し訳ありません。

先の個人的問題は解決したのですが今度はレポートラッシュが迫ってきておりまして。

以前のような更新速度に戻るのは大分後になりそうです……。

そんな状況な自分と東方恐騎行ですが、次話もお付き合い頂ければ嬉しいです。

氣遣いの在り様

妖怪の山・天狗の里

「……ふむ、暇つぶしにでも思ったが……良い加減飽いてきたな」

護法魔王尊に仕える鞍馬の天狗達の首領、鞍馬山僧正坊。

天狗随一の武芸者として名高き大天狗である彼は、ある故あって幻想郷の天狗の里へ出向している。

そんな彼が朝っぱらから行っているのは勿論武芸の研鑽……ではなく、部屋にこもっての新聞の編集作業である。

当初は暇つぶしに軽い気持ちで発行していた物だが、予想以上に受けがよく、今更「飽きたんで止めます」とは言い辛い状況に陥ってしまったのである。

というのも、元々は排他的な天狗の里、如何に同じ天狗、それも武名高き大天狗だろうと、そこに所属していない彼がすんなりと受け入れられている訳ではない。

天魔は今でこそ派手な動きは起こさないものの、人を墮落させる魔性であり、護法魔王尊は同じ魔の字は冠するが、人に味方する尊格であるのもこれに影響している。

それでも彼が里の天狗の好意は兎も角、敬意を得てこの里に留まっ

ていられるのは、彼の實力と学識、そしてこの新聞に対する評価も影響しているのだ。

個人的な感情という事ならば、他者の評価などあまり気にしない僧正坊であるが、この里に留まるのが今の彼の任務。

それを果たす為に有効となれば、流石に面倒だと切り捨てる訳にもいかないのである。

彼は長机の上に乱雑に置かれた資料に目を通しながら——不意に誰かに話しかけた。

「……そう言えば天文にも妙な動きがあったな、あの泣き虫関係の事か？」

「はい、特に大事に至る事はなかったようですが……少し心配になりました」

それに応えるのは姿なき、部屋全体に響くような声。

僧正坊は資料から目を上げることなく、鼻で笑って会話を続ける。

「少し心配、か……それでこの天狗の里まで忍び込むとはな」

「天魔殿の許可は取り付けてあります、問題ないかと」

「……やれやれ、何かあったら苦勞するのはワシだぞ。」

まあ、よい……で、何があつた？」

「一時期『恐怖の大王』と行動を共にしていた件の神ですが、幻想郷に乗り込もうとしたらしく……様子を見るに、どうやら――恐怖の駆り手に撃退されたようです」

言葉が一瞬詰まったが、それは恐らく、外の世界に縛られている恐怖の駆り手の名前を思い出せなかった為であろう。

そのような様子は気に掛けず、僧正坊はやはり資料から目を上げないまま淡白に返す。

「そうか、また損な役回りだな……それで？」

「……そういう反応は予期しておりました。

特にどうと言う訳ではありません、ただ報告に窺っただけです。そして、それとは別にお問い合わせが一つあるのですが、彼に手土産を届けては頂けませんか？」

折角、幻想郷なる地にいるのだから、外の人の法を離れて酒くらい――」

「お前は修行の後も度々人喰い妖怪退治でアレと行動していたな」

「……はい、今回は某の顔を立てると思い、少しばかり気遣いを……」

……」
ここで初めて僧正坊は資料から顔を上げ、ふうとため息をつく。

「ふん、ワシを丁稚扱いとは偉くなったモノだな。
構わん……一時とはいえ、弟子にしたのだ、張った気の緩め方く
らい教えておいてやろうと思っていた所だ。
そのついでに、ならばな」

束の間の後、僧正坊はそう応えた。

「礼を言います。」

……時に僧正坊様？」

「なんだ？……稽古でも付けて欲しいのか？」

「いえ、それは全力でお断り致しますが……。」

……それ、本気ですか？」

「それでは分からん、ハッキリ言え」

「その新聞の原稿……隅に『鞍馬山僧正坊、弟子募集中』と見える
のですが」

「おう、最初の内は盛況だったけどいつもこいつも長続きせんでな、
こうしてまた募集しているのだが……。」

全く、鞍馬の天狗や遮那王の様にはいかずとも、せめてあの泣
き虫の程度に逃げ出さないくらいの根性は欲しいモノだ」

ため息交じりの僧正坊の声に対して、
少し、というにはいささか長い沈黙の後、部屋に響く声が応える。

「幻想郷は今平和です。

強くなっても、それで何をするか。

明確な目標も無しにアレに耐えろというのは大分無理があるかと
……。

大体、そんなものはスペルカードルールの下ではあまり意味を成
さないでしょう」

「そうか……いや、そうであろうな」

どこか落ち込んだような様子で肯定する僧正坊であったが、不意に
顔を上げ、

「よい、ならばやはり、あの泣き虫の面倒でも見に行こう……うむ、
丁度良い」

と、気を取り直した様子で言い、目の前の長机の上の道具を片づけ
始めた。

そんな彼の様子を神通力で窺っていた部屋に響く声の主、ある鞍馬
の天狗は不安に襲われていた。

……人選を間違えたかも知れん……許せよ。

すぐにでも戻らねばならぬ我が身を呪いながら、名もなき天狗は恐怖の駆り手に謝罪した。

その夜

無縁塚へと至る道、常であれば外来人に恐怖される人喰い妖怪達が、逆に恐れ、姿を伏せていた。

「ここまで来たのよ、もう退けない……平気、平気よ、あれくらい」

ブツブツと呟きながら道に行くのは紅魔館の当主、レミリア・スカ
ーレットである。

紅魔館の当主として、あの無礼な『恐怖の駆り手』に一度借りを返しておかねば気が済まない。

レミリア・スカーレットとして別の『借り』がある事もまた、その苛立ちを強くしていた。

共を付けずに来たのは、彼女なりの「恐がっていない」という主張と「見つとも無い所を見せてしまいかも」という本音が入り混じった結果であるが、

当人は無自覚のまま飛ばずに歩いて来てしまったのは、明らかに心の準備を整える為の間作りである。

道の向こう、月明かりの下、遠目に塚と小屋が見えてきた。

レミリアは一旦足を止め、目を閉じて己のやるべき事を確認する。

まずは勝負を申し込み、兎に角コテンパンに負かす。

その後は、膝を付かせた彼の前で余裕たっぷりな笑みを浮かべて、

「そうね、貴方には別の借りもあるし……今回は特別に許してあげましょう」

と言ってやるのだ。

頭の中で何度かその絵面を思い浮かべて呟いて練習した後、いざ向かわんと目を開けた所で――

「珍しい所で見えるな、吸血鬼か？」

ああ、そうだ、監視役ならば留守だぞ」

不意に背後から話しかけられた。

「きゃあッ!？」

「あゝ、すまんすまん、驚かせるつもりは無かったのだが――」

驚き、つい声を上げてしまったレミリアに対し、声の主――大天狗、鞍馬山僧正坊はその見事な顎髭を撫でながら応えてくる。

「――こんな所で会えば少し勘ぐってしまうのだ。

有象無象ならば兎も角、吸血鬼ともあるう者が、幻想郷と外の約条を破り監視役を喰い殺さんとするなどと、

あり得ん事だと分かつてはいるのだがな……」

声に静かな殺気が籠る。

一度は驚いたレミリアであるが、流石というべきか。

密かに様子を窺っていた人喰い妖怪達が逃げ出すようなそれを受け、余裕の笑みを浮かべて対する。

「あら、そうやって老いると神通力も鈍るのかしら？……でも謝ることじゃないわ。

私の方こそ、貴方が天魔の命で彼を天狗道に墜としに来たのかも、とかあり得ない事を考えているのだから」

ピリピリと緊張した空気が辺りを支配する。

――しばらくして、先に緊張を解いたのは大天狗の方だった。

「ワシは天魔殿の部下ではない。
護法魔王尊様の部下……と言っても通じるかどうか分からぬが、
人の敵ではない」

ため息を付き、殺気を納めた僧正坊に対し、レミリアも演技の笑みを引っ込めて、不機嫌な様子で応える。

「貴方が何処の天狗だろうとどうでもいいわ、それより、監視役が留守って？」

「人里に出ているようだ……カラ元気を振りまいて、そろそろ戻ってきてそうだが。」

……今度は此方が聞こうか……何をしに来た？吸血鬼」

「少し痛い目に遭わせに來ただけよ。」

別に殺そうって訳じゃないわ、勝負して、膝を折らせたいだけ」

「……ワシも似たようなものだが……。」

しかし、勝負と言ってもどうする気だ？」

「どうするって、そりゃスペルカード——あ……」

「うむ、恐らくアレは決闘法なんぞ知らんと思うぞ。」

まあ、その場で何かしらのルールを決めて戦うしかないだろうな。
アレは今弱っている、叩きのめすなら今が好機なのは確かだ」

この言葉を受けて、レミリアは黙り込む。

監視役が弱っていると聞いて、喜んでいる自分もいれば、それに憤慨し、全力の彼を叩き伏せねば意味がないという自分もいる。

果たしてどのような反応を示すべきか、考えていたのだ。そんな自分の様子を見て、大天狗が顎髭を撫でる動作で口元を隠しながらニヤニヤしていたのにも気づかずに。

「まあ、実際その目で見てから決めた方がよからう、ここはワシに任せておけ」

自分の考えが纏めきれない所に、自信満々の様子での提案。レミリアは流れのまま、僧正坊のそれに頷いた。

「——はあ」

上白沢さん達に無事の報告をする為に向かった、人里からの帰り道。騎乗のまま、俺は何度目かも分からないため息を付いていた。

俺だって一度は人里で恐怖感染を使いかけたって言ってるのに、上白沢さんも藤原さんも、なんだか負い目みたいな感じてるばかったし……。

……いつそ悪役でも演じるべきだったか？

それはそれで問題だな、退治されても困る。

大体、なんで俺がこんなに氣遣われる事になってるんだ？
普通に考えて俺は幻想郷の敵だろう。

俺はこんな益もない考えを、やがて小屋に辿りつき部屋に入った後も、座り込んで続けていた。

上白沢さんは偶にこちらに来るような事を言っていた。

小野塚さんに、森近さんに、紅魔館の妹君に……氣づけばやってくるお客さんも増えている。

……いや、だからなんだ、俺は外の世界に所属している……それは決して変わらな——

——よく見ておけ！一柱の神が本気で崇るとはこういう事だッ！！

——でも、確かに、彼とは戦ったが、俺は……。

……いつそ幻想郷の皆が、俺を嫌ってくれれば……そんな馬鹿を言えば今度こそきつと彼に殺されてしまっただろうな。

幻想郷の許容性が俺には少し恨めしい。

……何か温かいモノでも飲もう。

そう思つて顔を上げた所。

目の前に顔があった。

青白い髪の毛に白い肌、引き込まれるような紅い瞳――

「どわああア!？」

「……ヒトの顔を見るなり、失礼ね」

そうは言うが、いきなり目の前に吸血鬼が現れれば驚かない方がおかしい。

いや、おかしいのは――

「如何にワシが気配を隠したとはいえ、傍らに吸血鬼がいて気付かぬとは、緩んでいるぞ」

「あ、僧正坊さ――マッ!？」

声のした方を向いてみれば、もうそこまで握りこぶしが迫っていて、俺は状況を判断する間もなく、部屋の入口の方へ頭を向ける様に殴り倒された。

「これしきの挨拶もかわせんとはな、思ったよりは重症か」

「……挨拶をかわすって多分そういう意味じゃなかったと思うけど……」

「む、知らんのか、鞍馬山ではな、これが普通――」

うつ伏せに倒れた俺は鼻を押さえたまま、ただ戸惑っていた。

僧正坊様と紅魔館の当主殿か……いや、どういう組み合わせだよ！？
いきなり殴られたのは、まあ、僧正坊様だからとして、何故彼女が

「仮にも天狗随一の武人が、そう軽く嘘をつくなよ、僧正坊」

新たな声が聞こえて顔を上げて見れば、

「な、ナズ様？」

「……奴め、ワシに様子見を頼んでおきながら、お前の所にも行っていたのか」

「2、3発殴ってそれっぽい事言って終わりにしかねないから、一応見てきてくれてね。」

「……その通りの展開のようだけど」

「待て、まだ一発しか殴つとらんぞ」

「……まだってなんだよ、まだって」

「……なんだ？一体どうなってんだ？」

完全に場についていけなくなった俺を置き去りに、僧正坊様とナズ様の口論は続く。

「そもそも鼠、お前は過保護なのだ、コイツはもうあの泣き虫小僧ではない」

「その泣き虫小僧時代だって殴ってただろう！？そもそもっていうなら大体——」

「ちょ、ちょっと、私を置いてけぼりにして話を進めないでくれな
い？」

「一体何の話をしてるのよ？」

体を起してみれば、丁度、当主殿が戸惑いながらも口論に割って入った所だった。

……ん？デジャヴ？

「今取り込み中」

「おい、玄関口に鞍馬の天狗達からの手土産がある、アチラで吸血鬼と吞んでいろ。」

人間の男子の育て方に関して、この機会にハッキリさせておかねばなるまい」

「は、はあ」

そんな割り込みを一蹴して、

僧正坊様とナズ様はちゃぶ台を挟んで議論の姿勢に入ってしまった。仕方なく立ちあがり、ご当主殿を連れて脇に移動する。

「……すみません、ご当主殿、御用でしたら此方で伺いますので」

「え？ いや、そ、そう、貴方に用があつてきたんだけど……」

まだ戸惑った様子だったが、俺にそれを気遣う余裕は無い。

なんせ、俺だって何が何だか……ただ分かる事は、この議論で恐らく、俺の恥ずかしい過去も晒されるという事だろうか。

……護法魔王尊様と毘沙門天様に祈ってもどうにもならんよなあ、多分。

事態の把握も解決も、半ば諦めたため息をついて、そんな事を考えていた。

気遣いの在り様（後書き）

悩んだ拳句、次話で外伝的な過去話を挿入しようと、このような区切り方となりました。

本当は予定にはなかったのですが、現代本編中だけでは、書いててナズーリンが主人公への対応に説得力が出せず……。

実力不足でございます。

ちよつとばかり方針が迷っておりますが、次話もお付き合い頂ければ幸いです。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧 1

鞍馬の天狗から、事の神と恐怖の駆り手の事を聞いた時、ナズーリンは僧正坊のある言葉を思い出していた。

——士別れて三日なれば刮目して相待すべし——

でも、もう少しくらい、ゆっくりと進んではくれないのだろうか。妖怪の自分からすればあまりにも早い人の成長に、彼女はそんな事を考え、昔に思いを馳せた。

この国には、幻想郷の他にも結界で仕切られた妖怪の住まいがあるが、

その中には人間に味方する神や尊格が部下の妖怪などを隠れ住まわせる為に抱えているモノもある。

何故なら、折角、妖怪達の大部分が幻想郷に移った今、彼らの姿を晒せば幻想が思いかえされ、人に害なす妖怪達まで呼び戻す事にな

りかねないからである。

その一つ、鞍馬山の結界の内の天狗達の里。

余裕のある文化的な生活を謳歌する幻想郷の天狗達に比べれば、鞍馬の天狗はストイック、主たる護法魔王尊の為に働き、戦い、武芸と兵法関連の学問に励む日々を送っている。

そんな住人達の気風を表わすように里の物はどれも質実剛健——それはそれで趣はあれど、華やかさに欠けるのも事実で。

「……なんだって私がこんな所に」

気だるさにため息をつく、鼠の妖怪、ナズーリンの姿があった。

毘沙門天の腹心であり、今はある妖怪の部下である筈の彼女だが、毘沙門天の直々の命で今の主の下から離れ、この鞍馬山にいる。

理由は分かっている。

毘沙門天はその妖怪の動向を窺っているのだ。

元々は監視役として派遣されたナズーリンだが、それが離れても怪しい動きを見せないかどうか。

別の手下に命じて見張らせている事だろう。

元々はある寺で僧の推薦から、毘沙門天の代理として黙認されただけの妖怪。

その僧、ある魔法使いが封じられてからも彼女は真面目に毘沙門天の代理としてふるまっている。

だが、その魔法使いの仲間の妖怪がいる、地底の封印に何か怪しい兆しが見えたらしく、毘沙門天は万が一の確認のつもりで今回の処置を取ったのだろう。

あるいはその妖怪達と結託し、何らかの行動を起こすだろうか。

……その魔法使いは（形の上では）人間達を裏切り、妖怪と通じて封印された。

果たして毘沙門天はそんな存在を再び自らの僧として、そしてその息のかかった妖怪を自らの代理として認めるだろうか？

……少なくとも、魔法使いが封印されるその時は毘沙門天は救いの手を差し伸べはしなかったし、今も封印を解いてやろうとはしない、そして僧の不在に代理を務める妖怪の方も取りみだす事無く、務めを続けている。

だが、少なくともこちらは偽りだ。

「ご主人は……後悔している、そして踏み出しかけてる」

ナズーリンはため息を共に呟く。

ぶっちゃければ、そんなに尊敬している訳でもない主人だが、それでも長く傍にいれば情は湧いてくる。

それに、魔法使いの方にもだ。

監視役としての毘沙門天への忠誠と使命感に勝る訳ではないが、やはりやるせなさくらいはある。

あの寺の中でさえ、名前で呼んでくれたのは、その魔法使いと主人くらいで後は――

「おう鼠、表へ出ろ、客の出迎えだ」

そう、鼠呼ばわりである、この大天狗のように。

ナズーリンが今（雑用係として）預けられているこの天狗の里の首領、鞍馬山僧正坊。

彼はナズーリンに宛がわれた寺の中の一室を遠慮なく開けると、ぞんざいな態度で呼んだ。

自分より強い相手には基本的に歯向かわずに逃げる事を選ぶナズーリンは特にそれに噛みつく事もなく、

「……珍しいね、僧正坊殿まで出るような客なんて」

素直に応じて立ち上がる。

「まあ、な。

護法魔王尊様、毘沙門天様とは旧知の間柄だ、毘沙門天様の部下としてお前も出ておいた方が良さだろう。

……『恐怖の大王』について、知っているか？」

「一応、話だけは。

……正直、そんなモノが実在してるなんて信じられないけど」

「なら喜べ、目の前にすれば信じざるを得ないだろうからな」

恐怖の大王については昔、毘沙門天より説明を受けた事のあるナズーリンだったが、

その内容はとても信じられるものではなかった。
正直、毘沙門天以外からその説明を受けたなら、戯言として記憶にも留めなかった事だろう。

しかし、鞍馬寺の裏手にある結界の入口に並び、それを出迎えた時、ナズーリンは納得した。

彼女には鞍馬山僧正坊を始め、多くの大天狗を向こうに回して、尚、格上で在ると思わせるだけの風格があった。

彼女——そう、恐怖の大王は、女性だった。

白いメッシュが所々に入った長い黒髪に切れ長の鋭い目、凜とした美しさを持つ女性、
その不動なる強い芯を感じさせながら、纏う雰囲気は激動の荒波を思わせるそれである。

それは『恐慌と無我を併せ操る程度の能力』を持つ彼女だけが到達できる心理がもたらす風格であろう。

ナズーリンを含め、面々は完全に気圧されていた。
恐怖の大王が一步前に出れば、圧されるように、誰もが微かに後ずさる。

例外は鞍馬山僧正坊、ただ一人だ。

「かの『恐怖の大王』がなんの御用か？」

いや、これはワシらが聞く事ではないかな。

……主の下へと案内させよう——」

「いや、確かに魔王尊達の了解も得るつもりだが、

これは僧正坊、君にも関係がある事だ。

……実は、私の弟子をしばらくこの鞍馬寺に出稽古に出したくてな。

私は武具を使って戦う事に関しては君達ほどの心得は無い。

それを一年ほどで基礎だけでも叩きこんでおいて欲しいんだ」

「弟子？……恐怖の大王が弟子を取るとはな。

して、そのお弟子殿はどこにいる？」

もし鬼や夜叉の類なら、我らよりも地獄でも尋ねる方が正解であると思うが、

— 先ず見てみねば分かるまい —

「いや、弟子は人間だよ。

ここにいる——ほら、挨拶しなさい」

恐怖の大王の背後から、ひょっこりと子供が顔をのぞかせた。

彼女が着た黒いコートの裾をギュッと掴んだまま、今にも泣き出しそうな怯えた目で立ち並ぶ天狗達とナズーリンを見つめている。

そんな潤んだ視線で見つめられた面々は強烈過ぎる程の違和感を感じた。

今この場で最も恐ろしいのはどう考えても恐怖の大王である。

こちらの面々も十分大物ぞろいだ、少なくとも、あんな雰囲気
纏う存在にしがみつける人間が恐れるモノではない。

大体、なんだってあんな異常な存在の背後から（行動を無視すれば）
どうみても普通の、齡10に届くかどうかくらいの大人しそうな男
の子が出てくるのか。

同じような疑問を抱き、何も言えないでいる天狗側の面々に対し、
恐怖の大王は優しい笑みを浮かべて自慢げに言う。

「私の自慢の一人弟子だが、すまない、少し人見知りする子でな。
ほら——」

ポンと背中を叩かれ、男の子が意を決したように恐怖の大王から離
れ前に進み出る。

「お、俺は——と言います、え、えと皆様、宜しく願います」

面々はその男の子を凝視する。

一体何者なんだ、このガキは。

そんな天狗達の疑念の滲む探るような、半ば睨みつける様な視線を
受け、しばらくはキツと口元を嚙んでこらえていた男の子もだんだ
んと震えて。

「あ、あの……ごめんなさいッ！」

とてとて、と走り、恐怖の大王の背後にまた隠れてしまった。

「すまないな、この子は天狗に会うのは初めてなんだ……その内に君達にも慣れると思う」

恐怖の大王の困ったような苦笑を受けて、

天狗達はなんだか弱いモノ苛めをしてしまったような変な気持ちになりながらも、やはりその様子に違和感を拭えないでいた。

「さて、では君もついてきてくれるかな、僧正坊。それと、この子を預かっていて欲しいのだが」

「……心得た……おい！」

「は、はい、ではお弟子殿は此方に」

僧正坊に怒鳴られた大天狗の一人が前に進み出て男の子を仕草で招き寄せる。

少しの間、泣きそうな顔で戸惑っていた男の子だが、やがて、またキツと口元を結ぶと恐怖の大王から離れ、そちらへと歩いていった。

「ではな、一年間、がんばるのだぞ」

「はいッ！」

恐怖の大王の呼び掛けに元気な答えを返し、そのまま時々振り返りながらも大天狗についてその場を後にして行った。

「……確かに護法魔王尊様も毘沙門天様も断りはしないだろうが……
…今ので、もう別れか？」

「あの子なら大丈夫だからな、詳しくはアチラで話そうか。
皆も出迎えありがとう、弟子によろしくしてやってくれ」

恐怖の大王は、出迎えに出ていた面々に一礼し（面々も慌てたように礼を返した）僧正坊について護法魔王尊の下へと向かって行った。

「なあ、鼠、あの子は……なんだろうな？」

「……大天狗でも分からないのに私が分かる訳ないよ」

しばらく呆然と突っ立っていた面々。

そんな短いやりとりがあつた後、自然と解散して行つた。

その日の内に、恐怖の大王と護法魔王尊、毘沙門天の交渉はまとまり、恐怖の大王の弟子は一年間、鞍馬寺の預かりとなつて修行に励む事が決まつた。

恐怖の大王はそのまま、弟子に別れの挨拶もせず去り、話を聞いた弟子も「はい、分かつてます……分かつて、ます」と少しの動揺を垣間見せながらも頷いた。

鞍馬の天狗の里にて名前ではなく『泣き虫』という通り名で呼ばれ続ける事になるその子供。
ナズーリンの第一印象は、レア度ばかりが高く、実質価値がない、というモノであつた。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧1（後書き）

短いですが、区切りのよい所にて。

この外伝、考えるうちにやってみたい事も少し出てきまして……長くなるかもしれません。

いつ本編に戻るかもわかりませんが、次話もお付き合い頂ければ幸いです。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧2

「なんてことはない、ただの泣き虫、その内逃げ出すだろう」

それが鞍馬の天狗達の恐怖の大王の弟子に対する最初の内の評価だった。

初歩の初歩たる訓練にも苦戦し、泣き出し、涙と鼻水で顔を滅茶苦茶にしながら取り組む始末。

『恐怖の大王』の弟子とはどんなものか、興味を持って見ていた鞍馬の天狗もすぐにそれを失くした。

ただ、直接指導に当たっていた遮那王尊は彼を悪くは言わず、同じく僧正坊も、口に出せば「あの泣き虫」と呼ぶものの、決して逃げ出すだろう等とは言わなかった。

ナズーリンとその子が初めて言葉をかわしたのは、『泣き虫』という通り名が定着し始めた、その頃だった。

「これって私向けじゃないんじゃないか……」

ある日の朝、今は里の雑用係であるナズーリンが寺の裏手で洗濯も

のを干していた。

しかし、まあ、アレである。

彼女では欄干まで、ほんの少しだけ背丈が足りない。

フワフワと空中にホバリング状態で作業しているが、一々地面の籠にある洗濯物の所まで下がるのがなんとも面倒だ。

同じように雑用を担当している木の葉天狗（幻想郷の白狼天狗。呼び方が異なるだけである）達は他の用があり、手伝いには来てくれない。

「流石に面倒だな、この量は——ん？」

「あ、あの、お手伝い……します」

ふと、ナズーリンが気配を感じて振り返れば、

そこには干されたシーツの向こうから顔だけをひょっこり覗かせるあの『泣き虫』の姿があった。

初めて見た時と重なるその姿に、特に何の感慨もなく、ナズーリンは短く淡白に返す。

「いいよ、どうせ邪魔になるだけだし……飛べないでしょ、君」

「あ、でも……木の葉天狗の皆様はナズーリン様を手伝って来いて。」

それに、俺、飛べませんけど」

シーツの裏から進み出た泣き虫は、まるでそこに見えない段差があ

るように宙に踏み出し、そのまま空中に立って見せた。

「空中歩行は出来ますから、少しは役に立てますよ……えと、多分」

しかし、その尻すばみに勢いを失う説明は、既にナズーリンの耳には届いていなかった。

「今、なんて言った？」

「えと、空中歩行は——」

「違う！その前！」

洗濯物干しを中断して突如迫るナズーリンに、泣き虫は目に涙を浮かべてしどろもどろになりながらも対応する。

「ふえ？……あ、あの、ごめんなさい、分かりません。

ひぐッ、分かりませんが、分かりませんからごめんなさい、ナズーリン様」

「そう！それ！」

「ふえ？」

最早、軽く泣き出してしまった泣き虫の様子など気づいてもいないのか、

ナズーリンは興奮した様子で頷いた。

毘沙門天の腹心でありながら、決して上級妖怪などではなく、殆ど裏方に勤しんできたナズーリン。

当然、他者の敬意など得る事もなく、あっちに行ってもこっちに赴いても名前で呼んでももらえればまだ良い方で、

大抵は『鼠』呼ばわり、ナズーリン自身、抱えた小ネズミを別にすれば上司は居ても、部下や子分などいた事もなかった訳で。

「ちょっと、もう一度呼んでみて」

「え?……ナズーリン様?」

人間に、それも毘沙門天とも対等に言葉を交すような存在の一人弟子に、

確かな敬意のこもった『様』という敬称を付けて呼ばれるのは彼女にとってなかなか衝撃的な出来事なのだ。

「フ、フフフ、よし、手伝わせてやろう。

いいか、ちゃんとと言うとおりにやるんだぞ」

「え?……は、はい、宜しく願います!」

自然と笑みが漏れる程に気を良くしたナズーリンは、

「ごしごしと袖で目を拭って元気に返事をするその泣き虫を、精々扱き使ってやる事を決めた。」

「ほら、これはこう……分かった？」

「は、はい、やってみます」

「——あ、それだと皺になっちゃうから、こうして、ほら」

「あ……へえ、すごいです、ナズーリン様早いですね」

「あ、ああ、うん、まあ、ね」

教えながら手伝わせて見れば、意外とすぐにでも戦力になった泣き虫。

途中、ナズーリンの見せた手本の手際の良さに感心していた。

ナズーリンとしては雑用の手際を褒められても正直微妙な心持ちだったが、彼の素直な尊敬の視線を見ると、まあ、悪くないか、とも思えてくるのだった。

やがて全ての洗濯物を干し終えて、

予定よりも短い時間でそれほど疲れる事もなく仕事を終える事のできたナズーリンはやはり比較的上機嫌で、

「終わったな、よしじゃあ、菓子でも食わせてやろう、こっちに――」

「……でも、俺、これから稽古があるんで」

「え？ああ、そうか、じゃあ仕方ないな」

そんなやりとりの後、一礼して、あっさり去って行く泣き虫に、なんだか拍子抜けしたような気持ちになるのだった。

その後も度々、修行の合間に雑用を請け負う泣き虫であったが、段々とナズーリンと行動する事が増えその内に自然と、彼が手伝う時は二人一組で細々とした雑用を任されるようになっていった。当然、力は妖怪であるナズーリンの方が強いが、臆病者故だろうか、彼は細かな事にもよく気が付き、また空中歩行の能力も意外と便利だった。

それに、ある一件以来、小ネズミ達もよく懐く様になった。

里で一番大きな台所、寺の台所を掃除して、その後の話である。細かい所のゴミ拾いをしていたナズーリンの小ネズミの内、一匹が行方不明になっていた。

方々を探しても見つからない最中、泣き虫が台所の食器棚の中から

その小ネズミを見つけ出してきた。

だが、それにナズーリンは首を傾げた、食器棚の中は最初に自分が探した筈だからだ。

よくよく注意してみれば、小ネズミの体に米粒が一つ付いており、米びつを開けてみれば、さっきまでそのネズミがいたような痕跡まである。

問いただしてみると、泣き虫はあっさりと嘘を認めた。

「う、ごめんなさい。」

その、このネズミさんがそのお米容れるヤツの中から出られなくなって、

でも、勝手に入ってつまみ食いしちゃったから、ナズーリン様に叱られるかもって、

恐いので板挟みになってるのが伝わって来て、可哀そうで……。

お、俺が勝手にやったんです、ネズミさんは悪くないです」

「いや、なんで君が泣くのさ……。」

というかつまみ食いた時点が悪いだろう。

……ええい、分かった、今回は両方許してやるから、今度からは正直になるように」

ここで、もうやめろと言わない辺り、小ネズミの喰い意地については諦めているナズーリンである。

その後の仕事でも自分に対して敬意を払い、従順で気の効くこの子を、ナズーリンは気に入りはじめた。

彼は同じく雑用係の木の葉天狗達の間でも受けがよく、彼を通して、ナズーリンと名前で呼び合う仲になる者も出て来た。そんな頃の出来事である――

「――でも、あの泣き虫、修行前の朝か、休みの日しか手伝いに来ないんだよね。」

修行終わってから結構時間ある筈なのに」

ある日の昼下がり、

ナズーリンは、他の木の葉天狗達数人と共に、やぶれたりほつれたりした着物を縫いなおす仕事をしていたが、手を動かしたまま、そう、不満気に漏らしていた。

「ふふっ、ナズちゃん、弟分が居なくて寂しいのは分かるけど無茶言っちゃ駄目よ、あの子だって大変なんだから」

「まあ、体が動いたとしてもボロけた面をテメエにや見せたくねえんだろうよ……察しろ、男の意地だ」

「別に寂しい訳じゃ……って弟分でもない！ただちよつと扱き使ってやってるだけだ！

でも……鞍馬の修行は大変大変って聞くけどさ、手にも顔にも生傷一つないじゃないか、少しくらい……」

そんなナズーリンの言葉を受けて、その場の木の葉天狗達の動きがピタリと止まった、

そして一度皆で顔を見合わせた後、

「え、えっと、ナズちゃん、もしかして鞍馬流の修行方法って、知らない？」

「?.....あ、ああ、うん」

先と同じ女の天狗が恐る恐る、と言った様子で確認して、その様子を疑問に思いながらもナズーリンもコクリと頷いた。

また、少し沈黙が流れて。

「ま、まあ、そうだな、でもアイツだつてさ——」

「ちよつとアンタ黙つてて！ナズちゃん、鞍馬の修行の本意は『尊天』の力にあるの。」

人や妖怪の『存在』そのものを強化できる力なんだけど、

…… 大天狗様とか、八倍に濃くした拳句それを分割する術まで使えるしね。

この力を注ぎ込めば、人の子の体力じゃ普通できないような修行もこなせるって事。

それに、傷の治りだつて早く、より完璧になるから、子供くらいならそれこそ死にかけだつて翌朝には無傷になるわ。

でも、子供は子供、痛いモノは痛いしそれに——」

「だア——！バツカ、なんで言つちまうんだよ!？」

アイツが黙ってたって事アそういう事だろうが！

泣き虫なりに必死に立てた男の意地を踏み躪りやがって、気の回らねえ女だなア！オイ！」

「黙っててって言ったでしようが！

大体、何よ男の意地って！？」

あんなすぐ泣いちゃうような子がそういう修行してれば心配になるのは当然でしょうが！

ああいう子だから、自分から心配してくれって言えないんでしよう！？」

アンタみたいな馬鹿がいるから——」

「馬鹿だとテメエ！」

「アンタが先に言ったんでしようが！」

「——ええい両者黙れっ！！！」

ナズーリンそつちのけで口論を始めかけた男女の天狗を、その場のリーダー格の木の葉天狗が一喝して黙らせる。

ぽかんと呆けた表情を浮かべていたナズーリンに対し、その木の葉天狗が縫物をする手を動かしながら、落ちついた声で話しかける。

「まあ、某は先のどちらの言い分も分かるが……それがし。

やはり男だからだろうか、彼は貴殿には知らずにいて——」

「ほら見る、やっぱり——」

「黙れ、そして手を動かせ」

「……うい」

「失礼……知らずにいて欲しいのだと思う。」

だが、某個人として……彼を心配する一人としては、
貴殿にもその様を知っていて欲しいとも思う」

「つまり……どうしろと？」

「どうしろという事ではない、只の提案だ。」

修行の様子を見てみたいと言うなら、某がなんとかしよう。

その上で、彼の意を汲んで知らぬ振りをするかどうかは自由に決
めれば良い。

「……どうする？」

ナズーリンはしばらく悩む、

別に、あの泣き虫に対して弟分だとか、気持ちを抱いている訳じゃ
ない。

ただ、そう、便利で役に立つヤツだから、目をかけてやっているだ
けで……。

「まあ、見るだけ、見てみるよ」

ならば、どんな日常を送っているか、今後良く使ってやる為にも確
認しておくのは悪い事じゃない。

そう自分に言い聞かせて、頷いた。

それこそが、ナズーリンが半ばその泣き虫の保護者の様に振舞い始める、契機であった。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧3

「泣いてばかりの本当の泣き虫、しかし、武人とはまるで違う強さがある。」

迷いも恐れも丸ごと背負って進むような、逆上とも恐慌とも違う何か……」

『泣き虫』への鞍馬の天狗達の評価がこう変わり始めた頃の話である。

いつものように一日の修行を終え、ボロボロになった体を引きずるように自分に住まいに戻ろうとしていた泣き虫。

今にも倒れてしまいそうな彼を道行く天狗達は気にも掛けない（フリをしている）。

一歩、また一歩と俯きながら進む彼は、不意に視界に自分の支給された草履とも天狗の高下駄とも違う履物を捉え、

——同時に自分の名前を怒鳴る様に呼ぶ声に、顔を上げた。

ムスツと不機嫌な表情で仁王立ちするナズーリンの姿がそこにあった。

泣き虫は「あつ」と声を漏らすと、何か悪い事をして見つかった叱られるのを恐れる子のように、弱気な表情を浮かべる。

ナズーリンはそれが気に入らないのか、不機嫌そうに腕組みをした。その一瞬後で、泣き虫は両袖で涙やら鼻水やら土埃やらで汚れた顔を拭き始める。

ナズーリンはそれが不満なのか、不機嫌そうに眉を寄せた。

当然の如く、顔と同じように土やらなんやらで汚れていた袖の所為

で目が痛くなつたのか、泣き虫は顔を抑えて悶える。
ナズーリンは最早呆れたのか、ため息について歩み寄る。

「あ、あの、ナズーリン様……その——」

「いいから、黙る」

何か言いかけた泣き虫を制して、ナズーリンは泣き虫を半ば無理矢理背負い込むと、そのまま歩き出した。

「ナズーリンさ——」

「いいから、黙る」

「でも、汚れちゃいま——」

「いいからッ！」

「ひぐッ」

遠慮がちな、されどしつこい泣き虫の抗議にイラついたのか、ナズーリンはつい強く怒鳴ってしまった。
やはりというか、委縮して泣き出しそうな気配すら漂う泣き虫に、ナズーリンはまた一度ため息をつくと自分の肩にぐったりとのつかっている泣き虫の顔の方を見て、

「いいから……黙ってて」

優しさのこもった、穏やかな口調でそう言った。

ポカンと口を開けた間抜けた表情を浮かべる泣き虫に、クスツ、と微苦笑を漏らすとナズーリンはまた歩き出す。

もう泣き虫は何も言わない、代わりにナズーリンは背中に乗せた小さな体の緊張が解けるのを感じていた。

その夜

泣き虫に宛がわれた部屋を一人の木の葉天狗が訪れていた。

「——そうですか、貴方が」

「ああ……意に沿わぬ事をしたなら、謝っておかねばと思ってな」

「いえ、俺も……その、嬉しかったですから」

えへへ、と笑みを浮かべながら応える泣き虫に、木の葉天狗は問をかける。

「それがし某もお前が背負って行かれる所まではのぞ——あゝ、見守っていたが、

そこまで嬉しそうにする事だったか？」

「はい、初めてでしたから。

ナズーリン様がああやって……その、うーんと、ただ優しく？じやなくて……厳しくしないで優しく？でもないなあ……」

「……分かりやすく、素直に優しく、か？」

「あ、はい、そんな感じです、分かりやすく優しくしてくれたのは……ん、なんで笑ってるんです？」

口を押さえて膝を叩き、クククと笑いを漏らしている木の葉天狗に今度は泣き虫がハテナマークが頭上に見える様な表情で首を傾げた。

「ああ、いや、気にするな……クク、分からぬは当人達ばかりと思えば、当人ばかりの間違いであつたか。

……いや、なんでもないのだ、なんでも、ククク」

「……うーん？……そう、ですか」

「話を戻そう、それでそこまで嬉しかったと」

「はい、後、俺の事を名前で呼んでくれたのも……こっちの方がちよつと嬉しかったかな？」

「……何？」

不穏な気も含んだ様子で確認する木の葉天狗に少し気圧されながらも、泣き虫は応える。

「えっと、あの時ナズーリン様が俺の事を――」

「初めて名前で呼んだくれた、と？」

嬉しそうにコクリと頷く泣き虫とは対照的に、木の葉天狗は難しい顔でこめかみに手を当てた。

「……いや、自分がそうだったというのに……これは流石にどうなのだナズーリン殿？」

そのうち愛想を尽かされても知らんぞ……」

「ん……どうかしました？」

「いや、なんでもない……のなら良いのだがな、お前が」

「……うん？」

「やはりなんでもないさ、なんでも。
それはそうと……触れるべきか否か、迷っていたのだが……」

誤魔化すようにコホンと咳払いした後、木の葉天狗は言い辛そうに切り出した。

「なんだ、それ？」

「……えと、治療……です、きっと」

木の葉天狗が指すのは、泣き虫の体中にある、変に乱れた包帯とか、ペタペタと貼り付けられたテープだとか。
ミイラ男の出来そこないでも作ろうとしたかの様な治療（らしいと取れなくもない）の痕跡であった。

「ナズーリン殿だな……念のために置いておいた人間用の道具を使ったのか。」

全く、人間の怪我の事などあまり分からんだろうに……いくらどうせ『尊天』の作用で全快するとはいえ、これは酷い」

「で、でも、傷を包帯で巻くだけでもちよっと痛くなくなったりとか——」

「その前に傷口を洗ったり、消毒したりはしたか？」

「……あ、あの、包帯巻く前に傷口に薬を塗ってくれたりとか、すごく沁みて痛かったですけど、その——」

「ああ、薬の匂いがすると思っていたらそれか。」

「……この匂いはねんざや筋肉痛に効果があるその筈だが」

「……」

「……某がやり直してやる、ちょっとこっちに寄れ」

盛大にため息をついてそう言う木の葉天狗だったが、泣き虫は慌てたように両手を振りながら、

「や、でも……そう、どうせ明日には『尊天』のお蔭で治りますし。なのに、わざわざお手を煩わすのも悪いと言いますか。」

色々と痛かった所もだんだん治まって来てますから寝るのに支障はないですし、

その、折角、ナズーリン様が俺の為にやってくれたのに剥がすのも悪いと言いますか——」

と、断るような言葉を並べたてる。

「むう」と小さく唸った木の葉天狗は天井を仰ぎ見、先程よりも更に盛大に、最早わざとらしいまでのため息をついた。

「分かった……しかし、まあ、アレだ……不満くらい言ってやるの

だぞ？」

「うん？……分かりました」

首を傾げた泣き虫の表情に

お前、絶対に分かってないだろう、と言いかけた木の葉天狗だったが、

少し迷う素振りを見せただけで、そのまま立ちあがり、泣き虫の部屋を後にした。

ナズーリンの泣き虫への、人への接し方に一抹の不安を抱きながら。

それからはナズーリンは泣き虫の保護者のようにふるまい始めた。朝は起こしに行き、食事は一緒に取る様になったし、雑用仕事にも勿論共に行くのだが――

「あら、ナズちゃん、今日は弟分と手を繋いで出勤？」

「ん……引っ張って来てやっただけ」

「オイ、弟分については否定しねえのか？」

「……別に……行くよ」

「はい——つとと、そんなに引つ張らないでくださいナズ様」

随分と仲が良さそうに見える——のは元からそうでもあったが、ナズーリンがそれを認めるようになったのだ。

それと、泣き虫のナズーリンの呼び方がいつの間にか「ナズ様」になっっていた。

それだけなら、周りの親交のある木の葉天狗達が（不安を抱く一名を除き）微笑ましく思っただけだったのだが、ある日、ナズーリンはこの里の首領にして、泣き虫の指導を担当している僧正坊の下を訪ねて――

「僧正坊殿」

「ん？……なんだ鼠？」

「あの子のあの修行……あそこまで厳しくする必要、あるの？」

少なくとも、両者の立場と力量差を考えれば暴挙とも言える抗議（単なる質問でない事はそのキツイ表情から一目瞭然である）を行ったのだ。

僧正坊は面倒、と言わんばかりにため息をついた後、

「……それを決めるのはワシらではない、あの泣き虫と、その目的だ」

「意味が分からないな……もう一度――」

「まあ聞け鼠、古来より鞍馬の天狗は我が子を僧正ヶ谷に蹴り落とすと言つてな――」

「あからさまな嘘を言つな！嘘を！」

「いやいや、これは本当だ。」

というのも、この里の天狗は皆ワシの子のようなモノであるし、そのワシが皆を蹴り落とした事があるからなのだが」

「なんだそれ！？ちよつと、私が話してるのは――」

この後もノリクマリとかわされ、抗議は意味をなさなかった。

同じように遮那王尊の下へも赴いたのだが、同じようにかわされた。ちなみに「源氏は我が氏族をひよどり越えから突き落とし」云々と言いだした所で「師弟揃つてそれかよ！」と突っ込んだ所、遮那王尊は少しシヨックを受けていたようだったが。

その場ではなんでもないようにかわした二名だったが、

その夜には顔を合わせて酒を飲みかわしながら、その事について話していた。

「しかし驚いたよ、僧正坊殿。」

あの鼠は元々、自分より強いモノには基本的に齒向かうより逃げる事を選ぶ性質だったではないか」

「……そうであるな。」

鞍馬の天狗の中にも泣き虫に手を差し伸べたいと思ってる癖、ワシを恐れるあまり何もせぬ輩もいたと言うのにな。

全く、アレの事を考えて敢えて助けぬならば良しとして、鞍馬の天狗が恐れて尻込みなど……」

「確認の為に聞こうと思うが、その天狗達はどうした？」

「無論、その根性を叩き直してやったわ」

「……叩いただけじゃないのか……？」

「何か言ったか遮那王？」

「いや、別に」

誤魔化すように杯の中の酒を呷る遮那王尊に、怪訝そうな視線を向けていた僧正坊であったが、
やがて、ため息をつくと自分も同じように杯を干した。

「……丁度いいと言えばそうか、これも修行か」

「む、なんの話だ？」

「あの泣き虫の話だが……分からぬか、若造が」

「いや、若造などと、これでも——」

「まあ見ている……あの鼠は思い違えているのだ、志ある人の子というモノを」

僧正坊は意味が分からず首を傾げる遮那王尊に答えを明かす事もせぬまま、その場はお開きとなった。

その後も、泣き虫の修行の日々は続いた。

修行はますます厳しく、激しくなり、泣き虫はナズーリンに背負われて帰る事に抗議一つ言わなくなっていた。

ナズーリンは泣き虫の修行中は雑用仕事がある事が多かったが、それが無い時は脇で修行の様子を無言で見つめていた。

木の葉天狗達の気遣いにより、ナズーリンが仕事を早く切り上げて修行に立ち会う事ができたある日、事件が起こった。いつにも増して、厳しい修業だった。

泣き虫はいつも通りに泣いてしまっているのに、その涙や鼻水よりも血と泥とで汚れる割合のhighくらいだった。

「——もう、見てられない」

「な、鼠、何を!?——」

突如、ナズーリンは修行の場に乱入すると、制止しようとする他の見学者の天狗を無視して、泣き虫の下へと歩み寄って行った。

「む、おい、誰か止め——」

「否！手出し無用——！」

少し慌てた様子の遮那王尊の言葉を遮るように、僧正坊が大声を上げる。

疑問に思うナズーリンだったが、好都合とばかりに泣き虫の下へと到達するとその手を取って歩き出した。

「え？ちょっと、ナズ様？」

「いいから、黙る」

そのまま、ナズーリンは修行の場を後にしようとする。

「ナズ様、ちょっと待ってください」

「いいから黙る」

「……放してください、ナズ様」

「いいからッ！」

「よくありません！！放してくださいッ！！」

泣き虫が渾身の力で手を振り切ろうとする。

泣き虫に怒鳴られるという、在り得ないと思っていた事象の前に、呆然としたナズーリンはそのまま手を放してしまう。

その呆然としたナズーリンに、泣き虫は――否、とても泣き虫とは思えぬような強い意志がうかがえる真剣な表情で言い放つ。

「俺は、強くなりたいんです。

あんな恐い思いをしてる人達を助けられるようになりたい……だから、強くなるんです！

邪魔をしないでください！！」

ナズーリンは小さく、「え」としか呟けなかった。

僧正坊一人を例外として、同じように驚き、呆然とする周りの事は目に入っていないのか、

ナズーリンに背を向けると、

「……今日は歩けなくても、ハイハイでも一人で帰ります」

とだけ言って、少しふらつきながらも修行の場へと戻って行った。振り払われた手を中途半端に前に出して固まったナズーリンをそのままに。

静まりかえった周辺には、よたつき、頼りない筈の彼の足取りが、
重く強い足音を響かせていた。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧3（後書き）

次話で終わらせたいですが、正直微妙。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧 4

「ナズ様」

「何？」

ある日、掃除の仕事を早めに終え、二人で縁側に並んで座っていた時の事、
泣き虫が、物憂げな表情を受けていたナズーリンに話しかけた。
……泣き虫に話しかけられたその瞬間にそんな表情は引っ込めたナズーリンだったが。

「お友達の事……心配ですか？」

「!？」

ナズーリンは驚き、そしてその後で、怒ったような恐い顔で応える。

「……一体、誰に聞いたの？」

声にも怒気がこもる。

いつもの泣き虫ならここで退くどころか、泣き出しかねない程の凄み。

しかし、泣き虫は穏やかな、優しい笑みを浮かべたままで。

「ナズ様自身の恐いって気持ちから……。
ごめんなさい、俺、すごく恐がりだから……他のヒトの恐いって
気持ちが伝わりやすいんです。
恐い事の内容も大体は一緒に伝わって……まだ上手く聞きとりき
れないんですけど」

ナズーリンは天狗達の話していた内容を思い出し、「あ」と声を漏
らす。

曰く、泣き虫には『恐怖を共有する程度の能力』があると。

「……どれくらい、分かった？」

「封印されてしまったお友達と、見て見ぬフリをしてしまって、見
て見ぬフリのフリをするお友達。

動かないのも嫌だけど……もし動いたら、皆は、皆と自分はどっ
なってしまうのか……」

「……」

よく見れば、泣き虫は確かに恐がっている。

その恐怖は怒られるからとか、そういう感情から来たものでない事
だけはナズーリンにも確信できた。

偶々、気が向いたからだろうか、
泣き虫の思いがけない態度に動揺したからだろうか、

兎も角、ナズーリンは泣き虫にある魔法使いと妖怪の物語を聞かせた。

黙って聞いていた泣き虫だったが、話が終わるといつになく真剣な顔で話し出す。

「……ナズ様、その恐いって気持ちは貴方の邪魔になるかもしれません。

でも俺は、恐怖の大王の弟子は、それを認め、愛します。

……えっと、その、師匠みたいにすごい事はできないけど、一緒に恐がってあげる事と……あと、あの、ちゃんと考えて——」

後半になると、いつもの弱気な調子に戻って行った。

それでも、真摯にこちらの事を考えてくれていると思えるその表情と声色に、ナズーリンは微苦笑を漏らし、

「そう、ありがとう」

と、冗談のつもりで応えた。

泣き虫に怒鳴られたその後、彼女は、元気に、そして嬉しそうに「はい」と応えた彼の顔を思い返して考えた。

彼は恐怖する者に優しい。

臆病だからこそ、相手の恐怖が分かるからこそその文字通りの同情だろう。

例えばもし、彼の目の前で誰かが妖怪に襲われたとしたら、その死の間際の恐怖がそのまま彼に伝わったとしたら、

……きっと彼は逃げ出したくなる衝動を必死で抑えながら、全てを賭けてその誰かを助けようとするだろうと。

泣き虫が怒鳴った。

その事件の内容自体は現場の天狗達が気を利かせたのか、広まる事はなかったが、

「泣き虫が止めてくれた相手を振り切って修行に戻った」という噂はその日の内に広まり、木の葉天狗達はナズーリンの事に思い至った。

その翌日

「大丈夫よお、ナズちゃん、あの子だってきつと修行中で気が立ってただけだから」

「そ、そうだ、十やそこらの子……拙者は幾らか人の子を知っているが、それくらいはよく在る事だ」

「……修行の後、部屋に行っても入れてもらえなかった……」

「朝は起こしに行かなかったの？」

「……もう居なかった、後、これから修行にも座学とかが入って忙しくなるから雑用仕事は出てこれなくなるって通りすがりの天狗が……」

雑用の分担を決める朝の集まりの場である大広間にて、ナズーリンは目に見えて落ち込んでいた。

木の葉天狗達はなんとか彼女を元気づけようとしていたが――

「そうか、しかし、時間をおけばきつと――」

「どうだろうなあ、そりゃ泣き虫だってキレてるだろうよ、アイツは――ガッ!?――ゴフツ!」

ナズーリンの傍に集まる様に座っていた木の葉天狗達だったが、ただ一人、離れて背を向けて座っていた天狗が空気を読まない発言

を行った。

すぐさま飛んできた女为天狗が蹴り飛ばし、ヒュンと風を切る音を立てて飛んで壁に激突した彼に更に文句をつける。

「ちょっとアンタは余計な事言わずにはいられないの！？黙ってなさい！」

「……いや、言わせてもらう。

鼠、人間を愛するのは結構だがよ、アイツはデメエの掌に納まつてるようなヤツじゃねえぞ」

「……分かつてる、でも――

いや、私はもう仕事行くよ」

「あ、アレ？　ちょ、オイ！」

「ちょ、ちょっとナズちゃん？」

座ったまま、蹴りを放った姿勢のまま、ひっくり返ったまま、それぞれの体勢で啞然とする木の葉天狗達を無視し、ナズーリンは仕事へと向かって行った。

昼ごろ、いつも二人で昼食を食べていた場所に、泣き虫は現れなかった。

雑用の仕事が終われば、いつものように泣き虫を迎えに行った。泣き虫はナズーリンを無視して、そのボロボロの体を引きずるよう

に住まいに戻って行った。

ナズーリンはその彼に手を伸ばしかけ――

――よくありません！！放してくださいッ！！――

そのまま、見送った。

その後も心配する木の葉天狗達を余所に、二人はこの日と同じよう
に行動し、同じような日々が過ぎて行く。

「なあ、鼠、いつそ謝っちまったらどうだ？

邪魔して悪かった、お前はちゃんと強い子だった、とかさア」

「コイツに同意するのは癪だけど、ね、男の子って意地になりやす
いから……」

そんな馴染みの天狗達の言葉にもナズーリンは迷うそぶりは見せて
も頷こうとはしない。

何か、納得できないものがあるように。

そのまま時は過ぎ、もう泣き虫の修行も後二ヶ月で終了となる、と
いう日。

「後、二ヶ月……あの時から一ヶ月と少しくらいしか経ってないのか。

……なんだか、遅いな」

夜、ナズーリンは自室でぼそりと呟く。

今日もまた、彼には無視されっぱなしだった。

彼女には、何が彼をそこまで意固地に行っているのか、それが分からなかった。

だって、彼は――

「あゝ……邪魔をするぞ、ナズーリン殿」

断りを一声かけて、一人の木の葉天狗が部屋に入ってくる。

「一体、なんのよ――あつ！」

その木の葉天狗はどうやら気を失っている泣き虫を抱えていた。

「え、一体なんで？」

「……あゝ、落ちついて聞いてくれよナズーリン殿、

某とて、ついさっき聞いたばかりでまだ整理ができていないの

だが……」

木の葉天狗は静かに泣き虫を床に置くと、しばらく悩んだ後、静かに語りだした。

二ヶ月程前のある夜

「あの、僧正坊様」

「なんだ？お前からワシを訪ねてくるとは珍しい」

泣き虫は単身、僧正坊の部屋を訪れていた。

しばらく躊躇う素振りを見せた後、キツと表情を引き締めるところから切り出した。

「……教えて欲しい事がいくつかあるんです」

「ふん、そんなもの……鼠や木の葉天狗にでも聞いておけ、そうだ

なあの中なら——」

「お願いします！この里で一番知識がある天狗様も僧正坊様と聞きました、どうしても知りたいんです！」

面倒くさいと手を払いながら応える僧正坊に対し、泣き虫は食い下がった。

手を払う動きを止め、ふむ、と一息ついた僧正坊は泣き虫に向き直る。

「そこまで言うなら、まあ、相手をしてやらん事もないがな……。
……しかしだ、泣き虫」

「は、はい」

「——ワシの言を途中で遮るでないわっ！！馬鹿者がっ！！」

「ひぐつ、ぐ、ごめんなさい」

「……今度は泣きかけるのか、良く分からん……で、何が聞きたいのだ？」

「は、はい、まずは——」

泣き虫は質問を並べ始めた。
質問をしては、別の質問し、かと思えばその質問の答えから更にまた質問を重ねた。

最初の内はただ淡々と答えるだけの僧正坊だったが、質問の内容と、途中の泣き虫の考えこむタイミング等から、段々と彼の目的を把握した。

僧正坊は密かに笑みを浮かべると、

彼が目的の答えに到達できるよう、それとなく、答えの内容にヒントを添えたりして誘導し始めた。

やがて泣き虫は僧正坊が仕込んだその答えへと到達する。

「成程、そうですか。」

……そういう対処も可能だと。

しかし僧正坊様、そうだとするとこれは護法魔王尊様に申し上げた方がよろしいのでは？」

年の割には上手な演技でそういう泣き虫に、僧正坊は内心で笑い転げながらも、更に数段上手い演技でそうは悟らせず応える。

「そうであるかな、

ワシは其処まで重要であるとは思わん。

申し上げるならばお前が自分でそうしろ、あくまで自分の考えとしてな、対面の許可くらいは取り付けてやる。

毘沙門天様ほどは忙しくもないからな、まあ、一ヶ月後くらいにはお目通りかなうであろうよ」

「俺が、護法魔王尊様に直接……ですか、わ、わかりました」

「……しかし、そうなると問題があるな……」

「え？……問題、ですか？」

「ああ、お前の言が信用されるには一つ、問題があるのだ。
あの鼠とお前の事だ……意味は、分かるな？」

「……はい」

「なあに、ワシの言うとおりにすれば問題ない。
良いか——」

僧正坊は声を落とし、泣き虫に何かを説明する。
その説明が進むにつれ、段々とキツと結んだその表情が更に強張っていく泣き虫だったが、

「——と、まあ、こうするのだ……良いな？」

しばらく、沈黙が流れた。
ずっと悩むように俯いていた泣き虫だったが、やがて顔を上げると力強く頷いた。

この説明と言うものであるが……。
厳しい修行から、ナズーリンが割って入る事を予見した上で、そこからの無視と拒絶の計画、
つまり、この一ヶ月と少しのこの事態の仕込みであった。

泣き虫は意図的にナズーリンを無視していたのだ。

そして、今夜。

「ぬしが『恐怖の大王』の弟子か」

650万年前にこの地に降り立ってより、16歳の姿より年を取らぬ永遠の存在、護法魔王尊。

妖怪とも蓬萊人とも異なる、存在そのものに作用する『尊天』によって在る、異質の尊格。

黒く大きな翼と、攻撃的な風貌と威圧感を持った少年の声に、泣き虫は平伏して応える。

「はい、この度はお目通りかない——」

「一夜漬けの挨拶などよい、疾とく、顔を上げて用を言え」

ほとんど締めきられた大きな部屋の中、
蠟燭の光が照らし出すのは、一柱と一人の姿のみである。

泣き虫は顔を上げると、緊張から額に一筋、汗をたらしながらも、

口を開く。

「は、はい、え、えつと申し上げたいのは――」

「楽に話せ、これは命だ」

「はい、ありがとうございます……お話したいのは四魔が一角を司る、第六天の王、天魔の事です」

「……成る程、いや、話してみよ」

何か思い当たった様子の護法魔王尊であつたが、そのまま続きを促す。

「はい、天魔は今、幻想郷という、妖怪と人間の共存する地にて大人しくしているそうです……」

このまま何も動きを起こさないなら、それでいいですが……分かりません。

あの地では人間はあえて妖怪に生かされているようなものと言います。

天魔が死ぬ人間を片っぱしから第六道に落とし、自らの配下とすような事も可能性は無くはありません」

「ふむ、そうかも知れぬな。

で、人に味方する為に在る我らが何か行動を起こすべきと？」

「はい、四天王と四魔、特に天魔の因縁は深いモノと聞きました。

ここは毘沙門天様の寺を幻想郷に建て、何かあれば動いてもらえるようにした方がいいと思います。

丁度いい事に、元は毘沙門天様を祀る寺の僧侶だったのに、昔、密かに妖怪と通じて魔界に封印されている方がいるとか。

彼女の仲間だった妖怪も地底に封じられたそうですが、その封印ももう解けそうなのだそうです。

きっとその妖怪達は僧侶を復活させ、昔と同じように寺を構えようとするでしょう。

幻想郷でなら、昔とは違い彼女達は受け入れられる筈です。

毘沙門天様はただそれを認めれば幻想郷に拠点を手に入れる事ができます」

「……無理だな。

四天王は皆堅物だ、毘沙門天も例に漏れぬ。

それが一度は人々に封じられた僧を再び自らのそれとして迎えるとは思えぬよ。

少なくともその僧侶——いや、魔法使いが封じられる時は救わなんだし、今も封印を解いてやろうとはせぬ。

それにだ、それでは折角大人しくしている天魔を変に刺激してしまいかもしれぬだろうて」

「だかりや——」

囁んだ。

少しの沈黙の後、護法魔王尊は無言で手を振り、続きを促す。恥ずかしさと焦りからか、顔を真っ赤にしながらも一度唾を飲み込

むと、思いきつたように言葉を放つ。

「だから……護法魔王尊様にこの件の手回しをしてもらいたいんです！」

毘沙門天様の盟友にして、天狗達に大きな影響力を持つ護法魔王尊様なら、きつと上手く——……」

勢いと大きさの両方を伴っていた声は不意に止まった。

一度の瞬きの間だろうか、気づけば泣き虫の目の前、今にも額が触れ合いそうなそこに、護法魔王尊の姿があった。

「つまり何か、この護法魔王尊にぬしの考え通りに、四天王と四魔それぞれの一角を動かせと？」

傲慢だ、そう言わんばかりの見下す視線を受け止めて。

泣き虫の目に怯えの色が浮かぶ、冷や汗が吹き出し、体が震える。

そして——

「……はい」

静かに、重く頷いた。

しばらく、沈黙が流れた。

「ク……—クハハハハハ！」

不意に護法魔王尊が大声で笑い出し、そのまま立ちあがる。

「いやはや……僧正坊め、如何に全力で稽古を付けよと言っても、主まで使うとはな。

わかった、その件はこの護法魔王尊に任せておくがよい、実際、なかなか有効な案であるしな」

「え……あ、はい、ありがとうございます！」

「フ……全く、ぬしもぬしだぞ、あの鼠の為に天狗随一の武人や地上靈王などと評されるモノに突っかって行くなど」

平伏し、頭を下げていた泣き虫はその言葉を受けて驚いたように顔を上げるとブンブンと頭を左右に振る。

「ち、違います！俺はただ、幻想郷っていう場所の人達の為になれ
ばと、そのっ！あのっ！」

「ククク、動揺しすぎだ、先までの威勢はどうした？
どうせ僧正坊に乘せられたのだろう？」

冷静に考えてみよ、たかだか一ヶ月くらい急に冷たくした所で誤魔化しにもならん。

いや、それどころか、余計に怪しいではないか。
利用されたのだ、ぬしの修行に、その情もな」

「へ……え、でも、あ……」

お、俺、ナズ様に謝らなくちゃ——」

「すまんが、そうもいかんだ。

……謝罪の言葉は代わりに誰かに述べさせておく」

「え？ それは、どういう……い、み、で……」

不意に護法魔王尊が泣き虫の頭の上に手を乗せると、
それと同時に泣き虫は急に意識が遠のいて行くのを感じた。

「幻想郷の在り様を全て知れば、きっとお前はそれを看過できぬ。
もう少し……そう、大人にならねばな……」

故に、これらの記憶には封をせねばならん。

重ねてすまん、鼠に報告くらいはさせてやろうとも思ったのだ
が——」

「な……に、を……？——」

「今は休め、王の後継者よ。

ぬしは既に一つ、仕事を終えた」

その言葉に従うように、静かに泣き虫の瞼が閉じた。

前に倒れかけたその体を支え、護法魔王尊は静かに、もう一言だけ、呟いた。

「大人に……か」

その物憂げな尊格に応えるように、ほとんど締め切られた筈の部屋の中、蠟燭の灯が一度だけユラと揺れた。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧4（後書き）

やはり終わりませんでした。

一話の長さを変えるべきか……。

今更ですが、天魔は仏教の方の天魔を元にしております。
神話の天魔雄命だとちよつと扱いに困るので。

それでは、次話もお付き合い頂ければ幸いです。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧 5

「——で、あるからな、彼自身が今夜何をしたかは話さぬようにとの事だ。

貴殿に修行の邪魔をされて思う所があつたのは事実であつたようだし、

一連の無視についてはそれが理由という事で記憶の辻褄が合わせであるらしい」

木の葉天狗の言葉は既にナズーリンの耳に届いていなかった。

彼女は泣き虫の寝顔を無言で見つめながら唇を噛みしめる。

分かった筈だ、彼ならそういう行動をも取りうる事を。

鞍馬のどの天狗よりも長い時間を共に過ごしてきたナズーリンである。

人間の性質については分からなくても、彼についてはよく理解しているつもりだった。

本当に臆病で、だから優しく、だから頑張れる子。

時間が経つにつれて周囲の彼に対する期待と評価が上がっていく事に、嬉しくもあると共に不満も抱いていた。

確かに、彼は頑張れる子だ。

だが、果たしてより頑張れる人間はより頑張らなければ……より耐えられる人間はより耐えなければいけないのだろうか？

仕事でミスした時や一度だけ嘘をついた時も、しばらくその事を気にするだけ繊細でもあつた彼。

その彼の背に、乗せられるからという理由でどんどん期待や義務を

乗せていくような周りが気に入らなかった。
それなのに、

——でも俺は、恐怖の大王の弟子は、それを認め、愛します——

自分も、そうしてしまっていた。

彼が一時の怒り程度で一ヶ月以上も誰かを傷つける様な事をできる人間じゃない事は分かっていた筈だ。

もっと、よく考えれば気づけたのではないか？

いや、考える必要もない、ただ修行の後のボロボロの体を引きずって帰って行く彼を抱きとめて無理にでも訳を聞きだしてしまえば……。

そう考えながら、事の成り行きに喜んでる自分に無性に腹が立つ。

件の妖怪の監視役である自分が、彼がした事を代わりにしたとしても、上手く言ったとは限らない。

仮に聞き届けられても、その場合、自分は監視役としての任を解かれてしまったかもしれない。

そうこう思考している内に、泣き虫が僅かに身じろぎし、目を覚ます。

「——ん……あれ、ここは？」

「……おお、目が覚めたか……修行中に倒れてしまったのだ」

少し躊躇った後、嘘を付く木の葉天狗。

泣き虫は「え？」と驚いたように身を起す。

「そんな……体に傷もないのに。
でも、そうだったけなあ……。
……あ、ナズ様——」

泣き虫の表情が申し訳なさそうなそれへと変わる。

今、彼の記憶の中では自分は一時の怒りで自分の事を思って行動してくれたナズーリンを一ヶ月以上も拒絶した事になっているのだ。

彼が何か言葉を発しようとして口を開いた所で、ナズーリンが半ば無理矢理彼を抱き寄せた。

「ありがとう……ごめんね」

「え？ ああ、ナズ様、俺は——」

「いいから、黙って……何も言わないで」

それからしばらくナズーリンは泣き虫を抱きしめたまま動かないでいた。

困惑していた様子の泣き虫だったが、やがて緊張を解く。

やがて、木の葉天狗が頭を搔いて立ち上がり、退室しかけたところ

「ちょっと待った」

「ん？　なんだナズーリンと……の？」

泣き虫を話してその木の葉天狗と向き合ったナズーリンの顔は真顔でありながら、有無を言わさぬような迫力があつた。

その表情を後ろで首を傾げる泣き虫の方には向けず、一つ、問うた。

「鞍馬山僧正坊、今、どこにいるかな？」

その頃、僧正坊と遮那王尊は外で月見ながらの酒に興じていた。

「——成程、そういう事か、しかし自分の考えを人に言わせるとは趣味が悪いな」

「いや、泣き虫はアレで年の割には知恵の回るヤツであつたぞ、ワシはヒント程度しか出しておらん」

「そうか……護法魔王尊様も毘沙門天様も気づいてはおられたのだからな」

「うむ、だが明らかこれはスキマ妖怪の仕込みだ。

故に躊躇があつたのだろうか……結局は蹴つても得がない、乗らざるを得まいよ。

これを見越して天魔を留めていたのか、流石にあれだけの存在を集めてバランスをとるだけの手腕はある」

「で、どうせならば修行として利用しようという考えに至つた訳か。

……情まで利用するとは、やはり良い趣味とはいえんな。

鼠が自分を責めるだろうが、明確な原因として『誰か』を用意すればそれも和らぐ、

全く、自らそれをせずとも、もっと器用なやり方があつたらうに。贖罪のつもりにしても不器用が過ぎるぞ」

そう言つて遮那王尊は杯を干し、苦笑しながら僧正坊を見やる。と、そこには珍しくキョトン、とした僧正坊の顔があつた。

「……………え？」

「いや、え？　つて……………え？」

場を沈黙が支配する。

それはしばらく続いたが、不意に飛んできた怒号に打ち碎かれる。

「そおオじょおオばおおオ！！ そオこかあアーーッ！！！」

二人が怒号の飛んできた方向をみやれば、月明かりに此方に向かつて滑空して突っ込んでくるネズミ妖怪が照らし出されていた。

「殿がとれたか、まあ良いが」

「……今回は一撃くらい喰らっておくべきだと思うぞ」

「むっ、護法魔王尊様にも似たような事を言われたが……まあ、仕方あるまいか。

あ、この杯だけ干しておこう」

その会話の数瞬後、ネズミ妖怪に名高き大天狗が蹴り飛ばされるといふ、世が世なら後世にも語り継がれる珍しい絵面を、遮那王尊は目にする事になった。

それからの日々は殆ど元通りとなった。

殆ど、というのは様々な所で細かい変化が生じたからで――

「——つまりだ、あの泣き虫の面倒を見るのが、貴殿のこれからの雑用仕事という訳だ」

「仮にもお客さんから預かってる大事なお弟子さんだからね、これも立派な仕事よ」

「こっちにやテメエなんざ必要ねえよ、俺も最近、二身駆けならできるようになったしな」

「……ごめんね、でも今回の事言い出したのコイツだから、俺がその分も働きやいいんだろ？ とか言いだしてね」

「な！？ テメ……バツカ！ だから気が回らねえ女だと——」

雑用仕事にも出られなくなった泣き虫の世話係がナズーリンの仕事になったり。

「ん？ ナズーリン殿か、どうだ彼の様子は？」

「いつも通り真面目にやってるよ、今は座学。」

「……ちよつと聞きたい事、というか習いたい事があるんだけど」

「構わんが、なんだ？」

常にどこか捻くれている所があったナズーリンが幾らか素直になったり。

「……何、その不思議そうな顔は？」

私がちゃんと傷の手当てしたらおかしいの？」

「あ、いや、そうじゃないんですけど、だってこの前は——」

「もう！……その時の事は忘れて！ いいね！？」

「ひぐッ、ッ、ごめんなさい」

「あ、ああ、ごめん、そんな強く言うつもりは——」

一見すればいつも通りやりとりにもどこか変化が見られたり。

「ちよつと、僧正坊」

「なんだ鼠、一発だけでは飽き足らんとでも言うか？」

「いや……よくよく考えたら、私、アンタにも礼を言つべきかなと思つて」

「む、ようやく気付いたか。」

そうだ、貴様のチンケな悩みとヤツのガキ臭い情をここまで有効利用してやったのだ。

ほれ、さっさと地に頭をつけて感謝しろ。

貴様の礼などいらんが、それはそれとして受け取ってやるう」

「……っ、のッ！」

「落ちつけナズーリン殿、からかわれているだけだ！

僧正坊様も、ニヤついてないで訂正してくだされ、もう！」

ナズーリンと僧正坊の関係がフランク（？）になったり。

「なんだ、あの鼠、僧正坊様に対してあの口の聞き様は……！」

「聞いておらんのか、あの鼠、ああ見えて僧正坊様を蹴り飛ばす程の武者者だとか」

「何、それは本当か！？……流石は毘沙門天様の懐刀。

成る程、あの鼠、いや、ナズーリン殿は今まで敢えて実力を隠していたと」

根も葉もない、変な噂が広がっていたり。

そんな変化を受けて、泣き虫の残りの修行の日々はあつと言つ間に過ぎ去つて行つた。

そして、別れの日。

弟子を迎えにくる筈の恐怖の大王を出迎える列の中に、泣き虫の隣に立つナズーリンの姿があつた。

再び恐怖の大王に会う事に委縮している大天狗もいる中で、彼女はある決意を持ってここに並んでいた。

恐怖の大王に文句の一つでもいつてやる。

いきなり、こんな子供をこんな所に放り込んで行つてしまった相手に対して、そんな事を思っていたのである。

恐怖の大王の登場は劇的だつた。

不意に宙に魔法陣のようなモノが顕れたと思うと、それが二つに割れる。

その向こう、見渡す限りの赤褐色の空と砂礫の舞う荒野を背景に、その中から恐怖の大王が歩み出てくる。

驚き、誰もが一瞬硬直する中、ただ一人、動き出していた。

「ししよーーー!」

満面の笑顔を浮かべて、泣き虫は恐怖の大王に向かって飛び付いて行った。

彼女は優しい表情でそれを受け止める。

「元気にしていたか？」

「はい、皆様のお蔭で。」

あの、コト様も来てるんですか？」

「ああ、厄を撒き散らす訳にもいかないから『道』の中で待ってるよ。」

そうだ、『道』はまだ未完成だが、時間を掛ければ彼もどこにも行けるようになったんだ。

後で祝ってあげるといい」

その光景に、ナズーリンは考えていた筈の文句を忘れてしまった。どこか納得いかない気持ちと脱力感とでため息をつく、隣に立っていた大天狗がそれに反応した。

「笑顔でいるとは言わんが、その不満顔は流石に引っ込めるべきだぞ鼠」

「……努力はするよ」

そのやりとりの内に恐怖の大王から離れた泣き虫は、鞍馬寺側の面々に向き直ると。

「皆様、大変お世話になりました、今までありがとうございます」

その言葉に僧正坊を始め、面々はそれぞれ頷く。

ただナズーリンだけは寂しさからか、どこか暗い表情をしていたが、妖怪と違い、人の一生は短い。

これから彼女はきっと幻想郷で元の仲間たちと過ごす事になるだろう。

だったら、きっと彼とは二度と――

「ナズ様、俺、楽しかったですよ。

本当にありがとうございました、それと――」

「うん？」

自分に向き直って挨拶をする泣き虫に、ナズーリンも暗い表情を引っ込めて、笑顔を繕って対する。

「……ナズ様、その恐いって気持ちは貴方の邪魔になるかもしれない。でも俺は、恐怖の大王の弟子は、それを認め、愛します。

だって嬉しいですもん、そう思ってくれるの。

えっと、きつと俺も師匠見たいなすごい人になって何処にいても会いに行けるなりますから――」

力強い、でも段々と力と自信を失っていくような声色、真摯にこちらの事を思ってくれる表情。

もう彼の記憶には無い筈のかつての出来事と重なるそれに、ナズーリンは吹き出してしまふ。

「……真面目に言ってるのに」

「あ、ごめんごめん」

しゅんと落ち込んでしまった彼に苦笑を向けながら、考える。ここで頷いてしまえば、それも彼の重荷になるだろうか。

いや、でもそこに恐怖がある限り、彼もそれを感じてしまふ。ならば――

「そっか、なら安心だね」

素直に、心の底から安堵してしまおう。

その言葉の信頼性はよく分かっているのだから。

「はい！」

満面の笑顔で頷く彼。

これが二人が最後にかわした会話だった。
妙な魔法陣の中へと入って行く彼の後姿をまだナズーリンは覚えて
いる。

そして、再会は叶った。

彼は護法魔王尊の思う所の『大人』にはまだなっていなかった。
ナズーリンが幻想郷にいる事に驚いていたのだから。

それを喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか、未だナズーリンの答え
は出ない。

外伝・鞍馬の泣き虫小僧5（後書き）

久しぶりなのに短い。

ちよつとレポートで更新停滞してしまいました。

いざ書きだそうとすると、文章を考えている筈なのに、頭の中でいつの間にかjavaのアルゴリズムの構成になつてしまうという奇病により、レポート終わってからもう少し苦戦しまして。

ともかく、これにて外伝は終了、本編に戻ります。

それでは、次話もお付き合いいただければ幸いです。

無縁の夢宴

僧正坊とナズーリンがちゃぶ台を占領してより、新たに予備の小机と座布団を監視役が並べたのが少し前。

現在、レミリアの脇には酒の入った壺が、目の前にはグラスとカップ、そしてがつくりと頂垂れている監視役の姿がある。彼が頂垂れるその理由、それは議論の場となったちゃぶ台から流れてくる『泣き虫小僧』の話だろう。

夜中、トイレに行く途中で迷って泣きだしたとか、

食事の際、嫌いな野菜を残していたのをあのネズミ妖怪に指摘されて泣きながら食べたとか、

空中歩行中に高く行き過ぎて腰を抜かし、通りすがりの天狗に下ろしてもらったとか、

正直、どれも以前の紅魔館での『恐怖の駆り手』の印象とはとても重ならない話だが、

聞こえてくる会話の流れと、目の前の本人の反応からしてまず間違いない同一人物である。

レミリアはため息をつき、グラスを口に運びながらちゃぶ台の方を見る。

「——で、あるから、厳し過ぎるくらいで丁度いい、の丁度いいから更に厳しすぎるくらいが妥当であるのだ。」

そのお蔭でヤツの好き嫌いも改善されたのではないか」

「だけど、それで失敗した事もあったじゃないか、確かあの時だった——」

ふと、大天狗（今は人間の老人の姿を取っている）が監視役の方をチラリと見て、ニヤと笑んだ。

そこでレミリアは気づく。

どうやら、大天狗は意図的に会話の流れを監視役の恥ずかしい過去の流出に誘導しているようだ。

——……ワシも似たようなものだが……——

アレはこういう事が。

小屋で初めて見た時とはまた違う様子で落ち込む監視役の姿をみていると、

レミリアはなんだか監視役に対する苛立ちと戦意、そして恐怖が脱力感と馬鹿らしさに代わって行くのを感じた。

そもそも、彼には『あんなモノ』を預けてしまっている。

その上で当主として云々言い出しても、更に自分の器を小さくしてしまうだけではないか。

レミリアは薄く、自嘲の色の混じった笑みを浮かべるともう一度ため息をついた。

「あ、すいません、ご当主殿……ご用でしたよね」

ため息がいつまでも頂垂れている事への無言の抗議に聞こえたのだろう、

監視役が慌てて顔を上げて声を掛けてくる。

「そ……用があつただけだね、どうしようかしら」

その様子がとても滑稽に映り、今度は楽しそうな微笑を浮かべながらレミリアは彼に向き直った。

いや、そうだったそうだった、恥ずかしい過去流出より、ずっと危惧すべき問題があつたじゃないか。

——修繕費は不要、いつかこの屈辱と合わせて貴方の体に払わせる、
だそうです——

どうすべきかな、これは……。

吸血鬼は強力な妖怪の例にもれず約束事には厳しい。
故に外の世界と幻想郷の条約を破って俺を襲う事もない、とは思っ
のだが。

万が一に襲われたら勝ち目は薄い。

その動機が誇りの全てを掛けるようなものや、生存の為の必死の攻撃等でない以上、本気を出せば追い払える筈だが、相手は秒速キロメートル単位で移動する身体能力を持つ吸血鬼である。

瞬間、一撃で仕留められてしまえばその目は消えうせる。

極端な話、今彼女は腕を一振りするだけで、俺に認識する暇も与えず、四肢の好きな所を刈り取っていけるのだ。

そんな相手に楽しそうな笑顔で「どうしようかしら」と言われたら多少、卑屈にもならざるを得ないだろう、うん、きっと。

「あの……できれば五体満足で済ませて欲しいな、なんて……」

事を變に荒立てて彼女を刺激しない為、議論（と言う名の俺の過去晒し）真っ最中の二名には聞こえないように小声でそう言う、ご当主殿は一瞬キョトンとした後、口元を押さえてクスクスと笑い始めてしまった。

「別に取って喰いやしないわよ。

本当はスperlカードルールに則った決闘でも申し込もうと思ってただけだね、止めたわ。

今のあなた見てたらなんだか馬鹿らしくなっちゃって」

……取って喰いやって、貴方あなたが言つと洒落にも比喻にもならないだろうて。

恐らくそう、という予想があつたとはいえ、やはり安堵した俺は、

ふう、とほつとしたため息をついた。

「そうね……でもその『ご当主殿』っていうのは止めて貰おうかしら。」

あんなモノを預けている以上、そう扱われても皮肉にしか思えないわ」

と、言う事はもう平気だから『恐怖』を返せ、という訳ではないのか。

まあ、それも当然か。

これはあくまで傾向だが、妖怪は存在の比重が精神に偏っている場合が多い。

それ故に肉体の破損は余程酷くなければ致命傷にはならないのだが、その分、精神的な傷は大きく影響する。

一度退治された際の恐怖の所為トラウマでその時の武器や戦法が、後々まで弱点となってしまう事であるくらいだ。

そんな妖怪達にとって恐怖を克服する、という事は人間がそうするよりも更に困難であるのだ。

「そうですか……では、スカーレット殿で」

「ここ、偶にフランも来るんでしょ、それじゃ紛らわしくないかしら。」

私もじっくりこないし、レミリアでいいわよ、レミリアで」

フラン、ああ、フランドール……妹君の事か。

しかし、それはなんだか人喰い妖怪と親しくなったみたいで気乗りがしないな。

人喰い妖怪への恐怖という抑止力。

それが俺の役目だが、そんな俺が人喰い妖怪と親しくなるのは……。いや、しかし強力な大妖怪とはいがみ合うよりはそちらの方が、効率的か？

一方的に変に尖って刺激するのな……。別に名前を呼ぶくらい――

「何を難しい顔をしている泣き虫小僧……。む、呑んでおらぬではないか。」

ほれ、ワシが手伝ってやろう」

「ちょ、僧正坊様、俺はまだみせいね――」

いつの間にか此方（俺の背後）に来ていた僧正坊殿が、片手で俺の顔を上に向かって固定すると、もう片手で酒壺から柄杓で酒を掬い、俺の口に流し込んだ。
うおなんか鼻に来る！？ アルコールってこんななのかな？

「が、ゲホッ、何するんですか、もう」

「時に吸血鬼、一つ提案がある。」

先ほど、こやつに『当主』として扱わずとも良い、と言っていたな。

どうせだ、今宵は皆立場を忘れた宴とせぬか。

小僧は『監視役』、ワシも鼠も……まあ、色々ややこしい立場でな。

色々と心労も溜まる訳だ、たまには役目を忘れるのもよからう」

俺の抗議の言葉を見殺しして、僧正坊様は信じられない事をのたまった。

「僧正坊様が……」

「……心労？」

「「んな馬鹿な」」

「……失礼な、ワシとて氣を使う時くらいあるのだぞ」

俺と（いつのまにか隣に来ていた）ナズ様のシンクロした胡散臭そうな反応に対して、珍しく僧正坊様の反論に力が無い。

「そこは置いておくとしても。」

立場を忘れるなんて駄目に決まってるじゃないですか。

なんで無縁塚の——」

「ああ、言わんとする事は分かる。

よりにも寄って幻想郷の犠牲者の眠る無縁塚の目の前で、と言うのだらう？」

しかしだ、あの塚が鎮めるは、糧となる以外に縁も得られず死ん

でいった者達。

その無縁仏を偲ぶ意を込めての、我々の既存の縁を一時おいやつての宴と言っならばどうだ？」

僧正坊様の提案を受けて、俺は悩む。

冥福を祈る事、供養をちゃんとしてやる事、そういう意味を込めた儀式は決して無意味ではない。

功德の上乗せだったり、地獄での刑期削減だったり、人生の『財』の少ない事が多い、幻想郷の食糧となった外来人にとつては特に有効な救済たり得る効果があるのだ。

そついう気持ちをちゃんと込めてくれるなら、そこまで反対する訳でもないが。

「……俺はそれで構いませんが、それではレミリア殿が——」

「構わないわ」

俺の予想に反して、ご当主——レミリア殿は了承の意を示す。

意外そうな顔をしているであろう俺の方をチラと見た後、彼女は僧正坊様に向かって応える。

「このヘタレた塚の守り役とある生意気な亡霊に対する私なりの礼よ。」

今の幻想郷の在り方はそれなりに気に入っているし、それに必要な彼らに意を向けるのもいいでしょう。

それに、そういうのも楽しそうだしね」

「ふむ……で、鼠、お前は構わんか？」

「私は……この子がいいなら」

ナズ様もまた、俺の方を見やってそう応える。

……この『子』か、正直勘弁してほしいな。
年齢差を考えれば仕方ないのかもれないが。

……どうやら場の流れは宴会開催に傾いているようだ。

そんな気分ではないのだが、まあ、俺は調理係に集中してればいいか。

「分かりました、じゃあ一旦表に出ますよ。

無縁塚に手を合わせてそれから、宴会の開始と言う事で」

しかし、既存の縁、立場を忘れた宴会か。

俺の呼び名、どうするかな監視役は駄目だろうし。

……おい、とか、お前でもいいのだが、やりづらいよな。

泣き虫は勘弁して欲しいし……はてさて。

考えながら、俺は皆を先導して扉を開いた。

数十分後

「ほれ、それくらい一氣に飲み干さんか」

「は、はい——プハッ……くう、酔っつてこういう感じなのか」

「あら、やればできるじゃないキョウ、今度は私がついで上げましよう」

「ちょっと、二人とも止めろって……大丈夫？　気持ち悪くない？」

小屋の中、宴会（というよりは飲み会に近いが）の場の流れは恐怖の駆り手に傍観者たる位置を取る事を許さなかった。

半ば、いや殆ど強引に酒を飲まされ、中心に座らされ、酒豪種族たる天狗と吸血鬼にその様を肴にされていた。

「止めてくれるな鼠、ちゃんと一度に吞ませる量くらい考えておるわ。」

……本当に忘れて騒ぐのが必要なのはこやつであるからな」

僧正坊は動き出しかけたナズーリンを制し、

監視役——この宴会の最中はキヨウという名を持つ事になった少年に聞こえぬよう、小さな声でそう言う。

意外そうな顔を浮かべて、動きを止めるナズーリンだったが、

「……ふむ、酔えば泣きだすタイプと思っていたが、そうでもないか？」

つまらん……まだ足りんのか？」

「一瞬でも感心しかけた私が馬鹿だったよ」

続く僧正坊の呟きを受けて、ため息を付き、それでも腰を下ろした。僧正坊に反感は覚えど、ならば代わりにどうするかと問われればなんともしえぬ。

抱いた微かな苛立ちを掻き消す為に、ナズーリンもまた杯を干していった。

数時間後

「——やっぱり野菜が少ないじゃないか！」

どうせ好きなモノばっか作って食べてるんだろ！

人間はちゃんと気を付けないと駄目なんだろ、こつこつの」

「あ、あの、そ、それは……。」

でも……昔に比べればちゃんと好き嫌いも少なく……」

「目を見て話せ！」

「じ、ごめんなさい」

「う……そんな目で見るな！」

やはりというべきか、酔っぱらったのはネズミ妖怪と人間であった。台所の方々をひっくり返しながら、傍に正座させた少年に、ナスーリンが説教を喰らわしている。

酔っぱらってそれぞれ気が大きくなったり、何故だか気弱になったり、

そんな二人の様子を見て、僧正坊は声を抑えながらも腹を抱えて笑い、レミリアは少し不思議そうな顔をしていた。

「これは……これは使える……ククク、いかん、腹が、腹が……」

「……本当にただの人間ね、こうして見ると」

「少なくともこの宴の間は……そういう約束であろう？」

「……そうだったわね」

「む、おい鼠、貴様そろそろ戻らねばならぬのではないか？」

その言葉を受けて、説教真っ最中だったナズーリンが「むむむ」と唸りを上げる。

そのまましばらく、悩む素振りを見せた後、少年に向き直り。

「……今日はこのくらいにしておくけど。

言った事ちゃんと守ってるか見に来るからね」

「……はい」

しゅんとして頷く少年の姿に満足したように頷くと。

ナズーリンはそのまま小屋を出ていこうとする。

と、去り際に――

「あ、じゃあレミリア、だっけ？」

その虐待天狗が、えゝっと、キョウを襲ったりしないように見ててね」

「いや待て、それは逆だろう、ワシは人の味方だぞ!？」

「……」

「なんだその胡散臭そうな視線は、む、貴様もか泣き虫」

「……ええ、わかったわ安心していきなさい」

「そこも待てい！ それでいいのか吸血鬼！？」

「あら、今は立場は関係ない筈だけど？」

「む……むむむむう」

唸り、そのまま黙り込んでしまった僧正坊を尻目に、ナズーリンはレミリアと笑みを交し、最後に少年に手を振り、少しふら付きながら小屋を後にした。

「ふふ、まあ、これはこれで楽しいかしらね」

「……不覚だ……おい泣き虫、こっちに来て注げ！！」

そしてまた、夜は更けていく。

「さっきはああ言ったけど、これはどうなのかしらね」

僧正坊が厠に立ち、今この場にはレミリアと酔いつぶれかけた少年しかいない。
半目を開けてちゃぶ台の上に顎を乗せた無防備な様子の目の前の相手に、
吸血鬼としてここまで恐れられていないのはどうかと考えかけて、止めた。

「……今は、関係ないものね」

相手が潰れかけているからだろうか。
滅多にない機会だからか、レミリアは少し自分らしからぬ事を言ってみる事にした。

「ちょっと聞いてくれるかしらキョウ。」

当主云々に拘っている癖に、それに伴うある恐怖をただの人間に肩代わりさせているような吸血鬼がいるのだけれど、どう思う？
あり得もしない、ちっばけな恐怖に――」

「そんな事言っちゃ駄目ですよ」

ガバと身を起こし、少年は少し焦点の定まらない、しかし力強い視線でレミリアを捉える。

「一人一人の恐怖は違っんです。」

妖怪、人間、神、厄、それぞれ傾向はあっても、やっぱり一人一人違う、同じ定規じゃ測れないんです。

だから、そのヒトが怖いと思ったら、その恐怖は確かに恐いんです。

それをちっぽけなんて言っちゃ駄目ですよ」

「なら、どうしたらいいのかしら。

自分の恐怖を認めて惨めにうずくまっただけでいいんです？」

言いながら、レミリアは自嘲的に笑う。

恐怖を大きなものと認めてしまえば、それに屈する事も肯定してしまふ事になるのではないか、

そんな意味を込めた言葉を、自分が言ってもなんの説得力もないのではないかと。

——不意に、少年はレミリアの片手を両手でとった。

「逆です、胸を張って下さい。

自分はそれくらいの重荷を背負って来たんだと。

それを、他者にじゃなくて、自分に認めさせるんです。

恐怖を大きなモノだと認めたら、越えられなくなってしまう、

そう思ってしまうかもしれませんけど、大丈夫です。

それだけのモノを抱いて来たのは自分なんです。

それを誇って、胸を張って、前を向いてください、きっとその方が進みやすいですから」

元気づける様な真剣な表情と声色。

酔っているからか、本当にお互いの立場を忘れてしまっているのだろっ。

でなければ、彼はこんな事は自分には言わない。
お互いの立場を気にしない妖怪退治屋など、どこぞの巫女くらいなものなのだから。

「全く、初めてよ、私に誇れだの胸を張れだの言った人間は、逆なら結構いるのだけれどね」

レミリアは笑みを浮かべて、そう応えると、
少年は安心したように、そのまま突っ伏して眠りに落ちていった。

翌日

「では、じゃあこの傘借りていくわよ」

「ああ、差し上げますよ、それくらい」

俺はレミリア殿を見送りに外へ出ていた。

ちなみに、僧正坊様は俺が目覚ますと同時にさっさと山に帰ってしまった。

ナズ様に至っては昨日の内に帰ってしまったようだが……覚えてないな。

「いいえ、ちゃんと返しにくるわよ。

新しく『借り』もできた事だし、それと一緒にね」

「――げ」

『借り』とは穏やかではない。

酔って何か失礼な事でもしたのだろうか、折角、この前の事は見逃してもらえたと言っのに。

「あ、あの、でも昨日のアレはお互いの立場を忘れた宴でしたし……」

「だから、ただのレミリアとしての『借り』よ」

「でしたら、この前と礼と合わせて帳消しって事で」

俺がそう言っと、レミリア殿は何故か少し驚いたような顔をした後、ニヤリと笑った。

「だめよ、それはそれ、これはこれだから、覚悟しておきなさい」

「……お手柔らかに頼みます」

別に逆鱗に触れた訳じゃないみたいだが……不気味だ。
そんな俺の不安を余所に、レミリア殿は背を向けて歩き出し、不意に振り返って別れの言葉を告げた。

「じゃあね、また会える事願ってるわ、キョウ」

「……俺はもうキョウじゃなくて監視役ですよ」

俺の指摘には応えず、彼女はそのまま去って行った。

持っている黒い傘の所為だろうか、浮かべた不敵な笑みの所為だろうか。

その時のレミリア殿は今までで一番、自信と威厳に満ちて見えたようないきがした。

無縁の夢宴（後書き）

ちよつとご都合主義が入ってしまったかな……。。

屍の燐火

ある日の昼下がり

今日は黒坊が来るであろう日であるので、いつものように適当なおやつを用意していた。

最近、好物ばかりのメニュースケジュールに変更を加えた為、おやつの楽しみが増している。

あの日からかなあ、何故だか食生活に気を使わにやらん強迫観念みたいなのが出てきたんだよね……。

と、羽ばたきの音が耳に届いてきた。

「お、来たか黒坊。

今日は団子を作ったんだが、あんことみたらしはどっちが——ど
うかしたか？」

小窓から小屋の中に飛び込んできた鳥、黒坊はその縁に留ったまま、
俺と小屋の外に交互に嘴を向けている。

……今回は慌てた様子は無いが。

「外に出ろってことか？」

俺の言葉を肯定する様に首を縦に振ると、チラと俺が作った団子の方を見やった後、外へ飛び立っていく。四つの団子を刺した串を手にとって一つ食べながら、俺も小屋の外へと出る……ちなみに俺はあんこ派だ。

外に出て見ると、黒坊は無限塚からちよつとだけ離れた所……俺が死体を埋葬してある一帯に降り立っていた。

「うん？　そこがどうかしたのか？　死肉喰らいたってんなら勘弁してくれ」

言いながら土葬した死体の現状をつい想像してしまった。

……口の中の団子が少し不味く感じる。

だが、黒坊は否定するように首を横に振ると、足の力ギ爪で土を少し掘り返して——うん？

「……誰かが掘り返して行ったって事か……」

よく見なければ気付かなかったが……そこら一帯に掘り返した後が様な痕跡が見受けられた。

俺の呟きに「その通り」とでも言う様に黒坊がカーッと一声鳴く。

「そうか……うん、確かめるしかない……よなあ。」

……これやるよ、黒坊、小屋の中にある奴も好きなだけ喰っていぞ、なんなら包んで同僚に持っていけ

俺はちよつとやらなきゃいけない事ができたからな、お蔭さまで」

俺がそう言いながら投げた団子を空中で捕まえると、黒坊はそのまま小屋の中へと入っていった。

……さて、スコップどこ置いてたっけな、場合によっちゃアレも持ってたこなきやなあ。

夕刻

「……ふむ、こんなものかな」

無縁塚の傍ら、ある一帯を正方形に囲むように儀礼剣を付きたてた四つの台座が置かれていた。

勿論、俺が用意したものだが、これを媒介にある結界を張ってある。誰かがこの一帯に入ろうとすると、その誰かに恐怖を感じさせ、同時に俺にそれを知らせる結界だ。

俺は大きな恐怖を抱きながらも思考ができるように自分にある式を仕込んであるが、

これはその式を考案してくれたヒトが「幻想郷で習得しておけ」と書いて持たせてくれた指導書の中にあつた術式の一つだ。

こんな事をしている理由は決まっている。

確かめた所、やはり埋葬された死体の内、幾つかが掘り返されてどこかへ持っていかれたようなのだ。

その犯人を突き止める為だ。

妖術の実験台とかにされている可能性も捨てきれない以上、調べて見なければ気分が悪い。

死体をどうしようが勝手だろ、と言われればそれまでかもしれないが、

少なくとも俺は俺の死体が妖怪の『捕食』の道具やら、その為の術の実験台に使われるのは御免だ。

幻想郷と外の世界の停戦条約の中で、俺にはこの小屋、あるいは俺の下まで辿りついた場合に限定して外来人を保護する権利が与えられているし、

「死体はモノ」と言われても、それならば俺の所有物と言う事で（気は乗らないが）やはり勝手には持つていかれないように主張できる。

……主張するかどうかは事情如何だが。

死肉喰らいの妖怪だとどうするかな……止めさせても人里の死体漁り出したら都合は悪そうだ。

ネクロマンサーだと……いや、そっち系統の魔法使いがいるとは聞いてない。

「ま……また今日来るとも限らんし、皆さんに気を付ける様に言っとかないとな」

……後で立ち入り禁止と警告の立て看板くらい作っとくか。

既に黒坊は団子が入ったと思われる包みを持って（俺は手伝っていない、とても器用だ）帰って行った。
今日の夕食の献立を考えながら俺が小屋のドアを開けようとしたその時だった。

微かな、恐怖の『声』が届いて来た。

一連の監視役の作業を密かに覗いていた妖怪がいた。

それこそ、無縁塚から死体を持ち去っていた犯人であるのだが、身を隠しながら、その妖怪は焦りを覚えていた。

監視役が用意したアレは結界の類のモノだろう。
折角、安定して死体を得られる場所を見つけたのに、これでは手が出せなくなってしまう。

破壊する事は容易いだろうが、相手は無縁塚周辺に棲む人喰い妖怪をして襲う隙がないと言わしめる退治屋である。

今まで知られずに死体を持ち去るだけでも苦労していたのに、そんな派手な動きをすれば間違いなく見つかってしまう。

そんな焦りが少しだけ恐怖に代わり始めた時、

退治屋は小屋の前で急に何か思い返したように方向転換し、小屋の裏手へと向かって行った。

妖怪は視界から隠れてしまった退治屋の事を一旦忘れてどうやってあの結界らしきモノを突破するかを考えていたのだが。

そんな妖怪の背後に、静かにどこからか地を這うように回り込んで来た黒い霧が集まり、弓矢で武装した兵達の姿を形作って行く。

妖怪は音もなく少しずつ数を増して行く兵に気づく事無く、ああでもないこうでもないと思惑しているまま……。

ふと、妖怪が小屋の方に注意を戻すと、小屋の裏手からまた姿を現しそのまま、真つすぐに妖怪の潜む場所へと歩いて来ている監視役の姿があった。

気づいた妖怪が慌てて逃げようと背後を向くと――

そこには地上から空中まで、妖怪を半包囲するようにズラリと展開し、弓に番えた矢の先を自分に向けている漆黒の弓兵達の姿があった。

妖怪が啞然としている内に、監視役はもうそこまで来ていて。

「こんにちは、いや、そろそろこんばんはかな。
尾の裂けた猫みたいだが、言葉は分かるだろ？
少し聞きたい事があるんだけどな」

にこやかな、されどどこか凄みのある笑顔で問う監視役に対し、
妖怪——尾の裂けた黒と赤の毛並みの猫は誤魔化し通す道を選んだ
のか、にゃ〜、と一声鳴いて応えただけだった。

監視役は表情を変えないまま、腰を下ろして視線を近付ける。
同時に兵隊がジリ、と少し、妖怪に近づいた。

「……そうか、そうくるか。」

さて、話は変わるがな、火車かしゃつて妖怪、知ってるか？
葬儀の場にいきなり乗り込んで死体を持ち去って行く妖怪だった
んだが。

これがな、猫の妖怪なんだよ……」

もはやその猫、いや、妖怪は監視役の方を見ていなかった。

視線は泳ぎ、悪あがきのように、にゃ、にゃ〜、と泣き声を上げる。

「まだとぼけるか。」

俺は恐怖の駆り手だ、今、そいつが恐れている事くらいは分かる。
だが、この能力がなくともそれだけビクビクしてりゃ気づかない
方がおかしいぞ」

笑顔のまま、口調だけが厳しくなった監視役に、ついに妖怪は諦めたようにがっくりと肩を落とすのだった。

小屋の中

「どうぞ、粗茶ですが」

「あ、どうも」

今、俺の目の前には件の死体持ち去りの犯人である妖怪、火車が赤髪のお下げの少女の姿を取って座っている。

やけに大人しい……逃げさず捕まえるにはアレしかなかったのだが、ちょっと脅かし過ぎただろうか。

まあ、いささか酷いがこれで事情は素直に喋ってくれるだろうし、交渉はやりやすいだろう。

汲んだお茶を出した後、そのままちゃぶ台を挟んだ彼女の真向かい

に座る。

「まずは殆ど脅すような形になってしまった事を謝罪します、大変、失礼いたしました。」

しかし、そちらも初めに逃げようとした事を考えれば、そういう手法を取った理由はご理解して頂きたい」

「そりゃまあ、うん、ご丁寧にどうも」

「さて、逃げようとしたと言う事は火車殿は――」

「あ、あたいは火焰猫 燐っていうんだけど、お燐で――」

「では火焰猫殿で。」

続けますが、火焰猫殿は俺、監視役の権利については知っている、という事ですね？」

わざとらしく明るい調子で差し込んできた言葉をぶった切って、話を継続する。

彼女には悪いが、この件の解決については、お友達感覚でなあなあにするつもりはない。

……俺の質問に対して黙ってコクと頷く彼女を見ると本当に俺が悪い事をしているような気分になるが。

「まあ、そちらにも事情があるのでしょう。」

俺も心理的抵抗はありますが、言い繕ってもやはり死体です、や

むを得ぬ事情と言う事であれば――」

「そ、そうなんだよお兄さん！ これは必要なんだって！

地底の旧地獄にももう手頃な死体は転がってないし、人里の墓荒らしたら絶対あのお姉さんにボコられるし……。

ホントにもうこしかないんだって！」

「……俺は死体が必要な理由について話していた筈ですが……。

そうせずには居られないから、という事で在れば妖怪としては妥当かも知れませんが、人間の俺は納得致しかねますよ」

「ああいや、ちゃんと理由はあるんだよ。

そっか、お兄さん新入りだもんね、地底について説明しとくよ」

新入り、と言われるとなんだか幻想郷の仲間になったみたいで反感が湧くが、

ここで突っ込むよりは続く説明の方に集中する事にした。

「――ふむ、灼熱地獄跡の火力調整に必要と」

「そう、これは地上の人間とっても重要なんだよ。」

地底が乱れると閉じ込めてる怨霊の管理も難しくなるからさ。

この前の比でない数の怨霊が出ていくかも知れないし、鬼達の機嫌も悪くなるかもしれないし――」

「この前？」

「いや、それはやっぱ気にしないで」

「……はあ。

他に方法は無いのですか？

火車も火の玉を繰る妖怪でしょう。

火力不足かもしれませんが、似たような能力を持ったより強力な妖怪の方とかは？」

「あゝ、いるんだけどね……ちょっとアレは強力過ぎでさあ、一回問題が発生しちゃって、

核融合とか言ってたっけ？ ……まあ、もう一度同じ事試すには方

々の目が、さ。

……ね、お兄さん、許してもらえないかなあゝ」

……核融合とは、まさか幻想郷こゝろにオーバーテクノロジーがあるとは思わなんだな。

両手を合わせて可愛らしくお願いする火焰猫殿を意識的に視界に納めないようにして、

俺は彼女の説明を思い返す。

……旧地獄、怨霊を閉じ込めた地か。

火力調整って死体でないと駄目なんだろうか、いや、駄目なんだろう

うな。

その手のモノは大抵『そういうモノ』として設計されているものだ。死体を使う、そこには儀式的な意味合いもあると考えるのが妥当だろう。

……こりゃあ、譲るべき、かなあ

「分かりました。

以後、無縁塚むぎづかに落ちてくる死体は一か所に纏めておきましょう。必要分であれば持つて行くのも認めます。

……その代わり、その時は無縁塚の前で手を合わせて頂きます」

「え、そんな事でいいの？

ありがとう、感謝するよ」

「……その感謝は無縁塚に向けてください」

「え？ ああ、うん、分かってるさ。

やゝ、これでご主人様にも怒られずにすむよ」

本当に分かってるんだろうか。

明るく可愛らしい笑顔でそう言う彼女に、俺は意図せずため息をついてしまう。

「ご主人様と言うと、地底の鬼ですか？

……確かにそれは恐いですね」

死体が必需品であるなら、彼女が手に入れられなければより強力な存在が取りに来るかもしれない。

……それが鬼であつたりしたら、俺だつて困る。

「ああいや、うちらのご主人様は鬼達じゃなくてさとり様さ」

「……やっ覚妖怪ですか」

「うん？ それなら平氣つて顔してるけど、珍しいね。
鬼程直接的じゃないにしても十分『怖い』妖怪じゃないの？」

「相性の問題です。」

世の中には自分の恐怖を武器にするような人間もいますからトラウマ

「えっと、どういう意味？」

「いえ、お氣になさらず。」

……さて、ではこれで話は纏まったという事で――」

「そろそろ夕食にしないかね？」

「「！？」」

不意に会話に聞きなれた男性の声が割り込んできた。

……気づかぬ内に川男、元さんがちやぶ台についていたのだ。

「……お茶も出さないですみませんが、いつからそこにいました？」

「ついさっきだよ、私の感覚で言う所のついさっきだ」

それっていつだよ？

正確には知らないが元さんは相当長く生きてきた妖怪の筈だ。

わざとらしく「私の感覚」なんてつけるって事は「ついさっき」ではないという事だろう。

元さんは恐らく不満が表に出ているであろう俺の顔を見てクククと笑う。

「いや、すまない。

お詫びと言ってはなんだが、差し入れの菓子を持ってきたぞ」

「……夕飯、食べていきますか？」

「是非頼む」

決してそれに誤魔化された訳ではないが、

元さんが手渡して来たスーパーのビニール袋の中の菓子はチョコレート初め、俺の好物ばかりだった。

素直に喜んで不満を納めるのもいいだろう、決して誤魔化された訳ではない。

「え、えーっと。

兎に角、話は纏まったんだよね。

……とりあえず、あの結界みたいなもの取って欲しいんだけどさ」

「あ、ああ、そうでしたね。

それではちよっと待っててください、今解除してきますんで」

すっかり忘れてしまっていた結界を解除しに立ちあがり小屋を出た。
……妥協を選んだ以上、無縁塚の前で謝っておかなきゃいけないしな。

慣れない術式の癖、その日仕掛けた結界をその日に取り除くという作業をした上ですぐに夕飯の支度をする事になった俺は、
元さんから貰った外の世界の菓子を気に入り、
そのまま自然な流れで夕飯の席に着いている火焰描殿にツッコむにはちよっと疲れ過ぎていた。

……ちなみに、やはりというか、海の魚は好評だった。

断固として猫マンマを止めさせた俺は、ひよっとして器の小さい男なんだろうが、

別れ際、そんなどうでもいい疑問が浮かんだりした。

残酷な話

ある日の正午頃・八雲邸

「お断りします」

客に対する為の部屋と思われる和室、俺は出された茶に手を出す事もなく。

目の前で腹の読めない笑顔を浮かべるスキマ妖怪に、迷いなく言い放っていた。

「あら、つれないのね。」

理由から聞かせてもらえるかしら？」

つられてたまるか。

わざわざ自宅まで呼び寄せるくらいだから何の用かと思えば……。

「俺は幻想郷の住人ではありません。」

権利その他の問題は条約に従って解決すればよい筈です。

スペルカードルールに基づいた決闘方法に対応する必要はないかと」

「ふふ、紅魔館で好き勝手暴れたのは誰だったかしらね？」

……まあ、そうなるよな。

「……しかし、元々それらの決闘、いや決闘ごっこはお互いの同意の上のモノでしょう。」

俺にそれをする意志がなければ、意味がないかと」

「命がけの戦いよりそっちで対応できるならその方がいいでしょう？
貴方の首を取って名を上げてやろうとか、気に入らないから倒してやろうとか思う妖怪も多分、できるならそっちを選ぶわ」

「……昨日、俺が追い払った低級妖怪達のような連中も、ですか？」

「もしくは、虐められた主人の為に引つ掻いてくる猫とかも、ね」

……数分前の事だ。

八雲殿がお茶を入れに席を立っている時、俺は化け猫らしき少女に襲われた。

どうやら俺が「ランしゃま」を虐めたのが原因らしく、随分と口汚く罵られた。

繰り出される攻撃は……まあ、最初の奇襲を除けば部屋と家具に気を使いながらも防げるレベルだったが、

どう対応したものか、と考えている内にその少女を、「ランしゃま」

——主らしき女性が止めた。

その女性には見覚えがあった、『恐騎来寇』で最も手ごわかった相手、式神憑きの九尾の狐だ。

謝りながら少女を引っ張って行く彼女の俺を見る目は完全に怯えきっていた。

……普段はお茶出しも彼女がやるのだろうな、客が俺でなければ。

成程、虐めたとはあながち間違いではないだろう。

執拗に恐怖を植え付けたからな、俺も必死だったが、そんな事はやられる側に関係ない。

なんたつて、幻想郷にとって俺は調和を乱しかねない侵略者な訳だから。

「ごめんなさいね、後でキツク言っておくわ」

「はて、なんの事やら、分かりませんが」

「……そ、ならそういう事しておきましょう」

実を言えば、先日喰らう気で襲い掛かってきた低級妖怪達やあの少女の対応に、俺は安堵のようなモノを覚えていた。

……それこそが、俺が向けられるべき『正常』な反応のように思えたのだ。

乱暴な言い方をしてしまえば、幻想郷の人と妖怪の共存は生贄の上に立っているモノだ。

妖怪達は配給される『人間^{えび}』を喰らいながら、一方でなんでもない

ように人里に出向き、人と仲良く談笑していたりする事もある。
勿論、殺伐とした関係が構築されるよりずっといい事だ、きっとその在り方は『最適』だろう。

ただ、それは俺の『正常』とはいささか食い違ふ。

俺の存在についてもそうだった、誰からも、強い拒絶が感じられなかった。

まるで幻想郷が侵略者である俺さえも受け容れようとしているように。

好ましい筈の事、気にしても仕方ないと言われれば……その通りなのかもしれないが。

「一応考えておいてね、スペルカードの事。

……でも、まあ、貴方がそう思うならそれでもいいわ。

在り方は好きに選びなさい、幻想郷は全てを受け容れるから」

……全てを受け容れる、ね。

「それはそれは……なんとも残酷な話ですな」

「あら、気が合うのね」

「……御冗談を」

半ば吐き捨てるような言い方になってしまった俺の言葉に、

八雲殿は相変わらずの笑みを崩さず、肩すくめただけだった。

同時刻・無縁塚の小屋

「おい、監視役や〜い！……ありゃ、留守なのかね？」

死神、小野塚小町がドアを叩きながら呼びかけるが、返事は無かった。

この小屋は彼女にとって、寝っ転がりながら注文するだけでただで飲み物が出てくる、丁度よい休憩所のような物だ。

最近は仕事を忘れたりしないように、適度なタイミングでのお小言のようなサービス（？）までつくようになった。

今日ものんびんだらりと過ごさせてもらうつもりだったのだが……。留守のようでは仕方ない。

効率よく休憩できないのでは仕事の効率も上がらないだろう、
そう自分に言い聞かせてどこかへ（職場ではない）ぶらりと飛んで
行こうと踵を返した所で。

「ありゃ？」

「「アレ？」」

「——む」

死神とはまた別の方向から、人里の守り手たる獣人と、紅魔館の当
主の妹と門番がそれぞれ歩んできていた。

死神、吸血鬼、人里の守り手、お互いに噂くらいで人相は知ってい
た。

それぞれがそれぞれの理由で、監視役に危害を加えてもおかしくな
い面子である事が、それぞれの頭をよぎる。

もつとも、その条件には幻想郷の全ての存在が当てはまりかねない
訳だが。

それが一瞬の静寂を生んだのだが。

「彼は留守のようだな。」

どうだね、中で持たせてもらおうか？

お茶くらいは私が淹れてもよいが」

死神の背後、小屋のドアのすぐ近くから、スーツ姿の中年男性が面々に声を掛けた。

「「「「誰？」「」「」

「綾川元……外の世界の妖怪でね、監視役の彼とはそれなりの付き合いだ。」

「……さあ、上がらせてもらおう。」

彼が出向いた場所には心当たりがある、すぐに戻ってくるさ」

彼は警戒心むき出しの視線にも落ちついた会釈で応じ、そのまま小屋のドアを開けて中へと上がって行く。

残された面々が戸惑いながら顔を見合わせるのを尻目に。

霧の湖のほとり

「頂きます」

湖畔の傍で携えていた弁当を開いて昼食とする。

しかし、湖の向こうのおぼろげな洋館が……中々いい景色だな。

……まあ、吸血鬼の住まいと考えると少し不気味だが。

指定された時間を考えて弁当を作って来て良かった。

「お昼御飯食べていく？」と八雲殿に聞かれた時は何の冗談かと思つた。

……実際、半分は冗談だったのだろうが。

俺には自分に対して怯えきつた女性や、

敵意を剥き出しにしている少女のいる所でゆっくり飯を食う程の度胸は無い。

一口、タコさんウインナーを口にした所で、

——不意に感じた嫌な予感に、身を伏せた。

同時にさっきまで俺の頭のあつた場所を光の弾のようなモノが通過していく。

……アレくらいなら別に当たっても痛い程度だろうが。

振り返れば、翼の生えた小さな女の子が「やーいやーい」と安い挑発をかましてきている。

妖精か——悪戯好きだからなあ、アレ。

まあ、これくらいならまだ可愛いモノか、付き合つてやるのもいいだろう。

俺はそう考えながら、手帳と鉛筆を取りだしていた。

数分後

弁当をその場に置いて妖精を追いかけたのだが、案の定、しばらくして見失った。

広範囲に恐怖感染を使つて『声』を辿れば見つけられるが、これくらいならそこまで目くじらを立てる事もないだろう。

そう思い、弁当を置いて行つた筈の所に戻ると、

そこには何もなく、地面に大きく「ばーか」と描かれているだけだった。

やれやれ、と頬を掻きながら、思わずため息がこぼれ出る。

「全く、分かりやすいんだから」

もう一度だけ、湖を眺め、俺は帰路へと戻って行つた。

無縁塚の小屋

「——こうして、一件落着きましたとき、めでたしめでたし」

「「お」」

紅魔館組が声を上げて拍手する。

小町と慧音もそれぞれ感心した様子で頷いていた。

「川男……流れの傍らにて物語を聞かせる妖怪ね。
成程、なかなか上手いもんじゃないか」

「むむむ、人に話を聞かせるにはやはりそういう技能が必要なのだろうか」

「はは、お褒めに預かり光栄だよ。
本来の私の得意分野は怪談なのだが……この面子にしてもあまり、
ね」

ちやぶ台を囲み、それぞれのお茶と菓子を目の前に、川男が時間つぶしにと語る物語に聞き入っていた。

流石に「そういう妖怪」である彼の物語は面白く、面々は引き込まれる。

「ねえねえ、他のお話は？」

催促するように、目が輝かせながらそう問ってくるフランドールに元は苦笑しながら、考えるように顎に手を当てる。

「そうだね、じゃあ次は……ある神様と人間の少年の話でも、してみようかな？」

川男は一瞬だけ慧音に目を止めてから、ニヤリと笑みを浮かべて、そう言った。

そして彼は語りだす。

ある疎まれた男から生まれた事の神と、ある人間の子が出会った所から、物語は始まる。

そこに居るだけで災厄を撒き散らす存在が人間の子に励まされ、時に励まし、お互いに協力して思考錯誤しながら人を助けていく。本当なら人に近寄る事も許されない筈なのに、人の為に戦おうとする神と、臆病者ながら成長して行く少年の友情の物語。

他の三人が先ほどと同じように聞き入って行く中で、慧音は動揺していた。

この物語の少年は妖怪退治屋ではないし、舞台も現代の外の世界ではないように思える、だが、これは――。

やがて、物語は少年が遠い異国へ旅立つ事で終わりを迎えた。

やはり先ほどと同じように称賛の言葉を贈る三人に礼を返し、

「どうかね、実際にモデルのいる物語なのだが、気に入ってもらえたかね？」

只一人、黙り込んでいた慧音に、川男は笑顔でそう、問いかけた。

霧の湖のほとり

「やった、大成功だね」

「ふふん、当然よ、私達の作戦は完璧なんだから」

5人程の妖精がハイタッチをかわしている。

馬鹿な人間を騙してそのお昼御飯を奪ってやったという大戦果の祝賀会である。

実際、相手が多くの人喰い妖怪にとってのトラウマとなっている『恐怖の駆り手』である事を考えれば、妖精である彼女らにとっては成し得難い偉業であるのだが、そんな事は知りもしない。

「じゃあ、早速、戦利品を――」

「アレ？　なんか紙ついてるよ？……えっと、おべんとうのたべかた？」

妖精の中で文字の読めるもの（「ばーか」と書いたもの）が弁当箱の蓋に貼り付けてあった手帳のページを切り取った数枚のメモに目をつけた。

「ふふん、便利じゃん、そんなのついてるんだ。
ちよつと読んでみてよ」

「うん、えつとまずは、手を合わせて、いただきます、と言っ」

「……いただきます」

「えつと、今度は箸の正しい持ち方だって、ほら、絵がついてる。

——えつと、ここがこうだから……アレ？」

「ちょっと貸して見て、えつと、ホラ、こうでしょ……摘まめない」

「じゃあ、今度私ね……よつと、できたー！」

「でも、絵と持ち方違うよ？ えつと、右手がこっちだから——」

妖精に食事は必要ない。

それでも、人間の真似をして、食べる事はある。

どうせなら、箸の正しい使い方くらい覚えていて欲しいと、なんとなく思った監視役の置き土産であった。

無縁塚の小屋

「何このカオス」

感じた気配に、警戒しながら小屋を開けた俺は、そう呟かずにはいられなかった。

「おー邪魔してるよー」

「あ、おかえりー」

「おじゃましてまゝす」

「すまない、勝手に上がってしまったて」

「許可したのは私だ。

とりあえず謝っておこう。

それはそれとして、君は昼食は済んだかね？

まだなら……ほれ、君の分もあるぞ」

そう言つて元さんは大手チェーンのハンバーガーショップの紙袋を差し出してくる。

……ぐ、腹が減っているのになんというタイミング。

だが、これを受け取ったらなんか流れるに元さんに文句が付けられなくなってしまう。

「結構美味しかったですよ」

俺の沈黙をどう取ったのか、そんな言葉も聞こえてくる。
いえね、そういう問題じゃないんですよ門番殿。

「まあまあ、このおっさんも良かれと思ってやった事だ。
細かいことは気にせずいこうさね」

小野塚さんは分かかっていていつてるな。
寝転がってジューズ飲みながら漫画読んでる貴方は本当に気にして
なさそうですね。

「ねえねえ、半分私が貰ってもいい？」

とどめとばかりに目をキラキラさせながら妹君がそう問いかけてく
る。

ああ、貴殿も気に入ったんですね、ジャンクフード。

「……頂きます。」

では、妹君、半分に分けましょうか」

元より、流れは俺にはなかったようだ。
下手な意地張ってないで諦めてしまおう……ん？

「どうかしましたか？ 上白沢さん」

「……ああ、なんでもない」

なんだか元気がないな。

いつもは俺よりは明るい（あるいはそう見せかける）のに。

俺もちやぶ台に付き、妹君とハンバーガーを半分ずつ食べながら問う。

「……食べ終わったら俺は塚の掃除に出ますが……」。

何か用意して欲しいモノがあったら今の内に言ってください」

「じゃあ、カフェオレだっけ？ あれだけ淹れといて」

「分かりしました」

「あ、じゃあわはひへふらつてあふえようふあ？」

「……口に物を入れた状態で喋っちゃいけませんよ。」

手伝うって言ったって……まだ日は出てますよ、傘を持ちながらでは流石にやりづらいでしょ。

お気持ちだけ受け取っておきます、どうもありがとう」

「んっ……ふああいいや、ふおおいたひまひふえ」

「聞いちゃいませんね」

構わず食べカスを散らしながら明るい笑顔で応える妹君。

……見ほれる程の可愛い美少女だが、俺の場合、吸血鬼でなければという前提がそれにつく。

ご当主殿から回収した彼女と敵対する事に対する『恐怖』はあるが、まあ、恐怖の駆り手がどうこうなるレベルではない。

チラと目をやれば門番殿は座ったまま眠っている。

ああ、位置取りが悪かったな、丁度窓からの日の光が当たる暖かい場所……あそこじゃ俺も眠くなる。

しかし、これは貴殿の仕事でしょうが。

ため息を付きながら俺はポケットからハンカチを取り出す。

「……ちよつと妹君、口元拭きますから動かないで下さい」

両手にしっかりとハンバーガーを握りしめた彼女の手はソースやらで汚れていた為、仕方なしに俺が拭いてやる事にする。

……ハンバーガーの包装紙も渡したのに迷いなく引っぱがしてたかな、汚れないように気を付けて指先で食べている俺が馬鹿みたいだ。

「はい、今度からは気をつけてくださいね」

「うん！」

元気に頷いてハンバーガーにかぶり付き――

「ふぁりふぁふぉ――あ」

再び食べカスを散らす妹君。

……ちよつとイラッとした俺は悪くないと信じたい。
元さんや小野塚さんみたく、笑って済ませるのが大人なんだろうけどさ。

……同じように上白沢さんもクスリと笑っていたのに、なんとなく、安心した。

「監視役君」

「はい？」

あの後、妹君の代わりに上白沢さんが掃除の手伝いを買って出てくれた。

小屋の中では川男たる元さんの物語りが展開中なのだろう、他の人たちはそつちを聞いている。

「君は……なんというか、やはりお人好しだな」

そびえ立つ石を挟んで向こう側にいる上白沢さんの顔は見えない。俺は塚を磨く雑巾を持つ手を止めずに応える。

「お人好し、ですか。」

「……便利な言葉ですよね」

、
すべき自制を取り払ってしまうような感情的行動も、その一言で美しく取り繕えてしまうような――

って、俺は何を言っているんだ。

褒めて貰えた（つばい）んだから素直に喜んでおけばいいモノを、こんな捻くれた答えをして……。

「ああ、いや、なんと言いますか。」

お人好しかと問われて頷くには少しばかり決意を要しますので、ちよつと誤魔化させて頂いた訳で――」

石の向こうからクスクスと笑い声が聞こえてくる。

「そうか、すまなかつたな」

「え、えっと、こちらこそ」

結局、会話はそれきりだった。

二人で塚を一通り掃除し終わった頃には既に小野塚さんは仕事に、紅魔館の二人は帰路に、

そして、元さんは恐らく外の世界へと、小屋から出て戻って行った後で。

「それでは、私も帰るとしよう。

妹紅が代わりに人里に居てくれているが、あまり留守にすると私が落ちつかないしな」

「そうですか、ありがとうございます。

おかげで掃除はかどりましたよ」

それなら来なくてもいいのに、なんて馬鹿な返事を呑みこんで、俺は笑顔でそう応える。

上白沢さんは少しだけ迷う仕草を見せた後、「それじゃ」と言っ
て飛んで行った。

……なんだろう、今日の彼女は終始様子がおかしかったように見え
たが。

考えすぎか……そもそも俺にそこまで見分ける程の付き合いの長さ
もないだろうに。

そう、考えて思考を切り換え、俺は小屋へと戻った。

……さて、今晚のご飯は早めに、豪華に、それで行こうか。

非常識の中の常識

鬼と呼ばれる種族が在る。

妖怪の中でも特に強い種族だ。

あるいは、その強さ故に『鬼』という名で呼ばれるようになったのかも知れない。

強いモノとの力比べを好み、嘘は言わず、約束は絶対に破らない、正々堂々たる種族。

その昔は強者の噂があれば、人の所へもフラツと表れては力比べを挑んでいたという。

まあ、普通は鬼どころか『ちょっと強い妖怪』に勝てるような人間だってそうそう居ない訳で……。

殆どの場合、人間が負けて、どこかへと連れ去られていったそう
な。

しかし、稀に人間が勝つと、鬼が持つ独自の技術からなる道具を得られたらしい。

それは人々に多大な恩恵をもたらした事もあったと言う。

あるいは、そのやりとりこそが、人と鬼の絆であったのだろう、
そう言う者もいる。

やがて時を経る中で、人は『鬼退治』の方法を見つける。

その殆どは正々堂々とは対極の、卑怯な戦術だったようだ。

当時の退治屋達は鬼を罫に嵌め、騙し、多勢を恃んで討ち果たして行った。

鬼達はそんな人々に愛想を尽かし、どこかへと去って行った。

……これが外の世界で知る限りの俺の鬼と人に関する歴史だ。
幻想郷でも似たような歴史が残っているらしい。

今では『鬼退治』の方法は幻想郷には現存していないらしい。
脅威がなくなればその対処法ごと忘れ去られていく、その点は幻想郷も変わらないのかもしれない。

ある日の朝・無縁塚の小屋

「……八雲殿は、本気ですか？」

俺の、驚愕のあまり途切れるようなかすれ声での問に、朝ごはんを準備し始める直前で現れた元さんは当然の様に頷き、応える

「ああ、本気だろうね。」

そこまで驚く事かい？
……あ、おかわり」

俺はすぐに反論する。

茶碗を受け取り、ご飯を盛りながら、だが。

「狂気の沙汰ですよ！

当八^{とつや}さんを幻想郷に入れるなんて……。

八雲殿が強力なだけでなく、聡明な妖怪であるのは認めます。
しかし、あの人は……」

五七^{いつなま}間 当八^{やひち}…… 外の世界の妖怪退治屋の中ではかなりの有名人だ。

式に関しては並ぶもの無き知識を持っており、間違いなく強力な妖怪退治屋である。

俺の心に仕込んだ式だって彼の考案したモノである。

種族としての魔法使いと化した訳ではないのに、自らの体全体に独自の式を仕込み、あらゆる身体活動システムに手を加え長い寿命を得ている。

妖怪でもなければ、厳密な意味では人間でもない、唯一無二の種族と言ってもいい。

だが、彼が有名である理由は他にもある。

彼はどこまでも妖怪退治屋なのだ。

卑怯と残酷の限りを尽くしてでも、彼は人に害を与える妖怪を狩

る。

……その妖怪に攻撃の意志が無く、ただ人に認められたいと願っているだけだとしても、幻想の記憶を呼び返す可能性が在れば容赦なく始末する。

穏便な手段を探る暇があれば次の妖怪を狩りに行く、そういう人だ。

だから、彼は自身がそう自称する事もあり『種族としての妖怪退治屋』とまで呼ばれている。

長年の月日で経験も積み、深い知識を備え、妖怪にとって敵対的な信念で行動する彼……。

いくらなんでも危険すぎる。

「彼なら、あらゆる手段で以って妖怪を殺そうとしますよ？」

「『妖怪を殺す事』が手段だよ、人を護る為の、ね。

その辺はむしろ君より上手くやりそうな気がするがね」

「……と俺も思いかけるから危ないんです。

あの人なら裏を掻いて何かしでかしかねない」

「まあ、ちょっとした私用を果たす為の一週間程度の滞在のつもりらしいし。

正当防衛以外では妖怪を攻撃しない、と約束しているらしい。もし破ればスキマ妖怪等の強力な妖怪も彼を攻撃する事になっている」

「約束は平気でやぶりますよ、むしろ作戦に組み込みかかねない」

彼の事を悪く言うつもりはない。

だが、決して妖怪とは、そして半ば妖怪が支配する幻想郷とは相容れない存在だと言わざるを得ない。

正直、彼が八雲殿と交渉したという事だけで驚きなのだ。
できた、ではなく、した、という事で。

プライドもへったくれも無い人だが、間違いなく人の味方で、俺よりも賢い。

そう言う意味では、俺の心配は筋違いなのかも知れないが。
もし『幻想郷崩壊』で出る犠牲と『これからずっと幻想郷を維持する』為に必要な犠牲を天秤にかけ、後者に傾けば彼は、幻想郷を打ち壊す為に行動しだしかねない。

……正直に言ってしまえば、それが間違いなく成功するならそれでも良い。

彼がそう考えたなら、恐らくその通りなのだろうし、俺はそれに加担こそせずとも妨害するつもりもない。

しかし、スキマ妖怪を向こうにしてそれが成功するとは考えられない。

中途半端に失敗すれば、どんな被害が出るかも分からないし……
彼も殺されてしまう。

彼も其処の所は分かっている筈なのだが、彼は確率論で見込みが低くても無茶をする事が多い。

……どうなるか分からない、だからこそ危険だと言う事だけは分

かる。

「どうこう言っても仕方ないさ。

これは決定事項だ、彼はもう幻想郷に来る。

あ、彼の滞在予定地はここになってるから」

「……まあ、妥当でしょう。

もう来るとは、具体的にはいつ？」

「さあてねえ、もうついてもいい頃なんだけど——」

そんな元さんの言葉に應えるように、小屋のドアがコンコン、とノックされる。

おかわりをよそった茶碗を元さんに渡してから、玄関に行き、恐る恐るドアを開けると——

「ど、どうも」

そこに居たのは外来人らしい格好の普通の青年だった。

話の流れからなんとなく当八さんがそこにいるような気がしていた俺は、ふうと息を吐いた。

しかし、随分と余裕がある感じだな。

自殺志願者の様には見えないし、たまたま入りこんでしまった人

か？

運よく妖怪に襲われなかったにしても、パニックであってもおかしくない筈だが、

……事情を知る誰かが保護でもしてくれな、け、れ……ば……。

その青年の後ろからゆらり、とまた別の誰かが姿を現す。

「やあ、久しぶりだね。

彼とは途中であつただけ……。

人里よりこっちの方が近かったから連れてこさせてもらったよ。構わないだろう？ 人を護るのは妖怪退治屋の仕事なんだから」

穏やかな笑みを浮かべ、優しげな眼差しにどこか物憂げな雰囲気も持つ美青年。

白い肌に刻まれた、その全てが術的な意味を持つ全身の刺青。大きな黒いコートに半ば着られるように立つ姿は間違いなく――

「お久しぶりです。

勿論、構いませんよ。

ただ、当八さんが傍に居る限り、どこでも安全だろうとは思いますが、

……無茶をしなければ、ですが」

かの『妖怪退治屋』当人だ。

数分後

「へえ、じゃあ、おじさんも妖怪だったんすね」

「まあね、川男……と言ってもマイナーか。

山男とか大男とか、入道というと分かるかな、まあ、そういう系統だよ。

……人間よりは力がある、ほら——」

そう言つて、元さんはちやぶ台を人差し指と中指で挟み、傾けずに持ち上げる……上に乗った四人分の朝食ごと。

「ちょっと、行儀悪いですよ。

……元さんは人に危害を加えませんが——」

「おどかすくらいはよくやるがね……あ、みそ汁おかわり」

「……先ほど説明した様に、そういう妖怪は少数派ですから気を付けなきゃいけません——」

「もう少し豆腐多めで」

「……」

文句をいつてやりたいが、元さんはこの小屋にお菓子や食材その他を持ち込んでくれるスポンサー様だからそうもいかないんだよな。

四人に増えた朝食の席。

俺は当八さんが連れてきた外来人さんに妖怪と幻想郷についての説明を行っていた。

元さんが人間離れた技能を幾らか見せつけて妖怪の存在はすんなり受け入れてもらえたのだが――

「うーん……でも、言葉は通じるんだよね？
それだったら、一度話してみたいけどなあ。
平和に済むならそれが一番だろ？」

困った。

個人的にこういう思想を持つ人は嫌いではない、むしろ好む所にあるが……。

まあ、この現物を目の前にして警戒しろってのも難しいモノがあるだろうな。
はじめさん

「それは人の理屈です。
妖怪によって個体差はありますが、人とは根本から違う価値観を持つ事もあります。」

貴方が当然の様に平和が一番と考えるように、妖怪と人間は殺し合いこそ一番と考えている者もいます」

「でも、その価値観の違いを埋める為に話し合いがあるんじゃないか」

「ですから、価値観の違いを埋める事に価値を見出す事自体が――」

「いいじゃないか。

人として、彼の考え方は悪くないと思うよ。

最初からそういうモノだって教え込むより、偏見のない状態で自分で判断してもらった方がいいんじゃないかな？」

静かに、お上品を絵に描いた様な仕草で食事を取り続けていた当八さんが会話に入ってきた。

予想に反した言葉だ、妖怪の危険性は貴方が一番分かってるだろうに。

「予備知識もなしでは危険すぎます」

「大丈夫だよ、俺が守ればいい、その為にいるんだから。

それに、俺たちじゃどうしても退治屋の常識が混ざるだろう、

同じような境遇の人がいる人里でそういう知識を教えてもらう方が効率的だ」

……言っている事は筋が通っている。

ここは当八さんの言に従っておくか。

「まあ、そういう事なら……。えと、それでいいですか？」

「俺は案内してもらう身だし、特に文句はないよ」

案内、か。

護衛としての意味合いの方が強いのは分かってないな……。少し不安だ。

「さて、事情の説明も済んだし、朝食が済んだら彼を人里まで送るとうかが。」

俺が行くから君はここで――」

「いえ、俺もついて行かせてもらいます」

有無を言わさぬ気を込めて（みたつもりで）同行を申し出た。

当八さんから目を離す訳にはいかない、四六時中くっ付いている訳にも行かないだろうが、出来る限り監視しておかなくては。

それに対して当八さんはフツと様になる笑みを浮かべて「そう」と呟いただけで……。なんだか肩すかしを喰らった気分になったのだが。

「当八君、本当にそれでいいのかね」

俺の代わりに元さんが確認するように問うたが……なんだか意味深に聞こえるな。

「……まだ仕込みの段階だからね。
どうなるかと、特に不都合はないよ」

「すみません、俺にも意味が分かる様に話してもらえますか？
……特に、何を企んでいるかが分かる様に」

流石に言葉を差し挟まさせてもらう。

俺以上に意味が分からずあたふたしている外来人さんには悪いが、そちら気遣っている余裕は無い。

「君に付いてきてもらうかどうか、っていう話だよ。
企みだなんて、彼の護衛計画以外に何があるんだい？」

「だから、ついていくって言っているでしょう。
……その言葉、信じますよ」

「本当に？ 信じられるのかい？」

微笑を浮かべて、茶化すように言う当八さん……本当に様になるな、これじゃ俺が悪役だ。

言葉の綾です、と応えるべきかどうか迷ったが、この場は流す事

にした。

「大丈夫だよ、君に手間はかけさせても、迷惑はかけない」

そんな当八さんの言葉に言い表せない不安を覚えながらも。

朝食後

小屋の主である監視役が台所で片づけを行っている間、元は既に小屋を発ち、二人の客人だけがのんびりとお茶を飲んでいた。

「あゝ、でも折角こういう所に来たんだから妖怪とか会ってみたかったなあ。」

あそこまで駄目だって反対しなくても……」

何も知らない外来人の青年はそう呟く。

妖怪、妖術、異種族、そういう言葉に好奇心と魅力を感じるのは珍しい事でもないだろう。

しかし、今台所にいる方の妖怪退治屋は分かってくれなさそうな
気もしていた。

どうにも青年には、あの少年が自分の考えに固まっている様に見
えていた、妖怪と人間が敵対するの当然だと思いこんでいる様に。
皆仲良く、それじゃあいけないのか…… 外の世界の当然の常識を
持つ者がそう考えるのはおかしい事ではない。

それを否定する様な考えに反発する事もまた……。

「まあ、そう言わないであげてくれ。

彼も君が心配だからあそこまで言っただよ」

「それは…… まあ、分かるすけど」

外来人の青年が先ほどの会話で比較的話が分かる方だと印象を受
けたもう一人の妖怪退治屋が話しかけてきた。

温厚そうな笑みを浮かべて彼は言葉を続ける。

「でも、そうだねえ。

彼ももう少し、あの一々気にする性格を直した方が良いとは思っ
けど」

青年は口に出して答えこそしなかったが、ああやはりと思う。
少年の妖怪退治屋の方はそういう性格だったのかと。
であるから――

「……君、妖怪に会ってみたいんだよね？
ちよつと良い方法があるんだけど、聞いてみないかい？」

変わらぬ人のよさそうな笑みを浮かべる『妖怪退治屋』の、そんな提案に心惹かれたのも仕方のない事かもしれない。

認識の違い・違いの認識

俺、当八さん、そして当八さんが連れてきた外来人の青年……お茶を淹れて一服した後、この三人で青年の今後の行動を決める準備の為に人里に向かった。

全員が外来人、オマケに二人は妖怪退治屋だ、そうそう良くある一行ではない。

だがまあ、このパーティ構成には問題もある。

全員が全員、幻想郷の妖怪の主食である外来人、オマケに一人は多くの人喰い妖怪に恐れられている『恐怖の駆り手』である。

勿論、『恐騎来寇』で立ち上がった妖怪ならば勝手に道を開けてくれるだろうが……基本的に妖怪は人を下に見るモノだ（そしてそれは大体正しい）。

更に頑として人との命の『取り合い』に拘り、スキマ妖怪の作った妖怪を幻想郷に取りこむシステムを掻い潜って外の世界に残り続けている妖怪に比べると、半ば与えられる様に人を摂る幻想郷の妖怪はその傾向が強い。

特に血の気の多い若い妖怪から見れば、俺達は腹も満たせるわ名も上げられるわ二つの意味でオイシイ相手だったりするかもしれない。

「停戦条約？ 何それ喰えるの？」をギャグでなく地で言う様な低級に限る話だろうが、警戒するに越した事は無いのだ。

「だから妖怪・隠しん坊の力を模倣した式を皆に付けたじゃないか、これを見破れる低級妖怪はそうはいないから、安心しなよ」

俺の考えを見通した様に、当八さんが言葉をかけてくる。

前衛の俺、後衛の当八さんに挟まれる位置で歩いている外来人さんは頭に？マークを浮かべていたが、気にせず対応する。

ちなみに人里までの道は徒歩である、当八さんの身を隠す式『隠くれんぼ之坊』はあくまで身を隠す式であり、能力を使って空中を行けばその気配で妖怪に見つかってしまう恐れがある……と当八さんが言ったからだ。

毒気や瘴気に関してはこれまた当八さん特性のマスクを付けているので、外来人さんも問題なく対応できる。

「隠しん坊……ああ、おぬの業ですか。

まあ、貴方の式に関しての实力は疑いませんがね」

「实力は、か……フフ、なんだか裏を感じる言い方じゃないかい？」

「……人の考え読んで話しかけてくる相手にはそういう言い方にもなりますよ、覚妖怪じゃないんですから」

「まさか、俺だってあの心を読む力はまだ完全には再現できてないよ」

「……そうですか」

俺はぶっきらぼうな返事しかしなかった。

なんだろう、こう、既に当八さんに騙されている様な……違和感があるのに、その正体が分からない、妙な心地がしているのだ。

……こんな不確定な動機で人に無愛想になる自分もどうかと思う

が。

「まあまあ、道はまだ長いんだ、そうピリピリせずに行こうじゃないか」

余裕のある、面白そうな当八さんの口調が俺の神経を逆なでするのだった。

「で、でもよかったんすかね？」

「大丈夫だよ、傍に誰かが寄れば術式は解けるようにしてあるし……彼だってそこの妖怪に奇襲されてやられる様なタマじゃない」

「いや、別にそう言う事じゃなくて……」

無縁塚の小屋から既に大分離れた位置、そこには二人だけの外来人の姿があった。

「えーっと、あの子、催眠術で俺達と一緒に人里行ってる夢見てるんすよね……お茶飲んだらすぐにコテンで寝ちゃって……いつの間の一服盛ったんすか？」

「催眠術とは的確じゃないな、正確には盛つてもいないし。」

「……僅かな可能性を用意して、その可能性が選択される可能性を上げる……分らないかな？」

「……ええ、全く」

「君にも分かりやすく説明するなら……昔ながらの漫画の主人公が絶望的な戦いに勝利するのに似てるかな？」

つまり、主人公が勝つ可能性は1パーセントだがその1パーセントが選択される可能性は100パーセントだってこと。

それが実際にも再現できるのさ……フフ、ちゃんと仕込んでおけば、だけどね」

「……全然分かりません」

『妖怪退治屋』の提案と策略で『恐怖の駆り手』を省いての移動である。

妖怪に会ってみたいという青年の願いを叶える為に特に姿を隠す術も用いず、徒歩でゆっくりと人里へと向かっている。

これならまず間違いなく、妖怪が襲ってくると思われたからだ。

そして、案の定妖怪が近寄ってくる気配を、当八は感じ取った。

「さあて、まずは話し合いがしたいのだったかな？ それなら俺の正体は隠しておいた方がいいだろう。」

ギリギリになったら助けるから、好きにやってみてくれ」

「え？ああ、はい、出会いがしらに食べられなければ説得してどうにかしてみたいな〜っと」

外来人がそう言い終わると、木の陰から人影が飛びかかって来たのは、ほぼ同時だった。

同時刻・無縁塚の小屋

「……ハッ!？」

「どーした？返事がないから勝手に上がらせてもらっただけだ。

あたしがここまで近づくまで気づかず昼寝とは珍しいね。

あんまり油断するなよ、アンタが隙見せたらここらの妖怪共は見逃さないだろうし」

意図せず、急に目の前の場面が切り替わる。

あまりに急過ぎて、俺自身で自分が『夢』から醒めたのだと気づくには少しばかりの時間を要した。

人里への道中を辿っていた最中だった筈だが……アレ、小野塚さ

ん？

ここは……無縁塚の小屋？……一体どうして……。

「目エ覚めたんなら茶あ淹れてくれさね茶あ、後昼飯適当に。
今日は朝から働いたからもうだるいのなんのって」

茶——その一言で全てを思いだした。

そつだ、俺、あの人が持ってきたお茶飲んでそのまま——

「があ！ど畜生、やっぱり既に騙されてたかッ！」

「うお！？な、なんだ？」

小野塚さんの驚きも気にせず、俺は垂れていた涎を拭って立ちあがる。

「——すいません、小野塚さん、急いでますんで。」

お茶はいつもの所にあるんで自分で淹れてください！
後、おにぎりが幾つか台所にアルミ——銀色の紙に包んでおいてあるんでよかったですらどうぞ！」

本当は外来人さんに持たせようと思って朝飯の残りで作っておいたものだが、この際それはどうでもいい。

今はそれどころじゃない。

「急いでんなら送ってやろうか？」

履物も履かずに飛び出そうとする俺を小野塚さんが呼びとめる。
意味が分からず、半ば振り返った姿勢で立ちつくし——しばらくの沈黙を経ても意味が分からなかったので、素直に聞き返す事にする。

「送っていくって？」

死神さんが言うつと洒落になりません、という後半は呑みこんでおいた。

「それでも三途の河渡しの船頭だからね、いいかい——」

「――へへ、じゃあ外の世界じゃあ、ただの人間がそんな事までできるのか」

「うん、科学が発達してるからね、まあ、その分弊害も出てる訳だけど」

適当に盛り上がった木の根に腰掛け、青年と少年と呼べる容姿の妖怪とが親しげに、とは言えないまでも友好的な雰囲気の中で会話をしていた。

突然襲い掛かって来た妖怪の牙にかかるギリギリで「ちょっと待ってッ！話を聞いて！」と差し止めたのが少し前。

それから興味を引けそうな話題を幾つか試してみても、やっとこの状態に持ち込んだ青年は内心で安堵、そして「やはり」という気持ちを抱いていた。

やっぱり話せばこんな風にすぐにも友人みたいになれるじゃないか、と。

そうしてしばらく話しこんでいると、何度目かの区切りのがついた所で、不意に妖怪が立ちあがる。

「面白い話をありがとくな、じゃあ悪いけどそろそろ喰うぞ」

人懐こそうな笑みを浮かべて自然に言うその様に、青年はしばらく言われた事の意味が分からず硬直し――やがて理解し、うろたえ

た。

「え、で、でも……今まで——」

「あゝ、そっか外来人じゃしらないよな、妖怪ってのは人を襲うんだけどさゝ、なんだか知らんけど人里じゃあ喰っちゃ駄目って事になつてて——」

妖怪が話し出したのは無縁塚の小屋で聞いた内容と殆ど同じであったが、それは青年の耳には届いていなかった。

あまりにも自然すぎるのだ。

人を殺す事が当たり前なっていて、それが自分の存在意義だと迷いなく言い放つ妖怪がいて——いや、あの少年に何度も念を押して説明されていたのだが。

でも、それは何か誤解を解く様に解決できると思っていた。

だが実際は違つのだ、それが『正常』、自分の考え方が『異常』、妖怪の所為にそれを悟り、不意に湧きあがる殺される事への恐怖に青年は言葉を失う。

「——ふむ、少なくとも一回目は失敗してしまったね。

だが気を落とす事はないよ、人同士でもこれくらいの価値観は中々埋まらぬものだし……。

まあ、これからは覚悟したまえ、君は『人間を止める』と同等の事を相手に求めようとしているのだから。

賭け金に命くらいは必要になるよ」

それまで二人から少し離れた位置に立ち、沈黙を守っていた『妖怪退治屋』が慰める様に言う。

その言葉に応える事もできない青年を脇目に、妖怪の方が注意をそちらに移す。

「ん？……なんだか良く分かんねえけど……なんとなく、お前から喰わせてもらう事にするぜッ！

安心しろ言葉交わした誼だ、骨は無縁塚まで持ってってやるからよォ！」

飛びかかる妖怪——先ほどの襲撃よりも速い、普通の人間ならば反応もできないその速度に『妖怪退治屋』は余裕の笑みさえ浮かべていた。

「正当防衛、成立だね」

微かに、その手元が動く。

妖怪と『妖怪退治屋』が激突しようとしたその瞬間。

『恐怖』がその場の全員の心をとらえた。
ビクリと震え、動きを止める妖怪と、青年、そして——

「おや、見つかってしまったか」

『妖怪退治屋』のその呟きにかぶせるように上空より漆黒の槍が降り注ぎ、妖怪と『妖怪退治屋』の間、そして周囲を封鎖するように突き立つ。

その内の一本、妖怪と『妖怪退治屋』の丁度間に突き立っていた槍の石突の上に騎士甲冑に身を包んだ『恐怖の駆り手』が見た目の装備の重量感に似合わぬ、軽いカシャンという音と共に降り立った。

「当八さん、その手に仕込んだ式、まさかとは思いますが『イコー・ゼロ』じゃないでしょうね？……過剰防衛ですよ、それ」

「まさか、ただ力を封じるだけの式だよ。」

だが、ふむ、そう誤解したとして……君の事だ、ここで一匹妖怪を始末するメリットとそれによる幻想郷の妖怪を敵対心を煽るデメリットをちゃんと天秤にかけた上で割って入って来たんだろう？
だとすれば聞いておきたいのだけど——」

「先に此方の質問に答えてください……なんでこんな事を？」

いきなりこれではショックが大きすぎるでしょう？

人里で安全に妖怪との接触を持った上で、その価値観を理解し、幻想郷の成り立ちに適応してもらった上で可否を判断してもらった行動だった筈です」

未だ『恐怖』の波が荒れる中であって、しれっとした様子で応える『妖怪退治屋』言葉を遮って『恐怖の駆り手』は問い詰める。

微かに怒気さえ感じ取れるその声色に威圧されたのか、妖怪が槍の間を抜けるようにして逃げ去って行ったが、向き合う二人の退治屋も腰を抜かした青年もそちらに注意を向ける事はなかった。

「おや、先の一件で学んだと思っていたのだけどね。

人の常識は簡単に壊れる、だがね、大抵人はその殻にしがみ付くんだよ。

平和が一番、それが当然というのは俺も好ましいと思うけどね。

他者がどれだけ恐かるうが苦しかるうが、その上に立つ自分が平和な限り伝わりはしない……君は例外なんだよ？

聞いただけじゃその恐ろしさは分かりはしないんだ。

……自分か親しい人間の一人でも殺されかけて『これが俺の存在意義だ』とでも宣言されて、どこからも異議が飛んでこない状況にでもならなければね」

思い当たる節があるのか、『恐怖の駆り手』のヘルムの内側から微かな唸り声が響く。

それに薄い笑みを浮かべ、『妖怪退治屋』は尚言葉を続ける。

「常識の殻を壊して、そのまま吹き飛ばすだけの荒療治が必要だったんだよ。

人里の中で学んだ新たな常識に従ってのんびり暮らしたり、すぐにでも外へ出て行ってくれるならいいけどね。

彼の小屋でのあの言動から、何かを勘違いして変な行動に出る可能性を否定できるのかい？

付きつきりで守る訳にもいかないんだ、それとも君は人里に彼を届けた時点で、もう自分の知った事ではないとでも？」

「中々極端な言い方をしますね。

俺だつて他の手段は思い付くんです……貴方ならもつと上手いやり方もあつたでしょう。

それとも、どうしても急がねばならぬ事情でも？

……他にやらなければならぬ事があるとか？」

『恐怖』の波が止み、槍と武装が霧散し、姿を露わにした少年が地に降り立つ。

その表情こそ、納得いかない感情を表していたが、一応相手の意図は理解したらしく、質問は答えを期待した様子はなく、ここで問答は終わ리と言つつもりらしい。

その様子に『妖怪退治屋』はやれやれ、と言つた様子でため息を付くと、少年とすれ違ふ様に歩いて行き、真横についたところで肩を叩き、氣遣う様な声色で言い聞かせる。

「まあ、折角来てもらつたんだ。

ここからは一緒に行こうか……つと、その前に彼を立たせないと……確かに少しショックが強すぎたかな、君の恐怖感染は計算外だったからなあ。

あゝ、そうそう君に聞きたかつた事だけど――」

真横に立つたまま、お互いに視線を交すことなく、言葉は続けた。
れた。

「妖怪の敵対心を煽る事を警戒するってことは、君は分かつてる訳

だ。

幻想郷の妖怪の人間を狩る事にかかる意気が、存在そのものをかけるにしてはまだ弱く、上がる余地があるって事が。

彼らを相手にするのはどんな気持ちだい？

外じゃ全身全霊を賭けてくる妖怪達に随分手を焼いていたようだし、楽になつていいと思うかい？」

「……さあ、正直な話、複雑すぎてなんとも言えませんよ。

ただ……やっぱり違うんだな、とは思いますが」

「……そうかい」

答える側はどこか影のある真顔を、それを受け取る側は余裕のある微笑を、対照的な表情で二人の退治屋はすれ違った。

結局、俺の乱入は変に場を乱してしまっただけの様で……俺は当八さんとあの外来人とは少し離れて後ろからついて行く事になった。恐怖感染で恐がらせてしまったので、しばらくは傍にいない方がいいだろうから、俺から言いだした。

あの外来人さんはどこか安堵した表情を隠せず、当八さんは「そ

う」の一言で表情は崩さなかったが……。

「……小野塚さん、俺、離れてくださって言いましたよね？」

「え？……や、やだなあ、なんの事だか——」

横には俺と微妙な距離を取っている小野塚さん、恐怖感染を使う前に離れていてと言った筈だが、こりやどうやら好奇心から傍で様子を窺っていたようだ。

……それだけビクつかれれば恐怖の『声』が聞こえなくても分かるっての。

「……そうですか。」

やれやれ、いけませんね、距離操って送ってもらっておいて指図して文句も付けるようでは。

重ねて、ありがとうございました」

「い、いや、それはいいんだけどな。」

……なあ、あの刺青のヤツ、人間……じゃないよな、何者なんだい？」

「……どういう事です？」

小野塚さんが少し遠くに見える人影の方に視線をやりながら、聞いてくる。

『妖怪退治屋』について説明しようとも思ったが、何やら様子

がおかしいので、続きを促してみた。

「ありや、生きてる人間が持つ魂の色じゃ——いや、少なくとも言葉が通じる存在の魂の色じゃないよ。」

怨霊も、それもとびつきりの恨み抱えて世界ごと呪ってやろうつてくらの怨霊のする色だ……理性なんてぶっ飛んでる筈なのに。

いや、それ以前に生者の魂はああは……」

「それは……どう、なんでしよう、あの人の事ですから魂の色くらい偽装——いやそれ以前に——」

『妖怪退治屋』。

果たして本当に体に式を仕込むだけで長大な寿命など手に入るのか、それならば魔法使いだけでなく、幾らかはそういう存在が出てきても良い筈だ。

式の天才だから……その一言で済ませる事もできる、だが、果たしてそれは人間、そして妖怪と何がどれだけ『違う』のか。

当八さんを信じるべき疑うべき以前に、どういう存在か……もしかしたら、俺はそこからまるで分かっていなかったのかもしれない。

認識の違い・違いの認識（後書き）

こっそり。

投げ出したつもりはないんです。

色々ありまして、不定期更新は抜けだせそうもありませんが、少しずつでも話を進めていこうと思います。

今更、読んでくださる方がいればどうぞよろしくお願いします。

人間と『妖怪退治屋』

人里・入口付近

「さて、さっさと戻っちゃってもいいんだけど……どうしたもんかな」

俺は一人で立ちつくし、呟いた。

というのも、里に辿り付いて——というより辿りつくその直前に、俺達の目の前にスキマ妖怪・八雲紫が現れて当八さんを連れて行ってしまったのだ。

「貴方と顔合わせると不味い妖怪も結構いるのよ。」

自分がどんな退治屋か……自覚がない訳じゃないでしょ？

人里でばったり……なんて止めて欲しいのよ。

……『正当防衛』がしたい訳でもないでしょう？」

「あゝ、そうだったね、まるで思い付かなかったよ。」

当然、俺だって揉め事は無い方がいい……まあ、有るなら避けたいとは思わないけどね」

「そう……ならちよつとついて来てくれるかしら。」

確認したい事があるのよ、貴方の今回の目的についてね。

……監視役御苦労さま、でもコレの監視はちよつと貴方には荷が

重いと思うわよ？

今回は大人しくしておきなさい」

そんなやり取りの後、コレ扱いされた当八さんも嫌な顔もせずそのままついて行ってしまったし、

外来人さんには上白沢さんの所までの道順と伝言を教えて一人で人里の中に入ってもらった。

上白沢さんやシュウトさんに顔を見せていくにしても、あの外来人さんと同じ場所に居るのは可哀そうだし、藤原さんは毎度人里にいる訳じゃないし。

「帰る、か」

呟いて、踵を返す。

小野塚さんは……少なくともしばらくは俺と会いたくないだろうから、勝手に上がり込んだりはしてないだろうな。

でも朝からドタバタしちゃったし、色々やるべき事は残ってる。

それに元さんが来てれば当八さんの事も聞けるかもしれないし――

「あら、キョウ――監視役じゃない」

どうしたの、人里に用でも？」

そこまで考えた所で声をかけられた、見やってみれば藤原さんが

いる。

……キヨウ呼ばわりについ俺が嫌な顔をしてしまったからだろう、慌てた様に訂正が入った。

「まあ、一応……もう終わってしまったのですが……」

待てよ、そう言えば藤原さんも魔法使いでもないのに寿命を取った人間だよな……。

確か、事前調査の時に元さんから聞いた通りなら……有史以前の旧人類の生き残り、月人の業に依るモノだったか。

元さんの情報ソース元も気にはなるが、とりあえず、聞くだけ聞いてみるか。

「すいません、藤原さん。

五七間 当八……『妖怪退治屋』という存在について、何かしりませんか？」

「どうかしら、この幻想郷は？」

ある意味、貴方もここの生みの親とも言えなくもないのだから感想くらい聞かせて欲しいわね」

「ある意味？……どういう意味か分からないな。
まあ、思ったより妖怪の数が多くようで残念だよ、もう少し間引いておくべきだったかな？」

……暗闘の時代に入ると退治屋側も戦力不足だったから仕方ない
と言えばそうかもしれないけどね」

人里から少し離れたただけの草原の上で、二人は言葉を交していた。
八雲紫は楽しそうに『妖怪退治屋』を見つめながら、

『妖怪退治屋』は何処と言う訳でもない風景を眺めながら。

「良く言うわ、戦力不足だって殆ど貴方の所為でしょうに。
……で、どうだったの、あの子は貴方の望む妖怪退治屋になっ
た？」

「……いや、彼は妖怪退治屋と言っべきじゃないな。
妖怪退治ができるだけの……ただの人間だよ」

『妖怪退治屋』は真顔でそう呟き、そして不意に笑みを浮かべて
続ける。

「……俺は予定通り行動させてもらっよ。
君はこれまでの様にそれに合わせて勝手にやりたい事でもやれば
いい。」

俺の言葉ほど信用できないモノはないだろうからね、よく自分で
判断して動く事だ」

「あら、私は貴方の事は人間よりは信用してるわよ。

……ふふ、それにしても残念だったわね、あの子に嫌われちゃったんじゃないかしら？」

それとも、今更それくらい気にする貴方でもない？」

そう言いながら、八雲紫は目の前の『それ』が未だ人間だった頃を思い返す。

妖怪の害が当たり前の時代、強き者を連れ去る鬼の間接的被害も深刻なものだった。

だが、人間の誰もが抵抗など諦めていた。

当たり前だろう、『最強』を傷つけ得る『所謂』など、一時代に
いるかないかの英雄が備えるのみ。

山をも砕く力を持ち、剣戟も通じぬ相手に、ただの人間がどう
うなど出来る訳はない。

神仏の助けもありはしたが、決して十分とは言えなかった。

そんな中で唯一、彼とその仲間が『鬼退治』の方法を見つけよう
と全てをかけていた。

犠牲の山を築き上げ、誇りや尊厳などうち棄てて、妖怪達の力の
意を読み解き、やがて辿りついた。

英雄や妖怪の力をただの人間が再現する『式』と通じ得る『戦術』
、その組み合わせ方に。

それは鬼に対するのみでなく、妖怪と人の関係自体を大きく変え
るものだった。

彼らのお蔭で、妖怪が人を喰らい、英雄が妖怪を退治し、人が英

雄を制御する時代は終わり、
妖怪退治屋達と妖怪達の渡り合う時代が到来した。

やがてその戦いは妖怪退治屋達に有利に推移して行く。
そして、最大の驚異の一つであった鬼達が段々と姿を見せなくなる中で、その事件は起きた。

ある鬼退治の直後、彼とその仲間たちに妖怪退治屋ではない人間達が攻撃を加えたのだ。

やはり人間こそが最も恐ろしい、そう言いながら。

妖怪退治屋の鬼退治は大抵、卑怯で、えげつなく、とても目を当てられるモノではない。

対して、鬼は正々堂々、嘘もつかず、奇襲もせず、戦場にあつて憧れすら抱かせる威風と矜持があつた。

……既に妖怪退治屋は優位にたっていた。

一人の英雄が連れ去られれば甚大な被害の出た昔とは違う。

多数いる妖怪退治屋の内から強力な者がある程度連れ去られようが、残された者が後を引き継ぐ事で人間は他の妖怪から守られる。

……ただの人間にとって、もう鬼は恐怖と嫌悪の対象ではなかったのだ。

被害を受けるのは退治屋だけなのだから。

ならば、鬼退治を目にした人間が、鬼の人攫いよりも退治屋のやり方に恐怖と反感を抱くのも道理。

そうして、人の為に多くを捨てた彼らは、その守りたいと思った人々によって否定された。

……人間の彼が『妖怪退治屋』と化したのは、それからすぐの事だ。

その『妖怪退治屋』は、まるでスキマ妖怪の回想の終わるタイミングを図ったかの様に間を空けて答える。

「確かに俺は気にしないが……彼の方はどうだろうな。

まあ、今はそんな事を考えていても仕方ない、それより約束通り連れて行ってくれ。

旧地獄……鬼の住処まで。

誰の目にも付かない様に、ね」

整った顔を歪ませるその笑みには人を捨てたとも、ある意味人間らしいとも言える執念の色が見て取れた。

なんで俺が藤原さんが長く生きてきた人間だと知っているのかという疑問からか、

少しばかり怪訝な表情はされたが、それでも藤原さんは話を聞かせてくれた。

——まあ、私も直接会った訳じゃないのよ、ただ旅してる時に人伝に聞いた範囲の話なんだけど——

そんな前振りの後で、藤原さんは語りだした。

——式の天才、刺青の美青年……その特徴に当てはまる人物の噂なら何度も聞いたわ……名前は毎度変わっていただけ。

元は随分と昔の人みたいよ……元々は征夷大將軍、田丸將軍の参謀だったみたい。

日本本州そのものと力比べしようとして転覆させかけた大鬼、大嶽丸の討伐で色々と暗躍した人物。

一部の妖怪や英雄の力を、ただの人間でも努力すれば習得できる式に表わす事に成功して、それから長大な寿命も得た。

妖怪……特に鬼との戦いに大きな影響を与えた偉大な妖怪退治屋、それが最初に聞いた話だったわ。

でも、鬼が姿を見せなくなつた辺りからかしら、変な噂が混ざり始めたの。

他の妖怪退治屋を暗殺してるだとか、自分や仲間が開発してきた式や対妖怪の戦術をそれを伝える資料や人物ごと消してまわってるだとか……。

まあ、私もしばらくしてこっちに流れ着いちゃったからそれから先は知らないんだけど——

その話は直接『妖怪退治屋』の正体に結びつくものではなかったが、

俺の中に一つの仮説を生み出していた。

……あまり考えたくはないが可能性に目を瞑る訳にもいかない。当八さんに直接確認してものりくらりとかわされるだけだろうし、元さんか……場合によっては八雲殿に話を聞きに行く必要があるかもしれないな。

そんな事を考えながら帰宅した俺だが、小屋のドアを開ける直前になって図らずも思考を切り替える。

「そついや、お昼御飯なんにしよう？」

もうそんな時間だ。

時刻を意識すると急にお腹がすいてくる。

……作るの、めんどくさいな……そうだ、朝のおにぎりがあったな、あれで済ませちゃおうか。

もしかしたら小野塚さんが持ってちゃったかもしれないけど……そんなときゃそんな時で。

そう適当に結論を出してドアを開ける。

「……」

「……」

そんな俺を腕組みした小さな女の子が出迎える……目の前にナズ様がいた。

「へ？……あ、あの――」

な、なんだろう、遊びに来てたのか？……それより、確か昔のナズ様って機嫌が悪い時はあやつて腕組みしてたような。
何か叱られる様な事が……玄関の履物の向きを揃えてなかったのがまずかったのか？

「何か、言う事無いの？」

「……ご、ごめんなさい、分かりません……。
分からないけど、その、分からないから、ごめんなさい」

分かってないなら謝るな、逆に失礼だろうが、という意見もあるだろうが、失礼ならば失礼で謝らねばと思うのがチキンの心情である。

そんな俺の狼狽した謝罪の言葉にナズ様は一瞬少し驚いた顔をして……。

ついで呆れたような、それでいて優しそうな笑みを浮かべてため息をついた。

「やれやれ、帰ってきたら、ただいま、だろう？」

「え？……あ、ああ、はい、ただいま」

「ん、おかえり……お昼御飯は食べてきたの？」

「いえ、先ほどまで別の事を考えていたので……でも朝ご飯の残りでおにぎりを作っておいたので――」

「あゝ、それなんだけどね……ほら、ウチの子達って食欲旺盛だから……」

頬を掻きながら、バツ悪そうに言うナズ様の尻尾にかかったカゴの中から小ネズミ達が顔を出す。

「や、どうもごちそうさん」とでもいたげなその顔には海苔がついてて……。

「成程……まあ、構いませんよ。」

この前来てもらった時にはこいつらには適当な温野菜出ただけでほったらかしにしていたので、

ちよつと悪いなと思っていましたし」

「そうか……代わりと言っちゃなんだけど、丁度あった食材で私がお昼御飯作っちゃったから……無駄にならなくてよかったよ。」

今日は私は仕事が休みだからさ、良い機会だから君の日常生活でもちよつと見直してやろうかなと思ってね」

「む……お、お手柔らかにお願いします」

……随分と昔の事を思い出させてくれる。

気持ちは嬉しいんだが……問題、なかったっけなあ、俺の生活お菓子禁止令とか出ないよな……多少の塩分糖分の過剰摂取は運動もしてるって事で流せて貰えるだろうか、それから――

「ほら、いつまで突っ立てるの？」

ヒトを待たせるのは感心しないな」

「あ、すいません、今行きます」

どうやら俺が来るまで自らの昼食を我慢してくれていたらしいナズ様に心で感謝を表しつつ、

奥へと歩いて行くその背中を慌てて追いかける事にした。

……当八さんの事も考えなきゃいけないが、正直少し煮詰まっているし、素直に厚意に甘える事にしよう。

そう考えた途端になんだか少し気分が軽くなった心地がした。

だが……俺はあまりに甘かった。

たった数秒後には、それを思い知らされることになる。

「や、野菜づくし……だと？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386o/>

東方恐騎行

2011年7月27日22時34分発行